

やはり俺のクロスオーバーはまちがっている。

洗剤能力

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『比企谷八幡』

彼は選ばれし者。

12人の世界を救う者の一人として。

これは選ばれた12人の者達が、世界を脅かす魔王軍に立ち向かう王道物語。

※注意事項※

この作品は、不定期更新の多重クロスオーバーになります。

ですので、作者の好きな沢山の作品のキャラが味方、敵として登場します。

ご理解の方、よろしくお願ひします。

◆現在書き貯め中◆

目次

登場作品・登場人物一覧／ステータス

1

序章

第1話：別れ

7

第2話：異世界召喚されてました(強制)

制

19

第3話：異世界ゾディアック

30

第4話：俺がチートだった件

46

第5話：神様からの依頼

61

第1章

第6話：コヒキア王国

73

第7話：冒険者組合

86

第8話：新人潰しギルド、え？

100

第9話：人生は苦いから

117

第10話：異世界にダンまちを求める

のは間違っているだろうか

128

第11話：ぼっちに自己紹介は難しい

(2回)

140

第12話：命の軽さと重さ

156

第13話：おれは、ひとごろし

170

第14話：闇

190

第15話：言葉は偽りで出来ている

第16話：そんなに欲しいなら勧誘し

てみろ

219

登場作品・登場人物一覧／ステータス

【登場作品一覧】

※ネタバレはしたくないので名称等は人物登場後に追加していきます。定期的に更新していきますので楽しみにしていてください※

【以下既に登場したタイトル】

《やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。》

《ノーゲーム・ノーライフ》

《ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか》

《ソードアート・オンライン》

【称号：十二宮】

※これは、物語を読むにあたって主要となる12人です。登場し次第、更新してきますので楽しみにしていてください。

【称号：十二宮】

① 牡羊座（アリエス） 《キリト》

作品名《ソードアート・オンライン》

② 牡牛座（タウラス）

作品名

③ 双子座（ジエミニ）

作品名

④ 蟹座（キャンサー）

作品名

⑤ 獅子座（レオ）

作品名

⑥ 乙女座（ヴァーゴ）

作品名

⑦ 天秤座（リーブラ）

作品名

⑧ 蠍座（スコルピオ）

作品名

⑨ 射手座（サジタリアス）

作品名

⑩ 山羊座（カプリコーン）

作品名

⑪ 水瓶座（アクエリアス）

作品名

⑫ 魚座（パイシーズ） 《比企谷八幡》

作品名 《やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。》

【ステータス一覧】

● 比企谷八幡

レベル：0

職業：勇者

スキル

《孤独に認められし者》

早熟する。

単独での戦闘時、全能力向上。

パーティー参加不可となる。

《理性の化け物》

モンスターオブセンス

戦闘時における、身体能力向上。

頭のキレが良くなる。

他人の感情を読み取る事が苦手になる。

《消滅ステルしつつある存在スヒツキ感》

隠密行動の効果超向上。

察知系統無効化。

常時、存在感が薄くなる。

《死アンんだ魚ノウのような眼アイ》

状態異常無効化。

異性からの評価補正。

目付きが悪くなる。

《極マツ甘珈琲カ創造カ》

極甘珈琲を創造できる。

能力

《闇ダークの炎フレイムに抱マスマスターかれて消ダーえろ》

闇属性魔法使用可。

一定時間、ダークフレイムマスター化。

●ダークフレイムマスター化

身体能力と魔力の超絶向上。

闇魔法威力超向上。

常時、闇魔力障壁展開。

闇炎の支配者へ衣装チェンジ。

中二病となる。

【その他登場人物（現段階）】

●テト《ノーゲーム・ノーライフ》

●エイナ・チュール《ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか》

●ミア・グラント《ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか》

●アーニャ・フローム《ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか》

●リユール・リオン《ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか》

●アスナ《ソードアート・オンライン》

●デス・ガン（赤目のザザ）《ソードアート・オンライン》

- ジョニー・ブラック 《ソードアート・オンライン》
- ヒースクリフ 《ソードアート・オンライン》

序章

第1話：別れ

「おめでとう、少年。君は選ばれた」

「??え?」

それは夕焼けの綺麗なある日のことだった。

突然後ろから肩を掴まれ、耳元に聞こえてきた声に、俺は反射的に振り向いてしま
う。

それは内容からして意味不明だったが、その声はどこかで聞き覚えがあった。

けど、振り返った後ろには誰もいなかった。

でも、肩に置かれていた手の感触というか余韻は、未だに残っている。それに確か
に声も聞こえた。幻聴の類いではない、はず。

??まさか新手のイジメとかじゃないだろうな。それも、顔を見せないなんて、手が
込んでいる。

やだそんなの八幡こわい。

「??んぱい! 先輩!」 反応しないなんて、どうしちゃったんですか? それに、いき

なり後ろなんか振り向いちやつて、何も無いじゃないですか」

だが、隣を歩いていた一色のおかげで、冷静になれた。というか、頬を膨らますな。あざとい。

どうやら、あのままずっと後ろを見て、立ち止まっていたらしい。

「ああ、そうだよな」

そんなの自分でもらしくないと思う。そんな些細な事、いつもは気にしないのに、何故か忘れられない。

それに、ポツチで鍛えられた直感が、嫌な予感を告げている。ちよつと不安になってきたな。

「??一色。荷物、持つぞ」

「え、ええ!? あつ、もしかして今のつて口説こうとしてましたかごめんなさいそういうシチュ妄想したことあるし一瞬ときめきかけたけど冷静になるとやっぱ無理です。ごめんなさい」

そう言つて一色は頭を下げ。チラチラと俺の方を見てくる。

てか、告つてないのに、やっぱり振られるのか。毎度のことだが嘸まずによくあの早口で喋れるものだ。

俺は黙つて一色の荷物を受け取る。

何だよ、どうせ持つのか。まあ、気を紛らわす為にいいだろう。

それから荷物を渡す時、一色は何か言いたげにしていたが、気にしちゃダメだ。どうせ、休日が潰れることになる。

それに、今日の俺はどうかしてる。

さっきの声もだし、疲れているんだろう。

さつきまでの海浜総合高校との合同生徒会イベントの打ち合わせは、色々大変だった。一日目だと楽観視していた俺が間違いだった。本当に。

本当にあの打ち合わせ、まじウケるわ。全く会議にまとまりが無くて八幡頑張っちゃったし。そんな八幡なんてらしく無さ過ぎて、八幡超ウケるんですけど。

??重症かもしれないな。早く家帰ってプリキュアでも見よう。

「??んばい！先輩！歩くの速いですう。上げてから落とすなんて、何でそんな意地悪するんですかあ。あつ、まさかこれも口説いてるんですか？先輩これ知ってますよ。上げてから落とすとかですよね？ごめんなさい正直やり方が子供っぽくて先輩らしくないしほんと気持ちが悪いのでまだ無理です」

うん、あざとい。それにまた振られるのね。

というか、無意識のうちに歩く速度が速くなっていたのか。自分でも気づかなかつた。

これは、一色に悪いことをしたな??。

「すまん無意識にな。お詫びに??今度何か奢る」

「ふえ!? せ、先輩本当に変ですよ! 嬉しいんですけど、ほんと嬉しいんですけど、やっぱりおかしいです! だから、いりません!」

いや、別に普通だろ??まあ、いい」

口ではそう言ったけど、俺もおかしいと思ってるんだ。

本当に俺らしくない。俺は一色と目を合わせるのが耐えられなくなって再び歩き出す。

すると次の瞬間、手の裾の部分を何かに掴まれた。もしか、さっき肩を掴んだ犯人かと俺は急いで振り返ったが、そこにいたのは顔を赤くした一色だった。

「あ、あの??そのかわりに、なんですけど、今度私の買い物に、手伝ってください」

その時、一瞬俺の頬に熱が帯びたのは、何かの間違えだ。多分、夕焼けのせいだと思ふ。そう、断じてときめいたとかではない。

そんなこんなで、俺たちは駅までやって来れた。

「ではでは、先輩! 明日もよろしくです! そ、それから買い物の方も忘れないうで下さいね!」

敬礼しながらのウインクに、可愛らしい笑顔。そして、一色はほんのりと頬を赤く

している。

これが、一色の計算し尽くされたあざとポーズだとは分かっている。

けど、相手が悪かったな。鍛え抜かれたエリートボッチである俺じやなく、そこらに居る男子だったら一色に落ちていた。

いや、中学の俺だったらここで告って振られている。って結局振られるのか。

そう思いながら、俺は一色が見えなくなるまで見送った。

何だか、今日一緒に一色と、帰れて良かったな。

~~~~~

「ただいま」

「お兄ちゃん、おかえりー！ 今日、いろいろはお義姉ちゃんと帰ったんでしょ？ ねえねえ何かあったー？ というか、もうそろそろ小町を紹介してくれてもいいと思うんだけど。小町はいつでもウエルカムだよ、お兄ちゃん」

「いや？何もねえし、何がウエルカムだ。俺は駅まで送っただけだ」

玄関までお迎えに来てくれた小町には悪いが、俺はそう言って自室へと向かう。早くベッドに行つて寝転がりたい気分だ。

「ええー！ お兄ちゃん、そこは家まで送ろうよ！ 小町はどのお義姉ちゃんも大好きで公平な立場だけど、お兄ちゃんには、本当に幸せになって欲しいって思ってるんだか

らね。あつ今の小町的に超ポイント高い」

「あーはいはい。そうだな」

道中に何か小町が言っていたので、適当に相槌を打つ。それより、もう疲れた。早くベッドに向かわねば。

「はあく。これだから、ごみいちゃんは??分かってないんだから」

後ろから小町の溜息混じりの声が、聞こえるが無視。そんな元気は俺には残されていない。

「お兄ちゃんに足りないのは、押しだよ！ 押し！ それさえあれば、今頃は??はあ。部屋行ったら誰かに電話でもしてみることだよ。小町が思うに上手くいくと思うよ？」

すると、最後に小町の必要ない助言が聞こえた。いつもなら、流すようなものだったが、何故か耳に残った。

「??電話か。俺からした事なんて無かつたな??小町、受験勉強頑張れよ。何かあつたら言ってくれ。お兄ちゃん、高校で待ってるから」

「え、えええ。発言がシスコン過ぎて、キモいよお兄ちゃん。でも、まあ勉強頑張るね！ 待つててお兄ちゃん！」

振り返ると、笑顔の小町。不覚にも可愛いと思つてしまった。けど、それを見て俺は何か安心できた。だから、頷いて俺は部屋へと入った。

考えてみると、小町の助言の中の『電話』には何かを感じた。

しなければ、後悔するような何かを。それが何かは分からないけど、俺の求めている物へ近づくなら。

そう思いながら、俺はベッドに寝転がる。

寝転がると、かなり重い睡魔が襲ってきたが、携帯を手に取り、連絡先をしてみる。所詮エリートボッチである俺だ。すぐに数えられる程度しか電話番号は入っていない。

その中でも、俺が一番目に入ったのは『由比ヶ浜結衣』。

何故か喋りたいなと思った。

やっぱり俺らしくないと思う。でも、俺はいつ頃からかあの二人と居ると何か掴めそうな気がした。それが何かはまだ分からない。

けど、俺はそれを心の底から欲しいと思った。

ピピッピピピ、プルルルプルルルッ??

なんかこの待ち時間って緊張するな。

??プルルルッガチャ!

「ひ、ヒッキー!?! どうしたの!?! ヒッキーから掛けてくるなんてっ」

??何故か繋がって早々、由比ヶ浜の様子がおかしいけど、気にするだけ無駄だろう。

馬鹿につける薬はないのだから。

「いや、なんだ。由比ヶ浜と話したいなと思ってな」

「ふえ!?! ひ、ヒツキー本当にどうしたの!?! ヒツキーなんだよね? 本人? 私と話  
したいだなんて?! えへへ」

けど、由比ヶ浜のおかげで、俺の緊張も少し和らいだ。それに、何故か由比ヶ浜の  
声を聞けて、良かったと思っっている自分がいた。

それから、俺は由比ヶ浜と色んな話をした。

世間話だったり、学校の事、生徒会イベントの事や流行の事、雪ノ下の事もあった。  
そんな事を話していると、時間はあつという間に過ぎていった。気付けば、二時間  
近く話していた。こんなに長電話をしたのは人生で初めてだった。

そんな電話も、もうそろそろ満足してきたのか、終わりが近づいていた。

「あはは、最初に戻るけどさ。まさかヒツキーから電話掛けてくるなんて思わなかった  
よ。明日ゆきのんに自慢してみようかな。ゆきのんにも掛けるの?」

「雪ノ下か?! いや、お前だけだ」

詳しく言うなら、電話しなかったけど電話番号知らないんだよね。てへっ。

「え? ??ヒツキーその言葉??ずるいし」

「ん? 何か言ったか?」

「い、言っていないし！ ヒツキーのバカ！」

俺は、いきなり由比ヶ浜の声が大きくなって、思わず携帯を耳から遠ざけてしまった。

というか、突然人をバカ呼ばわりなんて、俺が悪いことをしたのか。解せぬ。

「でも、その??ヒツキー??電話掛けてくれて??ありがとね。最近は、あんまり話せてないし、電話越しだけど話せて良かったよ」

「あ、ああ。俺こそ由比ヶ浜と話せて良かった。話したかったからな。そ、そのなん、だ??楽しかった。ありがとうな由比ヶ浜」

「??う、うん！」

その時、由比ヶ浜の満面の笑みが思い浮かんだのは、俺だけだろうか。少しドキツと来てしまった。

らしくない俺。また明日も会えるというのに。

「じゃあまたな、由比ヶ浜」

「えへへ??あつまたね！ ヒツキー！ この後ゆきのんにも電話掛けるんだよ！」

そう言われて俺は咄嗟に返事というか、雪ノ下の電話番号を聞こうと思ったのだが、遅かった。電話は切れてしまっていた。掛け直すことも出来るが、何故か掛ける気が出なかった。

そして何故か電話し終わった瞬間、どっと疲れが押し寄せてきたが俺は耐え、先程までのことを思い返す。

何はともあれ、由比ヶ浜と話す事が出来て、本当に良かった。俺は純粋にそう思った。らしくない、けど心は何だか温かった。

あと余談だが、電話の途中に一回トイレに行く為、部屋を出た際、廊下にいた小町が俺を見てニヤニヤしていたのをよく覚えてる。何かいい事でもあったのだろうか。「あと、やり残したことと言えば??雪ノ下か。こんなことなら最初、由比ヶ浜に雪ノ下の電話番号聞いておけばよかった」

ベッドの上で仰向けになり、そう呟いてみるが、もう手遅れ。日頃から聞かなかつた俺も悪い。

「我儘を言うなら、最後に雪ノ下とも話したかったな」

そう言つて、俺は目を瞑る。

すると、浮かんでくる雪ノ下の顔。

部屋に入る度、罵声を飛ばしてきたりするけど、何だかんだで今になって懐かしく思う。決して俺はドMじゃないが。

けど思い返すと、雪ノ下とも色んな事があつたな、と改めて思う。

そして、脳内に思い浮かぶ雪ノ下。それは色々。

静かに本を読んでいる雪ノ下。由比ヶ浜と一緒に喋る雪ノ下。猫とじゃれ合う雪ノ下。一回思い出すと、溢れ出てくる記憶。それも雪ノ下だけじゃない。

俺は高校で、沢山の思い出を作った。それこそ、沢山の人も関わった。

それは、全てが決して良いものばかりではなかったけど、俺にとってはその一つ一つがかげがえのないもの。

特に奉仕部に入ったのは、運命のように感じる。

あの部室で過ごした日々は心地よかった。

もし俺は許されるのならば、あの場所——奉仕部に居たい。

まだ居座りたい。

ずっと居座り続けたい。

そこでなら、俺は“本物”を見つけられるような気がするから。

??何回も言うが、もう疲れた。体に力が入らず、ベッドに深く倒れ込んでしまつて

いる。それに、気を抜くと目が閉じてしまう程に凄く眠たい。

『それじゃあ行こうかッ！ 僕の世界へッ！』

??ん？ 今なんて？ 僕の世界？ 行く？

突如、脳内にあの時の聞き覚えがある声があるが、聞こえた。

しかし、ああだめだ。それ以上何も考えられない。俺の意思とは別に、意識が遠のいていく。これを止められることは出来ない。

そうして俺——比企谷八幡の意識は完全消えた。



## 第2話：異世界召喚されました（強制）

突然だが、『目が覚めたら空から落ちていた』なんて経験をした事がある人はいるだろうか。

俺が思うに、世界中を探しても、そんな超激レア体験した人は少ないと思う。

高所恐怖症の人なんかは、目を開けた瞬間、また意識を失うんじゃないかって思う。というか、そんな経験している時点で、何かしらのやばい事件に巻き込まれていると断言出来る。勿論、良い意味ではなく、悪い意味で。

なら、今の俺の状況も、良い意味には思えない。

何故なら俺、比企谷八幡は今、空から落ちている。

いや、目を開けた時は自分の目を疑った。さっきまでベッドの上にいたから。それで、最後にあの声が聞こえて気が付いたら、お空の上だった。

いきなり上空から落下とか、危うく再び意識を失うところだった。ポッチには刺激が強すぎる。

そして何故か俺には、この状況に何となく心当たりがあり、予想がついている。いや、ついてしまった。

その予想は、あまりに非現実的過ぎて確信が持てないが、隣の人物を目にしてからは、それを否定する要素が消えてしまった。

なので、聞いてみる事にした。やっぱり初対面だと、緊張するが、仕方がない。

「す、すみましえん、こ、この状況についての説明が欲しいんですけど」

??とりあえず、穴があった埋まりたい。

噛んでしまったが、言いたい事は伝えた。

隣にいる人物なら絶対に知っているはず。けど、その人物はニコニコしているだ

け。絶対この状況を楽しんでやがる。

確かにこんな状況に突然陥れば、普通はパニックになると思う。

さつきまでベッドで寝ていたの、これは夢の可能性は否定出来ないが、風圧や風を切る音、壮大な景色など、ここまでの現実感を再現されると、夢だとは思えない。ボツチによって鍛えられた勘が現実だと告げている。

当然、遙か上空からの落下に耐えられるとは思っていない。現に今も本能で命の危機を感じている。

現実だとしたら、俺の命は持ってあと一分もないだろう。

なら、現実だとしたら何故パニックになつてないのか。

それは、助かるという確信は持っているからだ。

俺らしくないと思う。初めて会った赤の他人を信じるなんて。

けど会ったことはなくても、この隣にいる中性的な人物だが見覚えがある。

数少ない現実の知り合いというわけではないし、ネットゲなんかのゲームでの知り合いでもない。遠い親戚ってわけでもないし、知り合いの知り合いってわけでもない。

でも、知っている。

まず、その人物を見た瞬間、『何でコイツが現実にいるの』と思った。

それと同時に、あの時の声の主にも合点がいった。道理で聞き覚えがあるはずだ。

この前、スマホで見ただけだから。

知り合いではない。なれるわけではない。

俺が一方的に知っているんだ。

そして、この人物には前例がある。

「おっと、もうそろそろ地面だね」

そう言われ、俺は地面スレスレで停止させられる。

やっぱり止めてくれたようだ。少なくとも敵じゃないと思う。というか、素人が戦ってどうにかなる存在じゃないだろう。

そう考えてみたら、落ち着いてきた。

それに目の前の人物も、画面の奥の存在だと思いと余裕が出てくる。だから、踏み

込んでみる。

「??とりあえず、テト。状況を説明してくれ」

「そうだね、ん？　ん？　僕、君に名前教えたっけ??あれ。な、何で知ってんのさ！

え、どういう事??え？」

「どうやら、かなり動揺してくれたようだ。これは、神様に一杯食わせれたかな。

ちよつと嬉しいな。

「というか、俺自身もかなり動揺しているんだぞ。」

「何でフィクションである『ノーゲーム・ノーライフ』に登場するキャラクターが目の前にいるんだ。」

「彼、彼女というべきなのは分からないが、この人物は、間違いなく『テト』。」

「『ノゲノラ』に登場する唯一の神。ディスボードと呼ばれる異世界の神様。さらに、原作でもまだ謎に包まれていて、ラスボス的存在。」

「そして何より、主人公『<sup>空白</sup>』を自分の世界に連れてきた張本人。」

「それが一体どうして、今まさに、そのポジが俺なのが分からん。都市伝説になるようなゲームでもない。小町とゲームする事はあっても、互いにゲーム漬けの生活を送ってるわけじゃない。」

「それにもしも、『<sup>空白</sup>』とゲームする事になったら、瞬殺される自信まである。」

俺と小町は固い絆で結ばれた千葉の兄妹だが、あそこまでチートなゲーム兄妹ではないんだ。

「というか俺は、『<sup>空白</sup>』と違って学校にちゃんと通っている。」

俺は、ボツチはボツチでも学校へは行くボツチなのだ。どこかの引きこもり共とは違う。ココ重要。

「というか、『ノゲノラ』ってフィクションじゃなかったんだな」

俺はそう小さく呟く。落ち着いてはいるが、俺もまさか、テトが実在するとは思わなかった。当たり前だ。これが材木座なんかだったら、興奮して発狂している様子が目に浮かぶ。

「??想像しなければよかった。」

すると、テトも余裕を取り戻してきたのか笑い始めた。

「アハハッ。君、面白いね！ やっぱり呼んで正解だったみたい。僕が想像した以上に興味深い。それに、僕の事を知ってる事もだし、この状況に動じない。実に面白いよ！」

動じてない訳では無いが、褒められたのだろうか。でも、確かに自分でも驚く程落ち着いている。

もしかして、自覚がないだけで俺自身、異世界に来れた事を嬉しがっているのかも

しれないな。俺も人の事を言えないようだ材木座。

「そういえば、紹介が遅れたね。僕の名前は、『テト』。君の言った通りさ。それでいて神だ。この世界『ゾディアック』のね」

「??ええつと『デイスボード』じゃなくて、ですか?」

「つ?! 何でその名前を?!!」

はい、本日二度目の驚き顔、頂きました。

反応を見るからに、存在してそうだな。

「君には聞かなければいけないことが、沢山あるみたいだね」

テトは宙に浮き、笑いながらそう言った。

そう言われても、ラノベで読んだり、アニメを観て知りませんでしたなんて言っていないのか。

テトは、俺に『何か』を求めている気がする。けど、俺はただの一般人。ぼっち体質なただの高校生。ラノベみたいに関かしの能力を持っているわけでもない。

もしかしたら、異世界に来たことで俺の中に眠っていた能力が開花した可能性もあるが、そんな不確定要素は頼らない。

その間にも顔を近づけてくるテト。

見た目が少年っぽい分、新しい玩具を手に入れた子供みたいに見える。

「君は一体何者なんだい？」

つと言われても困る。

「俺は、ただの高校生ですよ」

そう答えたが、これはテトが期待しているような答えではない。テトは俺に何かを求めている。それは、普通ではない持ち得ないようなもの。

けど、俺はそれなりの進学校である総武高校に通うただの高校生二年生。あと、ぼっち。

そんな俺に期待しても意味があるわけない。

「アハハッ。そうだね言うわけにはいかないよね」

テトは一人で納得したように頷いている。それも面白そうに。だから、俺は大した人間じゃないんだ。

「じゃあ、当ててみるよ」

テトはそう言い笑顔で俺を指差す。

え、当てるも何もないんだけど。でも、ちよつと気になる。

「僕が思うに、君は何かしらの『眼』の保有者だね。それも、対象の事を見抜くような『眼』。君のその腐ったような眼が何よりの証拠だよ！ その眼は他とは違う。君の能力が宿っていると、僕は推測するよ」

「?」

その予想もしてなかった言葉に、しばらく啞然としてしまった。

遂に俺の腐った目は、神にも認められたみたいだ。確かに普通の人よりも、俺の目は腐っているが、中二病が憧れるような『眼』まで異端じゃないと思う。

けど、まさか本当に『邪王真眼』や『写輪眼』とかが俺の目には宿っているのか。

だとしたら、これから始まるのはオリ主による、異世界チート物じゃないか。

ちよつと自分で言つて悲しくなってくる。八幡泣いていいかな。

というか、『眼』って言われても何が何だか。もしかして、よくある異世界物の《鑑定》スキルみたいな物なのか。分からん。分からんが、俺はそんなもの持つてない。俺の目は生まれつきで、至つて正常だ。

「ふふつ、こういう言葉を知っているかい？ 時に無言は肯定を表すつてね」

テトは自慢げに胸を張り、言ってくる。

無言だったのは、俺がただシヨックを受けていただけなんだが、これは取り返しのつかない事になるかもしれない。だから、俺は慌てて訂正した。

「い、いや違う。俺にそんな能力はない。俺はただの高校生。それもぼつちの。それだけだ」

けど、テトは未だに笑顔のまま。何か嫌な予感がする。



「少年。遅かったね。言われた後に焦って言っても、それは疑いを確実なものにするだけ。君は自分で異端を認めたことになるんだよ」

??あ、詰んだかもしれん。

テトは本気で俺が何かしらの能力者だと思っっている。というか、俺が能力者なのは確定だという前提で話しかけている。だから、俺の言葉なんて気にしてすらいない。

というか言っておくが、そんなもの俺のいた地球には存在しないだろ。

コイツがいる世界がおかしいんだ。それを俺の世界で適用しないで欲しい。

「あはは、僕の目に間違いはなかったようだ！ 最後に君を選んで良かったー！」

そう言っつてテトは喜び、俺に強い視線を送ってくる。そうして、テトは両腕を大きく横に広げる。

「実はね。最後の枠は君じゃなかったんだ。それこそ、調べて厳選した者達がいた。彼らの最終決定で日本に来ていたわけだけど??君を見てその考えは吹き飛んだよ。君の隠密オーラもだけど、特に眼には惹かれたよ。そして、誰にも成し得ない可能性を感じた！ そうこれは運命さッ！」

???ということとは、運命で俺はここにいますと。

それも決め手は眼。俺の腐った眼ということか。

なんだよそれ。俺の眼は??眼は??グスッ。

「まあ、厳選した者達である『阿良々木曆君』や『兵藤一誠君』達は残念でしたという事さ。あ、でも、『潮田渚君』や『エレン・イエーガー君』もアリだったかも。当然、他にいるけどね」

確かに五人とも物語の主人公になるような人物だ。

俺みたいなどこにでも居る高校生とは??

「??え? 今なんて?」

「ん? どうかした? もしかして知り合いだった?」

んなわけあるか。

けど、今ので確信がたった。テトの奴、真面目に言つてやがる。

??だとすると、いたのか日本に、彼らが。

てか、何で尊敬すべき人間強度先輩とか赤龍帝が、俺の世界にいるんだよ。

それに、潮田渚もいたのか。そういえば、昔、月が半分欠けたことがあったような気がする。なら、殺せんせーもいるのだろうか??ダメだそれ以上は考えてはいけないと脳が告げている。

けど、最後のエレン・イエーガーつて。巨人が実在するというのか。流星に俺は知らないぞ、そんな生物。勿論、巨人なんて、いて欲しくはないんだが。だが、何が起こつてる。まさか、知らないうちに俺は世界線を??。

「比企谷八幡君？ 落ち着いたかい？」

気付くと目の前にはテトがいた。俺の頭に手を置き、俺の目をじっと見つめながら。

そのおかげか、幾分かは落ち着くことが出来た。

「あ、ああ。落ち着いた」

「なら、良かった！ まさか君が突然取り乱すとはね。僕には想像がつかないけど、君の能力が関係してそうだ！ あはは、面白くなってきた！ 是非、僕の手で君の能力を完全に暴きたいものだよ！」

そうは言われても、能力とかじゃない。

言っても信じてはくれないだろうけど。

「じゃあ、次にこの世界について説明をしようかな！」

テトは笑顔でどこか楽しそうだ。それを見て、俺は静かに、この展開を楽しもうと思っただ。

異世界に来たという事実から目を背けて。

### 第3話：異世界ゾディアック

「まずは、この世界——『ゾディアック』についてだよね」

そうして『ゾディアック』について語り出したテト。

ここで要約するならば、『ゾディアック』は、モンスターや魔法等があつて創作物によくあるファンタジーな世界そのものだった。

当然、人類種<sup>イマニテイ</sup>だけじゃなくて、様々な種族がいるそうさ。その辺は旅をして自分で確かめろと言われたが、何となく推測はつく。

まあ、そんな冒険溢れる『ゾディアック』をテトは創造し、管理しているらしい。

だから、やはりテトはこの『ゾディアック』の神様という位置付けにあたる。

やっぱりこの世界の神様だったみたいだけど、ここで少し疑問に思った。

「あの、質問したいのですが？」

「お！・ 勿論！・ さあさあどんな質問？」

俺は、説明しているテトを遮って質問の許可を取った。テトはご機嫌のように見えるので、大丈夫そうさ。

人と話すのは大変だが、仕方がない。聞くしかない。

その内容は、空白たちのいる『デイスボート』とこの世界『ゾディアック』の関係性。

というか、何故テトがここにいるのかも気になるところだ。

少なくとも話していて、空白は存在している。そして、現在進行形で『ノゲノラ』は進んでいると見るべきだろう。

じゃあ、この世界は何なんだという事になる。

その事を『ノゲノラ』等の言葉を使わず慎重に選び、テトに聞いてみた。その答えは予想外で想像もつかないものだった。

「それについて簡単に言えば、ここと向こうは、ほぼ関係が存在しない。それは僕自身についてもね。けど、それでも、関係性を見出すとすれば、僕自身が記憶の共有をしているくらい、かな」

と最初に言われたが、意味が分からなかった。そんな俺の様子を察してか、テトは分かりやすく言葉を続けた。

「所謂、向こうの僕は本垢。今、君の前にいる僕は、サブ垢つてこと。ゲーム風に言ってみればね。僕は一人じゃないんだよ」

??結論は、テトは二人いたということ。

それは少なくともだが、この世には『ノゲノラ』の世界を運営するテトとこの世界

『ゾディアック』を運営するテトがいるということを示す。

俺はその予想外の事実にも、らしくもなく口を大きく開け唾然としてしまった。

「あはは驚いているようだね！ 僕はゾディアック担当のテト！ 理解出来た？ 比企谷八幡君？」

「?? ああ、何となくだが、理解した」

この世界は、第二のテトによる世界ということ。

といつても、目の前にいるのは偽物ってわけでもない。

「流石に一つの世界だけを管理すればいい程、神様って楽じゃないんだよ。それこそ、常に人員不足さ。遊戯の神である僕も遊んでばかりだと、神様失格になっちゃうからね」

?? そこら辺の神様事情を、俺みたいなぼつちが知るはずもない。神様って意外とブラッな職場なのかもしれない。

将来の夢が専業主夫である俺からしたら、たまつたもんじゃない。テトが意外に働きた者だとは思わなかった。

「ちなみに地球を担当している神は僕ではないから、文句を言うなら僕には言わないでね。そうだ！ 何か地球の神に言いたいことでもある？」

?? 俺には文句なんて言う権利はない。全てが自業自得。今までもこれからも俺は自己犠牲をしていくだろう。それは俺が決断したこと。神様のせいにするのは筋違い

で、間違っている。

「ない。??けどもしも文句を言うなら、何で俺が『ゾディアック』に連れ去られるのを止めなかったつと言いたい。俺は来たくてここに来たわけじゃないから」

すると、何がおかしかったのかテトは笑いを堪え始めた。

「アハハ??ツごめんごめん。笑ってしまつて。けど止めるも何も、地球の神はバカで地球のことも放つたらかし。殆どを人間達の自主性に任せるような神だ。だから、君が『ゾディアック』に連れ去られたことも知らないんじゃないかな。あ、勿論、君の存在感が薄いからではないよ」

??なんか、最後に慰められたんだが。

「だからこそ、君のような逸材をここへ連れ出す事が出来ただけだね。そこはあの神にも感謝しておくよ。ほんと馬鹿だけど役に立ったよ、くそ女神でもね」

「??あ、あのく、テトさんはその神様のこと嫌いだったりするんすか?」

テトの言い方や態度に俺は思わず聞いてしまった。どうでもいいことだが、あいつらのいる世界だ。無自覚にも、その神様について少し興味があった。

「うくん。嫌いではないけど、興味がないっていうか答えにくいね。数千年前にその神とチェスをやったんだけど、結果は僕の圧勝。最初から最後まで僕のペース。それも含めて作戦かと最初は思ったけど期待外れ。正直、チェスと呼べるものでもなかった。

ほんと、あの神の頭の中はどうなっているのやら。遊戯の神である僕も、流石に呆れてしまったよ。それ以来、会ったこともないね。会っても面白くないし」

とテトは口ではそう言っているが、間違いないくらいイライラしている。

「ほんと何でアレが神様なんだよッ！」

あ、テトが殴った地面に亀裂が入った。流石、神様だなくあのパンチ普通に人殺せるぞ。

つて、こういう身の危険を感じた時は話を変えないといけないと小町から教えて貰ったことがあった。これはこの話を振った俺が悪い。

全くぼつちは空気を読むのが苦手なのに。さらにいえば、空気を替えるのはもつと苦手だ。ここ重要。

「え、ええつと??は、話変わるんだが、『ゾディアック』では、十の盟約はど、どうなるのでしょいかテトさん？」

「今度会ったらあの神に神様というものを身をもって??つて、君、十の盟約つて言った? ま、まさか、何でそれを。比企谷八幡、僕本誌の定めた十の盟約を知っているとは、本当に興味深いよ君」

テトが一瞬動揺し、興味を示したのがわかる。

そして、何とか話を替えることが出来た。



今のテトは、地球の神様よりも十の盟約に興味の対象が変更した。どうか、話を戻せただろう。八幡頑張った。

まあ、地球の神様が残念な方だったのは少し思うところもあったが、いずれまた聞いてみよう。

そんな思考をやめると、目の前には熱い視線を俺に送るテトがいた。よく見ると目が輝いている気がする。

けど、やめて欲しい。

俺はそんな大した人間じゃない。

「さらに興味湧いたよ??えつとね、結論から言うと、ないよ。十の盟約は存在していない。この『ゾディアック』に神が決めた盟約はない。だから、ここでは向こうでは禁止されている殺傷、戦争、略奪は可能。日常茶飯事さ。それこそ弱肉強食の世界『ゾディアック』」

その最後の台詞に俺は少し身震いした。ニヤリと笑うテトは悪魔のようで、ここから先が地獄だと告げているような恐怖の感覚に陥った。

けど、俺は必死にその感情を隠し抑え、思考する。

実は少し変更され、この世界に合った十の盟約が存在していると思っていたが、まさか全くなとは思わなかった。

それに殺傷、戦争、略奪がありなのか?。

『ノゲノラ』ではそれらは禁止され、そのかわりにゲームがあった。逆に言えば、ゲームの勝敗で全てが決まる世界だった。

それを決めたのはテトであり、いつも「ゲーム! ゲーム!」言つてそんな神様として『ノゲノラ』に登場していたからか、俺は今のテトの姿に少しギャップを感じた。

本垢とは記憶こそ共有しているけど、根本的には別なんだろう。

すると次に、テトは一回俯いた。何事かと思つたが、テトかを再び顔を上げると、その表情は真剣なものへと変わつていた。

「そして、この世界は今、危機に陥っている」

その言葉に俺は息を呑む。テトは、真剣な表情なのだが、どこか悔しそうで寂しそうで辛そうだ。

「この世界は、魔王軍による侵略を受けているんだ」  
??なんかよくある設定が出てきたんだが。

ということは、俺はそういう事なのだろうか。

いや、それではテンプレ過ぎな気がするし、全く俺には似合わない。でも、そんな気がするそばつちで鍛えられた直感が告げている。

ちよつと言つてみようかな。

「??お、俺はその魔王を倒す為に『ゾディアック』に来た、とか？　??こう、なんか勇者みたいに」

言ってみて少し恥ずかしくなってきた。

けど、少しの期待を膨らませ、俺はテトを返答を待つ。

これは、創作物やラノベでよくある展開に似ていた。

強大な敵を倒す為に主人公は異世界へと召喚されたとか。

なんかそれは今の俺にお似合いだと思う。勿論、俺——比企谷八幡には似合ってな

いんだが、状況が雰囲気、示してくれているような気がする。

それに何故か当たっている気がするの俺だけだろうか。

俺は改めてテトの様子を観察する。

すると、テトは目を見開いて驚いていた。

それで確信がついた。これは八幡T U E E E Eのお時間が来てしまったようだ。

「そ、その通りだよ。な、何で分かったの？　何度も言うけど君、本当に何者なんだい？

その能力——眼で当てたのか？　どういうことだ??本当に君は何なんだ」

そう言っつてテトが俺を強く睨みつけてくる。

悪い気はしないが、ここに来てからよく睨まれているなと思う。

多分、俺の眼を見て、何か分からないか疑っているんだろうけど。

しかし、俺は何者でもない、ただのぼっち高校生。俺にはその他に何も無い。

「まあ、いつかは解明してみせるさ！ それで話を戻すと、君には魔王を倒す者——勇者になってもらいたいんだ」

「断る」

「エツ!!、断るだつて!?!」

いや、だつて、面倒臭いし。あと目立ちたくない。

なんか影の実力者っぽいのが好きなんだよね。だから、勇者は荷が重いというか、注目を浴びたくはないというか?!

「じゃあ勇者をしてくれるなら、異世界特典として《能力》を与えると言つたら?」

すると、テトは聞き捨てならないことを言い放つた。当然、俺も咄嗟に反応してしまう。

「ツ?!?異世界特典の《能力》」

「ふふっ、いい反応。そうさ、この世界は、戦う術無しで生きていける程甘くはない。だから、勇者となるなら、それ相応の特典を与えようかとね。まあ、尤も君に《能力》は不必要かもしれないけど?」

顎に手をあて、嫌な笑みを浮かべるテトだが、勇者にならないと与えないとか言わないよな。

それは駄目だ。絶対にダメだ。

戦う術を貰えないと、俺は本当にただの高校生になってしまおう。テトが言うには、この世界は甘くない。このままでは、俺は異世界に来ちゃっただけの無力な高校生になってしまおう。

死ぬ。すぐに死んでしまおう。

「やります」

「よし！ じゃあ異世界特典はあげよう」

良かった。これで、俺は戦える。

《能力》というから、世界に一つしかない俺だけの魔法かなんかだろう。

これがもしオリ主召喚だとするなら、ここが俺の命運を分ける。貰わないなんて選択は出来ない。

よく材木座と共に不本意ながら語り合ったのが、今となって役立つ。俺は無限に広がる魔法の中から、選び取ってみせる。

「テ、テトさん？ 出来るなら、時を止めたり、敵を一撃で倒せるような身体能力とか神様が創った武器類とかダークフレ??」

「あ、もう君の《能力》は決まってるよ」

「??え、選べないんすか」

少年心が戻り、頭の中で色々考えていた俺には辛い一言だった。少し浮かれていた俺が、ちよつと恥ぢずかしい。

おかげで、色んな漫画やアニメの能力の有能性を真剣に考え、使っている姿を思い浮かべてしまったじゃないか。

それに不覚にも、中学時代の黒歴史すらも思い出してしまった。

「う〜ん。選ぶというより《能力》は決められないんだ。それこそ《能力》が君を選ぶと言つても過言ではない」

そう、能力が俺を決めると言われても困る。

けど、まさかとは思うが《隠密系統》なのか。なんか似合っている気が自分でもする。

俺は影が薄い。何故なら、俺がぼつちだからだ。

長年のぼつち経験で鍛えられた俺には似合うだろう。何なら《ステルスヒッキー》とかが来る可能性だってありそうだ。

それは、全く嬉しくないし、笑えないけど?!

「けど、覚えていて欲しい。《能力》はどれも強い。どんなものが来たとしても、正しい使い方をするように心掛けてくれ」

「ああ勿論、そのつもりだ」

そんな変なことに使うわけがないだろ??ククツ。

「最後に説明しておくよ。この世界の人々は、極稀に神からの賜物として《能力》が与えられている。それはどれも世界に一つしかなく、強力な力を発揮する。勿論、《能力》以外にも、自身の経験によって創り出される《スキル》というものだって存在する。これは、僕が人々が魔王軍に勝てるように手助けした結果できたもの。この世界の常識  
さ」

そして聞いたところ、《能力》は無限にあり種類によっては、神の力にすら届くものも出てくるかもしれないらしい。

??これは本当に八幡TUEEEが来てしまったか。

それともう一つの要素である《スキル》。

これも気になったので聞いてみると、本人の意思と経験により発現するものらしく、さらに《スキル》は成長・変化をし、無限の可能性を秘めているらしい。

「なら、俺にも《スキル》があるのか?」

「さあ? 流石に召喚されてすぐ《スキル》はないんじゃないかな。??でも、もしかして君なら持っている可能性がありそう」

テトは俺の《スキル》所持を否定した。後半何か言っていた気がしたが聞こえなかった。

そして、目の前で手を動かすテト。空気中で何をやっているんだと思つたが、その手元は、何かを触るような感覚でキーボードに文字を打っているようにも見える。

それは中学二年生の頃、憧れていたものに似ていた。

「ああ、言つてなかったね。この世界では『ステータス画面』というものが存在するよ」  
「え??、それってフィクションでよく見るVRゲームのメニューみたいなやつ、ですか？」

「ん? それが何かは知らないけど、実際やつてみるといいよ。ほらこうやつて指を上から下にスライドすれば、画面が出てくるはずさ!」

とテトの言う通り、指で空中を上から下になぞるようにすると、何やら画面が出てきた。

??まさかこれをやる日がくるとは。

俺自身、空中を触つて画面が出てくる体験が出来るなんて、夢にも思つてみなかった。

【ステータス】

そして、俺の目の前に浮かぶのは、その五文字。

けど、その【ステータス】という項目が俺の心を躍らせる。

それはらしくないかもしれない。



けど理性の化け物と呼ばれ、エリートぼっちでもある俺にとって。しかし、俺——比企谷八幡だって、勿論男だ。

さらに俺には中学二年生の時、病を患わっていた。勿論その黒歴史は封印した。しかし、こんな「ステータス」という文字を見せられたら、耐えられるに耐えられん。

「ステータス」

俺はこの一手に、この震える指先に期待と希望、そして少しばかりの不安を託して、「ステータス」の元へと指を持っていく。

ここは重要な場面だ。これで俺——比企谷八幡の異世界チート生活の有無が決まる。

ここで何らかのチートスキルなり能力があるはず。

そんな間にも徐々に「ステータス」へと近づく指先。ワクワクし過ぎて、心臓の鼓動が聞こえてくる。

それを止める者などいないはずだった。

「押しまあ〜」「えッ!?!」??す!

テトの奇声が邪魔をしてきたが、俺はそれを遮ってでも押しやる。気になって仕方がないんだ。

テトが何でそんな反応をしたのかは気になるが、後で聞いても遅くはないだろう。

ポチツとな。

すると、目の前に広がる俺の「ステータス」。

「??はあ?」

えっ? な、何この《スキル》達。何でこんな《スキル》が沢山あるんだよ。いや、あること自体嬉しいんだよ。けど、このスキル名は嬉しくないような??。

「ステータス」

比企谷 八幡

レベル：0

職業：勇者

スキル

《孤独に認められし者》  
エリートほっち  
モンスターオブセンス

《理性の化け物》  
ステル  
ス

《消滅しつつある存在感》  
ス  
ヒツ  
キ

《死んだ魚のような眼》  
ア  
ン  
ノ  
ウ  
ン  
・  
アイ

《極甘珈琲創造》  
マ  
ッ  
カ  
ン  
ク  
リ  
エ  
イ  
ト

あつ、けど、やっぱり一番下の《マツカシクリエイト極甘珈琲創造》だけは嬉しいかも。

## 第4話：俺がチートだった件

あまりの衝撃に驚いていた俺だったが、詳しく調べてみると《スキル》はさらにタツプすることができ、詳細を見ることが出来た。

【ステータス】

比企谷 八幡

レベル：0

職業：勇者

スキル

《エ孤独リに認めトられし者ホ》

早熟する。

単独での戦闘時、全能力向上。

パーティー参加不可となる。

《モ理性ンの化け物ス》

戦闘時における、身体能力向上。

頭のキレが良くなる。

他人の感情を読み取る事が苦手になる。

《消滅スしテつルつスある存在感キ》

隠密行動の効果超向上。

察知系統無効化。

常時、存在感が薄くなる。

《死アんだ魚ンのようウな眼アイ》

状態異常無効化。

異性からの評価補正。

目付きが悪くなる。

《極マ甘ツ珈琲カ創造ク》  
マツカクリエイト

極甘珈琲を創造できる。

??なんか冷静になって見ると、俺の「ステータス」がやばいと感じてきた。

詳細を見ないならば、どれも少ツツコミたい《スキル名》ではあり、明らかに俺の事を馬鹿にしているんだが、効果は完全にチートだ。

正直、チート過ぎて八幡、自分自身がこわい。

それに殆どの《スキル》にデメリットがあるが、それらをカバー出来るほど、スキルの効果が優れているように感じる。

はつきり言つて、強すぎる。

「あ、あのおくテトさん？ この「ステータス」って大丈夫何ですか？」

「??? はッ!? あぶない、意識が飛びかけたよ」

まじか、これを見て意識が飛びかけていたなんて、俺よりも深刻だな。

けど、やっぱりテトも俺と同様、この「ステータス」には驚いたようだ。という事は、期待してもいいのかもしれない。

八幡TUEEEEを。

テトは今は、冷静になる為か首を横に振っている。

そして、何度も自分の画面と俺の画面を交互に見るようにしてから、遠い目をして深く溜息を吐いた。

「君、チート過ぎるよ?!ここまで来るとバクだよ、反則だよ、これ」

それには同感だ。

俺自身、思わず頷いてしまった。

「だつて考えてみて。まず、《孤独に認められし者》なら、早熟するとう効果と、これは単独時だけ、全能力向上だよ？ 君、早熟するって意味わかる？ 多分僕の予想だ

と、君を急速に成長させるような効果。それが、もし全てに適應するならば、君は天才になれるよ。それもあらゆる分野の天才さ。それに全能力向上だつてチート過ぎ。全能力だよ？ それこそ全ての能力を指す。こんなレアスキル、長いこと生きているけど初めて見たよ」

そうテトは早口かつ興奮気味に説明してくれた。そうして、頭を抑えてしまっている。もう神様としての威厳とかオーラとかがない。

こんなの見るに見ていられない。キャラ崩壊だ。テトのキャラが崩壊しかけてい

る。そんな、キャラ崩壊の原因である俺のスキル。

俺自身もそこまで凄いとまでは思っていなかった。

けど、早熟するっていう効果を考えて、納得してしまった。

まず、これだけで物語の主人公が形作れる。

というか、存在する。その事を俺は知っている。

あれだろ？

『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』に登場する主人公ベル・クラネルの《スキル》。

リアレス・フレゼ  
《憧憬一途》

このスキルの中に出てくる効果じゃねえか。

その効果は、早熟する。

正確には、向こうだとさらに、おもしろい丈で効果が向上するので全く同じというわけではないが、それでも俺の《孤独に認められし者》と同じような効果を持つスキル。

これを発現した主人公ベル・クラネルは、この《スキル》のおかげで、戦闘の成長速度が急激に上がり、世界最速でlevel2になった。

それを誰にでも分かるように言い換えるならば、その主人公は常人では考えられないスピードで成長し、数年はかかるであろう境地に数ヶ月でなつたということだ。

正直、こんな有難いスキルが俺の中に宿っていたことが嬉しい。

「それに、次のスキルもだ。《理性の化け物》モンスターオブセンスの効果の戦闘時における、身体能力向上。これも正直強い。どれ程向上するかは分からないが、こういう効果のスキルは中々ない。かなり良い効果を持つスキルだ。あと、頭のキレが良くなるというものも未知数だが、期待出来るかもしれない。まあ、他人の感情の件は、別に大した事ではないさ」

いや、俺は他人の感情を知りたいというより、知っていたいと思っっている人間だ。他人の感情が分からなくなるのは??。

まあ、今話すことではないのだが。

けど、身体能力向上と頭のキレが良くなる効果は、確かに期待できる。



地球での身体能力では、異世界チートには心許ないと思つていたので嬉しいし、頭  
のキレが良くなるというのは、ここに来てからもう実感している。

それは、今こうやって思考出来ているのが証拠だ。普段よりも、かなり頭が回り  
えている気がする。

「それから、『消滅しつつかある存在感』も相当な物だよ。特に隠密行動の効果超向上と  
察知系統無効化。この、超向上なんて僕も早々見れるものじゃない。激レアだよ。それ  
に察知系統を無効化するなんて、気配察知に引つ掛からないことは勿論、畏魔法なんか  
も察知されず、不発に出来ると思う。だから、これらの効果はかなり役に立つと思う。  
正直、破格の効果。常時、存在感が薄くなるなんて些細なことだよ」

??些細なことか。確かにいつも通りだけだよ。

けど、ステルスヒッキー本当にあつただけだよ。

やはり伊達に、ぼっちの経験を積んできたわけではない。今までの経験がこうやつ  
て現れたと思うと感慨深くなる。

けど俺は、遂に存在感を薄く出来る程に、ぼっちを極めてきていたのか。

「あとは、『死んだ魚のような眼』ね。名からして多分、世界すらも解読不明の眼だつ  
たんだと思う。あはは、この時点で規格外だよ。そして、その効果の一つは  
状態異常無効化。これも激レアな効果だ。この世界の状態異常と呼ばれるものは厄介

だからこそ、この効果はここぞという時に役に立つよ。あとは、異性の評価補正？　これは僕も、よく分からないな。良くなるのか悪くなるのか。いや、目付きが悪くなるから多分??」

気にするな。生まれつき俺の目付きは悪い。

それこそ、死んだ魚のような眼と比喻されるだけのことはある。まさか、それ程までに規格外だとは思ってなかったけど。

しかし、これもまた強力な《スキル》だったとは思わなかった。

だが、状態異常無効化を考えてみると納得出来る。状態異常を主とした類いの攻撃は効かないというのは、不意打ちを防ぐことにもなる。良いものが手に入っただろう。

異性からの評価補正は??分かってる。どうせ悪くなるんだ。こんな眼だ。良くなくなるはずがない。

大丈夫だ。期待はしていない。

「そして最後の《極甘珈琲創造》<sup>マツ缶クリエイト</sup>は??君の趣味だったりでもするの？　はつきり言つて、物凄い甘い珈琲を創ることが出来ることしか読み取れないんだけど??」

何を言う。テトは、この《スキル》の有能性に気が付けないのか。

マツ缶とは、俺——比企谷八幡のソウルドリンク。

知らないなら調べて欲しい。

主に千葉県で販売されているはずだ。

特徴としてはとてつもなく甘い。

多分そんなマツ缶を、俺はこの《スキル》のおかげで、無限に創り出せるんだぞ。

それも無料で、毎日いつでもどこでも何本でも飲みたい時に、だ。

これは本当にやばい。神スキルじゃねえか。

「??なんかニヤけてるのキモいよ?」

おいテトさん、そんな事言わないでくれ。分かってるから。

確かに嬉しさのあまり表情が崩れてしまっていた。でも、これは多分《死んだ魚のような眼》が悪いんだ。スキルにもあるでしょ。これは、スキルのせいだ。そうに違いない。

「話を戻すけど、ここまで君が強いとは思わなかったよ」

そう言って苦笑いするテトには、正直同感だ。俺も自分自身がここまでチートだとは思わなかった。

この世界のスキル事情は知らないが、反応を見るに、これは強そうだな。

「だからと言って《スキル》を無くすなんて言うなよ」

「あはは、本当はそうしたい所なんだけど??世界の危機だから見逃すしかないんだよね」  
よし危なかった。何とか没収されるような事態ではなかったようだ。これで、八幡

TUEEEEが現実として見えてくる。

「はあ、とんだ規格外が来てしまったものだよ。それじゃあ忘れてるかもだけど《能力》を与えるよ?」

待つてました。

テトはそう言うが、俺は異世界特典としての《能力》のことを忘れてなんかいない。何となくだが、《理性の化け物》モンスターオブセンスの頭のキレが良くなる効果が生かされているんだと思う。以前に比べ、格段に物覚えも良くなったと実感できる。

もしかしたら、完全記憶能力とかゲットしちゃつてたりして。

「さて早速だけど始めようか。僕も気になってきたよ、君の《能力》がね」

そう言いつつテトは両腕を大きく横に広げる。そうして次に大きく深呼吸をし、

「《能力発現ツ》」

あ、なんかカツコイイなそれ。

テトがそう叫んだ瞬間、光り輝く魔法陣が俺の下に現れた。そこからは煌びやかな白色の光が溢れ出てきて、次第それらは俺自身を包み込んでいく。

その光は暖かく、俺の内側へと入り込んでいく。

このまま俺の捻くれた心も浄化してくれないかな。

『ッ?!?!』

ん？　なんか暖かな光の雰囲気が変わったな。

『や、やばいかも。僕でもこれは、制御出来ないッ！　み、右手が??僕の右手が疼くッ』  
んん？　なんか脳内に直接テトの音が聞こえてきたんだが??。何かトラブルでも発生したのだろうか。

というか、右手っていい歳して何言ってるんだ。笑ってしまいそうになる。

テトは何千年と生きてるわけだが、未だにそんな病を引きづっているのか。

勿論、俺は卒業したぞ。

けど、何だこの胸騒ぎは。なんか嫌な予感がする。

『クッ僕ともあろう存在が、闇に??闇の炎に飲まれるッ！』

??え？

『まさか、ここまで君の心が??捻くれて、いたなんて』

すると次の瞬間、目の前の光は黒炎へと変化する。

全身が身を焦がすように作り替えられていくのが、わかる。同時に俺の着ていた総武高校の制服は焼け焦げていく。意識も持っていかれそうだ。けど、俺は歯を食いしばって耐える。

そして、終わりは突然だった。

俺を包んでいた黒炎は、何事もなかったかのように俺の中へと一気に吸い込まれて

行った。

それと同時にテトは地面にへたり込んでしまった。

「きみは、ほんとうになにもなんだよ？」

呂律が上手く回っていないテトだったが、何とか聞き取れた。一体俺の中で何があつたというのだろうか。

いや、本当は想像がついている。けど、認めたくない。

でも、逃げられない。覚悟を決めるしかない。

「ステータス」

「ステータス」

比企谷 八幡

レベル：0

職業：なし

スキル

《孤独に認められし者》  
エリート ぼっち

《理性の化け物》  
モンスターオブセンス

《消滅しつつある存在感》  
ステルス ヒット キー



どんな効果なのか気になる。

いつまでもウジウジして、現実から目を逸らし、効果を見ないなんて選択はない。

「さあさあ！ 早くポチってしちゃいなよ！」

それについてはテトも同じだ。もう右手の疼きは収まったようので、今は《能力》の効果に興味を示している。

仕方がない、押しますか。

ポチッと。

すると、突如足元から俺を包み込むように黒炎が襲ってきた。その勢いは凄まじく、俺は先ほどと同様に飲み込まれた。

「え？ 比企谷八幡君ッ!? だ、大丈夫かい!？」

テトが俺の名前を震えた声で叫んでいるのが聞こえる。

大丈夫、まだ生きているぞテト。ここは俺に任せておけ。

けど、五秒もしないうちに黒炎は消え去った。先程とは大違いだ。

しかし、テトに質問したい。

何故俺に対して、そんなキラキラとした目を向けている？

「なっ??かっ??いいい」

??遂にテトの頭はおかしくなったか。



けど、目線を見るに俺に対して言っているようには感じない。というか、いきなり何言ってるんだ。

テトの目線は下を向いている。

だから、俺は目線を下へと向けてみる。そして、後悔し絶句した。

そこにあつたのは、漆黒のオーブに包帯の巻かれた右腕、両手には黒い革手袋。さらには靴は革ブーツに変化している。

そんな中二病衣装一式を俺自身が着込んでいた。

何でこんな格好をしなければならぬんだ。それに、かなり恥ずかしい。そして、俺の黒歴史耐性のない心を抉ってくる。

「い、異世界のファッションは、馬鹿に出来ないね」

テトは??もう放置でいいだろう。

若干気持ちの悪いテトを無視して、俺は目の前に浮かぶ「ステータス」を確認してみようと思う。

百パーセント、この衣装は《能力》が関わっていると見るべきだ。さて、俺の黒歴史は《能力》として、どうなったのやら。

《闇の炎に抱かれて消えろ》

闇属性魔法使用可。

一定時間、ダークフレイムマスター化。

●ダークフレイムマスター化

身体能力と魔力の超絶向上。

闇魔法威力超向上。

常時、闇魔力障壁展開。

闇炎の支配者へ衣装チェンジ。

中二病となる。

??あ、やばいチート過ぎて右手が疼いてきた。

## 第5話：神様からの依頼

「君、本当にチートだよな？」

早速テトから、俺はそう言われたが、全くもってその通りだと思う。この世界の強さの基準を知らない今の俺では想像も出来ないが、反応を見るにそこそこは通用するのだろうか。

けど、《スキル》も《能力》も……名前からしてね。俺のメンタルはボロボロなわけですよ。

「それに、その格好！ かっこよすぎでしょ!？」

「いや〜テトさん。少しキャラ崩壊始まってますよ?。」

そう、俺は今も目を輝かせ続けるテトを見て、感じざるおえない。そんなに、この俺の《能力》である《闇の炎に抱かれて消えろ》の黒ローブがカッコよく見えるのか。

俺からしたら、恥ずかしくて我が家の中に隠れていたい気分なのだが……。よし、早くこの《能力》を解除しよう。

「あ、ああ。なんで解除しちゃうのさ……」

「俺の中の黒歴史を思い出して、恥ずかしいんだよ。それより、やっぱり……強いのか？」

「これも？」

「はあ。思いつきりチートだよな。闇属性を使えるようになってるのは、強いかな！この世界だと、使い手は多くはないし希少価値があるからね。それに、ダークフレイムマスター？　つていうのは、よく分からないけど、多分弱くはならないでしょ。それこそ、覚醒するかも？」

そう言つて、テトはいい笑みを浮かべた。

「なんか、ため息がしなくなってきたな。小町には日頃から「ため息すると幸せが逃げちゃうんだよ。お兄ちゃん」つて言われているけど、したくもなる。」

「これから俺は、旅に出て、魔王軍？　退治なのだから。いや、異世界に憧れがなかったわけではないが、めんどくさい。非常に面倒臭い。」

そんな役目放り出して、誰かに養ってもらうのもアリなのかもしれないな。

それが俺に出来たら楽しないんだが。」

「んで、これから俺は、どうすればいいんだ？」

「それは勿論！　残りのというか……先に異世界入りしている他の勇者達に会ってもらおうよ」

……え？　他の勇者だと？

「言つてなかったけ？　比企谷八幡君を含めた十二人の勇者！　僕は色んな世界から、

集めてきたのさー！」

あつ。けどプラスに考えれば、俺が戦わずとも他の十一人が協力し合って、魔王を倒してくれば、いいんじゃないか。俺は働かなくても済む。世界も助かる。win-winじゃないか。

「そこで！ 君にはこれから、その十一人の勇者を探して集めてもらう！ 君が主導となつてね！」

……どうやら、人生はそんなに甘くないな。

「いや、ちよつといいか。何故、俺が主導になる？」

「え？ そんなの君が強くて、僕が一番気に入った人間だからに決まってるでしょ？」

おう……神様の勝手でしたか。けど、誰がそんな面倒臭いことをするか。断ってみよう。俺は無理やり此処に連れてこられたんだ。我儘言つてもいいだろう。

「……だが、ことわ」

「ん？ 何だつて？ 君に拒否権なんて無いからね。まず、魔王を倒さない限り、君も他の勇者達も元の世界に返す気はないよ。それに、この世界を救おうとしないなら、他の者に変えるまで。用済みとして……あとはどうなるか。賢明な君ならわかるよね？」

……どうしよう。テトさん、めっちゃ怖いんだけど。

この最後の疑問系の笑みといい、原作のテトつてこんなに威圧感放つような獰猛な

キャラクターだったけ。

や、やばい。冷や汗が止まらない。殺気に当てられただけでビビっているような戦闘経験皆無のエリートポッチ高校生の俺が、異世界で、しかも、知らない人達十一人も集めれるのか……

というか、集めるってことはコミュニケーション取るって事じゃないか。なんて、ポッチには、レベルの高い試練を与えるんだ、この神様は。

けど、魔王を倒しさえすれば、元の世界に帰れる。

それを聞いて、俺は心のどこかで安心した。それは、今まで必死に考えないようにしていたから。

「てつきり、もう元の世界へは戻れないかと思ってた」

「それでも良いならいいけどね。君の場合、望んで此処に来た訳ではない。魔王を倒してくれば、元の世界へ帰ることを許すよ」

「そうか。なら、先に言っておく。俺は元の世界へ帰らせてもらう」

迷うまでもない。

俺の中の本心は帰りたいたいと思う。

それは、元の世界……地球で、日本で、千葉で、総武高校で、奉仕部でやり残した事が、あるから。

このまま俺が求めているものを見つけれず、この心の奥に眠るモヤモヤを解消させないなんて、俺には出来ない。

とてつもない程に、俺は、見つけたくて、知っていたいのだから。

「へえ。即答か。ちよつと意外だね」

そう言われると、現実逃避した野郎みたいで嫌になるんですけど。

「まあ、約束するよ。神の名においてね」

なら、信用できるかもしれないな。

「時間経過とかも、安心してくれていいよ。君がここに転移したあの日の翌朝に、戻れるようにしておくよ」

……テトが神様に見える。いや、本当に神様なんだけどね。

太っ腹すぎるでしょ。それが本当なら、安心して異世界にいられる。

「それはそうと、どんな……方々なんだ？ その他の勇者達って」

これは聞かすにはいられない。俺と同じ境遇の人達なんだ。これから、嫌でも共に接していかなければならないなら、知っておかないといけない。

そんな俺の思考の間、テトは口元に人差し指を当て、何やら考えていた。なんか、嫌な予感がする。

「うくん。ひ・み・つ♪」

そう言つて、俺の反応を楽しむかのようなテト。

正直に言つと、殴りたくなつた。けど、決して表情には出さない。我慢。我慢。しかし、教えてくれないなんて……

「世界のピンチなんだろ？ 情報の開示くらいあつてもいいと思うんだが」

「ああ〜一理あるよね。けど、面白くないじゃん？」

……今日ほど、神様とは理不尽で自分勝手な者だと、思い知つた日はなかつた。

けど、まじかよ。このままだと、何も情報もなしに、俺は探す事になるのか。

そうなると、街なんかで勇者探し。期待しても、ボツチである俺には、聞きこみ調査なんてもの無理だぞ。そこんとこ、把握しているのか。この唯一神は。

「まあ、僕の認める君なら、大丈夫でしょ」

……ダメだコイツ、早く何とかしないと。

「……テト。流石に厳しい。俺は赤の他人と話すのでさえ、得意ではない。まして、世界規模での人探しなんて、不可能に近いぞ？」

「……はあ。なら、ちよつと待って」

そう言つて、テトはテト自身の画面を操作し始める。タイピングの手慣れている感を見ると、長年使つて来たことが伺える。俺には、あそこまでの速さ出来ないな。

そうしているうちに、俺の前には一枚の紙が印刷されているかのように、具現化され



ていつていた。

この紙に意味が無いとは思えない。推測だが、重要なアイテムだろう。

そうして完成したのは、一枚の大きな地図。

持ち運ぶには、何回か折らずには不便になりそうな大きさだ。

そして、その地図には大きな赤丸が十二個。

これが、指し示す事柄は……

「……ここに勇者がいるわけか」

「ええええ!! また一発で当てたのかい!?!」

あつ。無意識に口走ってしまったようだ。

このままでは、テトの評価をまた上げかねん。というか、この世界でのテトって、少  
しお馬鹿なのだろうか。原作は『』とやり合う程の頭脳だっただろうに。

まあ、その辺は深くは考えなくておっか。サブ垢だしな。

「その通りだね。半径五キロの赤丸で、大まかだけど、勇者の位置を知れるようにしてあ  
るよ。それに、定期的に更新されるように作つてある。見やすいように、全部開いて宙  
に浮く機能もある。普通の地図としても使えるから、とても有能だと僕でも思うよ!  
これ!」

そう胸を張っているテトに、素直に感謝しておこう。

テトの言う通りなら、かなり役に立つんじゃないだろうか、これ。

ある程度の勇者の位置が分かっているなら、探しやすい。

けど、これを見て、俺はまた一つ疑問が増えてしまった。

「テト。この赤丸に模様が描かれているだろ？ こっちはライオン。あれは二人の人？

これは羊だし……」

「いい所に気が付いたね。それは、勇者の証。君たちが属する『十二宮勇者』を示しているのさ」

……十二宮勇者。だから、ライオンや羊があるのか。そして、二人の人は、双子座か。納得したが、属するってどういうことだ。テトがあまり説明してくれないおかげで、謎が未だに多い。

こんな状況で俺はこの異世界で、やっていけるのか。高校生活でさえも、難しいのに。そんな自分の世界に入り込んで、考えていた俺だが、テトにデコピンをされて意識が戻る。

「考え込むのもいいけど。目の前の現実を受け入れようか。君、逃げてばかりじゃダメだね」

ははは、痛い所を突いてくる神様だ。

「話戻すけど、右手の甲を見てみて」

そう言われるがままに、俺は自身の右手の甲を見た。すると、タトゥーが俺の右手の甲に刻まれていた。

いや、間違ってもグレタからタトゥーを入れたなんて過去は俺にはない。けど、刻まれている。

模様は……魚。魚が俺の右手の甲に刻まれていた。

「君は、魚座パイシズの勇者。魚座の加護を持つ事が、運命付けられている」

と言われても、俺は魚座生まれでもないのだが。何が基準なのだろうか。

それに、呼び名はパイシズって。ちよつと……

「だから、君がいる所は、この地図でいうとここだね！」

そう言って地図のとある赤丸を指差すテトに、俺も気になって見てみた。見てみると、東でいいのか分らないが、右端の真ん中にある事がわかる。

それで、思ったんだが……

「この世界って丸いのか？」

「丸くないよ。この世界は、平面。盤上の世界。君がいる東の地図外は、亜空間。入ったら……死ぬよ？」

……聞いておいて正解だったな。

というか、この地図、案外広い。地図外へ、行くことはないだろうが、それでもデカ

すぎる気がする。

「それでも……ゾディアックって案外広いんだな」

「ん？ ああそうだね。地球と同じくらいはあると思うよ」

まじかよ。俺はこれから、地球規模で旅をするのか。けど、目的の勇者の位置は分かっている。なら、簡単だろう。

まさか、何処にでもいるポツチ高校生に、こんな日が来ようとはな。

小町。お兄ちゃん、地球に帰る為に頑張るからな。

「んじゃあー！ 比企谷八幡君！ この世界について！ そして、君の使命について理解してくれたいかい？」

「ああ。不本意ながら……」

「なら、いつか！ 他の勇者達、みんな癖が強くて僕も苦労したんだから、まあ頑張つてね」

……おい。癖が強いつて、俺なんかやっていけるのか。

「あつ。もう一度言っておくけど、比企谷八幡君が、この勇者という使命を投げ出すようなら、用済みとして……ね？」

可愛く「ね？」って言われても、怖いだけなんだからね。テトさんや。

俺は、また身震いしてしまった。

「なら、早速行つていこう！ 僕はこれ以上世界に干渉するわけには、いかないからね。次に会う時は……しばらく後かな」

「……そうか」

こう言つては、悪いかもしいないが全然寂しくもないな。けど、知つている奴がいてくれた方が、心強かつたかもしれない。

これから会う勇者たちは、全くの他人。そう思うと、不安に駆られる。

「じゃあ！ 良い冒険を！ 比企谷八幡君！ そして、みんな仲良くだよ？」

そう言つて最後、テトは消えていった。つて言うのと、死んだみたいだけど、普通に姿を消していなくなつただけ。

そして、この大地に俺一人。

持ち物は、地図だけ。地図だけ？

「え？ 地図だけ？」

思えば、服装も……

「寝巻きのまま……武器もない。お金も、というか、この世界の通貨なんだよ。この世界での一般常識ですら……俺にはない。」

あつ。これ、やばい状況ではないだろうか。

とりあえず、俺は地図を開く。俺がいるのは、先程も言つた通り東の果ての真ん中。

近くに、街はあった。いや、もしや国規模かもしれない。けど、この地図…地球規模なんだよな。なら、国だろう。

そして、これって案外、遠いのかもしれない。いや、間違いなく遠いだろう。けど、行かなければならない。だって、ここに牡羊座がいるんだから……。

一番俺に近い勇者。牡羊座の勇者。

俺は、当面、この勇者を見つげに旅をする事になるだろう。

そうして、俺の異世界勇者物語は、スタートしたのだった。

## 第1章

### 第6話：コヒキアー王国

——ハアハアハア……どういふ事だよ……

ある少年は、狭く入り組んだ路地裏を必死になつて走る。少年は目が覚めたら、ここにいたのだ。日の日差しは届かない。ただの路地裏。

少年は一通り歩いた後、元いた場所である始まりの場所に戻つてきていた。

少年に与えられたのはそれだけ。何の説明もなし。

唯一頼れるメニユー画面でさえも、知つていたはずのものとは、かけ離れていた。というか、あれは全くの別物だ。

しかも、あるボタンを探しても見つからない。

これは異常だ。こんなバグあつていいはずがない。

それに、この世界はおかしい。以前来た時とはまるで比較にならないほどに、クオリティが高すぎる。

地面を触る感触や吹き付ける風など、前に来た時よりもリアルすぎる。というかりア

ルかと疑った。

人にしたったそうだ。本物と相違ない程に完成されている。こんなどこか、おかしい。それに、頭の上にカーソルの乗った人を未だに見つけられない。

その事実には、少年は焦りを感じていた。

さらに、街だつて違う。俺が前に来た時には、こんな街なかつた。見たことがないんだ。

——運営はどうなつてんだ。こんなの発売日初日からクレーン殺到だぞ。というか、してやる。絶対にしてやる。帰ったら絶対にしてやるからな。

少年は愚痴ることしか出来ない。それに反応する声もない。寂しさが徐々に込み上げてくる。

——何だつてんだよ。この状況は。

少年は座り込む。目に涙を溜めて。

自分がこの世界にリンクし、始まった場所にて。あわよくば、自分が現実に戻れる事





あの時ほど、俺の心臓の音がよく聞こえた時はない。足も恐怖でガクガクと震えてしまっていた。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

今でも覚えている耳鳴りがするほどの爆音。それは、クマの鳴き声であつたが、それだけで死んだなと思つた。

そうして、一歩ずつ近付いてくるクマ。

それは、弱すぎる獲物を追い込むのを楽しんでいるかのように見えた。

俺はどうする事もできなかつた。クマはその間にも腕を大きく振り上げている。

もう俺は奴の射程圏内なんだ。

けど、クマの手が降ろされる寸前、本能的に体が動いてくれたのかもしれない。俺は思いつき飛び上がった。

なんの意味も無いはずのジャンプ。俺は死の恐怖で目を瞑りながら飛んだ。

そして、次の瞬間、俺の体は真つ二つに分かれ、激痛を味わう。それで死ぬはずだつた。

けど、その激痛はいつまで経つても、来なかつた。

俺はうつすらと目を開ける。すると、何十メートルも上空に俺はいた。

「え？」と最初は戸惑つた。どういふ事だろうと。

下を見るとクマはいる。けど、小さく見える。俺が上空にいるからだろう。

そうして、わけも分からないうちに、俺は自由落下を始めた。流石にビルは何十階から飛び降りているような、この時の俺は、ここでも明確な死を感じた。

俺はどうしても生きてたかった。生きて皆の元に帰らねばならない。

けど落ちる先はクマの真上。どうしようもない。俺の目には涙が出てくる。俺が助かる可能性を大きくするなら、クマを衝撃を減らす為のクッションにするべきだと思っただ。

けど、その後はどうなる。怒り狂ったクマに俺は殺させるだろう。

どちらにしろ、俺はコイツの餌になるんだな。

そんな事を考えながら、俺はクマを力強く踏み潰した。

——ん？ 踏み潰した？

クマは俺の落下した衝撃に耐えきれずに、ぺしゃんこ状態。色々グロいが、そんな事よりも俺はクマを倒したら良かった。

その事実には俺は不思議でならなかった。けど、生き残ったということに喜びを感じていた。生きている。生きていると。

そうして生のありがたみを感じていた訳だが、いつの間にか五頭の狼に囲まれていた。

笑えもしなかった。

俺はすぐさま空いた隙から、走って逃げた。足の速いであろう狼相手に意味が無いとは分かっていても、そうするしかなかった。死にたくないんだ。

すると、どうだろう。陸上の世界記録を簡単に塗り替えることが出来そうな程に、俺の足は速くなっていった。後ろを見ると、俺を追う狼達は徐々に距離を離されていく。

そして、気付いた。俺ってチートだったんだと。

単純な身体的スペックだけで、クマや狼を超える。それ以外も超えられるかもしれない。俺は戦えるのだと。

それからの対応は、早かった。俺は手当たり次第、やり合ってみた。そこで、色んな事を試してみた。《スキル》や《能力》の事を深く知って、理解して使えるようにしていた。

そうして、今に至る。

俺は《能力》である《闇の炎に抱かれて消えろ》の闇属性魔法を駆使して、肉すらも焼けるようになったんだ。

なんか炎を闇属性で出せないか、イメージして試したところ、黒い火が手元に出てきたんだ。色は不気味で、あやしいが、俺には何ともない。

俺は徐々にではあるが、そうして街へと距離を縮めて行った。身体的能力が向上して

いたおかげが、疲労も少なく移動スピードも上がり、一週間はかかると思っていた街も、もう外壁が視認出来るほどまでに近づくと出来ていた。

「そろそろ、行くか」

昼飯である猪肉も食べ終わり、そう呟いて、俺は外壁の入口。門番が何人も駐在している場所へと向かう。

けど、予想していた通り。アイコンタクトで通れるはずもなく、俺は不審者のように警戒されていた。そして、案の定、止められた。

「おい！ 何でゾンビがここにいるんだ!？」

けど、流石に人間として見られていなかったのは予想外だったな。八幡、泣いちゃうよ？

「あの…。俺、ゾンビじゃないんですけど?」

こんなこと言うことになるなんて……。

「門番長。今、このゾンビ喋りませんでしたか?」

「なわけあるか! ゾンビが喋れるはずなからうッ!」

あつ。やばい。これは戦闘になるのだろうか。

流石に道中に対人戦はしてこなかった。だから、あまりやり合いたくないのだが。

「門番長! 浄化魔法を使える者を連れてきました!」

「でかした！ 早くあのゾンビを浄化しろ！ お前らは、いつ奴が襲い掛かってきてもいいように、警戒しておけ！」

なんで、こんな事になってるんだろうな。

そうこうしているうちに、その呼び出された男の魔法が発動する。

「セイクリッド・ターンアンデッド!!!」

すると、俺の下にでかい魔法陣が描かれ、次の瞬間、とてつもない光の奔流が俺を襲った。

けど、それは俺にとって気持ちいいだけだった。

「う、嘘だろ……これが効かないなんて……なんて高位なゾンビなんだ!」

と言われましても、俺は人間なので。しょうがない。もう一度言っておくか。大きな

声で。八幡頑張れ。八幡頑張れ。

「だから言つたろ。俺は人間だ!」

「え？ ゾンビが喋つた!？」

本当に失礼だな。このゾンビみたいな目は生まれつきなんだ。分かってくれ人間だって。本当に涙が出てくるからね。

「おい！こいつよく見たら、ゾンビじゃないぞ！人間種じゃないか?」

「まじかよ。ゾンビにしか見えなかった。特に目とか。あれで俺らと同じ種族なのかよ

……」

「つべえーわ！ まじ俺、見抜けなかつたんすけど？ つべえー！」

……酷い言われようだ。というか、最後のやつ、どいつだ。なんか、既視感を感じたんだが。まさか……。

「つべえー俺睨まれてんすけど？ 怖すぎつしよ！」

めつちや、戸部に顔も似てる奴いたけど、無視しよう。それが賢明だ、八幡。俺は何にも気付かなかつた。そうだ、そうしよう。

「そんな事より、何用だ！ 貴様！ このコヒキア王国に！」

コヒキア王国。それが、この国の名前なのか。地図では、街がある事が分かってても、名前までは分からないから助かつたな。

「いや、入国したいと思つてまして……」

「全く……それなら、早く身分証を提示しろ」

いや、そうする前に攻撃してきたのはそっちだからね。八幡悪くない。

けど、やはり来たか。身分証提示という異世界お決まりのパターン。

ここが正念場だ。

「あ、あの。すみません。ここまでの森で魔物に襲われて……紛失してしまつたようで……。この場合どうすれば良いのでしょうか」

なら、お決まりのパターンで乗り切るのみ。道中で魔物に襲われて、無くしてしまつたパターンだ。

門番達は、それを聞いて同情的な目を俺に向けてきた。

「お前、あの森を一人でか……そりゃ紛失もするわな」

「あそこを乗り切つたんだ。さぞ辛かつたであろう？」

「運が良かったな。お前」

ええ……。求めていた反応と違うじゃないか。

というか、そんなにやばい所だったのか、あの地帯。テトに次会つたら文句してやろうか。

「あんな地帯を単独で行く奴なんて……上位ランクギルド……」

「じゃあ、こいつは？」

「もしかしたら……な？」

なんかコソコソと話しているが、もしかして俺の悪口なのか。

「怪しいが、まあ、いいだろう。入国を許可する」

すると、先程から一番偉そうであつた男が、俺の入国を許可した。それで、俺は内心で一安心。

結構、簡単な入国審査で良かった。



流石に入れなかったら、勇者を見つける以前の問題だ。なんとかして、この外壁を越えるという荒業に出ないといけなかったからな。

「ええつと……ありがとうございます」

「ああ。だが、すぐに冒険者組合に行け。そして、再発行してもらえ。お前は冒険者なんだろう？」

……冒険者か。けど、ここは話を合わせておこう。

「ああ」

「そうか。だが、身体チェックだけはさせてもらおう事になる。いいな？」

俺は肯定した。まあ、されて困ることはない。

そうして、俺は軽く門番たちに身体チェックされたのち、入国を果たした。

このコヒキア王国に。

そして、入国してみた事思った事は、やはりファンタジーの世界に俺が来たという実感だろうか。

通りを歩くのは、人間だけじゃない。それこそ獣人を所々に見かける。

見たところ、フィクションで、たまに見る種族差別はなさそうで、安心した。

けど、あるんだろうな。奴隷とか。多分。

そして何より、建物は中世を感じさせる。これ程、俺の厨二心をくすぐるものはない。少しだけ憧れていたラノベの世界である中世の街並みが、俺の目の前には広がっていた。

少し心が躍るくらい許して欲しい。

「おい兄ちゃん。こんな門の真ん前で立ち止まられちゃあ、困るんだが？」

すると後ろから、先程の門番の一人から忠告が聞こえて、俺は我に返った。少し感動しすぎていたかもしれん。

申し訳なく思い、軽くお辞儀しておいた。

さて、これからどうしよう。宿を探すにしても、俺にはお金がない。はっきり言って無一文だ。

「とりあえず……身分証として冒険者組合だっけか。ベタだが、頼るしかないな」

そこで、ギルドカードみたいなの貰えるんだろう。それで、簡単な討伐依頼を受けて、お金を手に入れよう。

全く専業主夫志望の俺には、働くって大変だ。

学生に戻りたい。けど、生きる為には働かねばならないか。

俺がこんな事を言う日が来ようとはな。

そうして、俺は歩き出す。一歩ずつ前に向かって。

「…………あれ？  
冒険者組合ってどこだ？」

## 第7話：冒険者組合

「あ。あの、しゅみません……」

「ヒ、ヒイツ!? すみませんすみませんー!」

「え、あ……逃げられた」

……俺、もう無理かもしれない。何でこうも恐がられるんだ。

俺はあれから、歩き出し、冒険者組合を探そうと、勇気をだして人に尋ねているのだが、結果は見ての通り。どの男も逃げてしまう。

流石にここまで来ると、怖いぞ。異常だぞ。

お陰様で、メンタルはズタボロだ。

俺の目つてそんなに腐り切ってしまったのか。いや、そうでないと願いたい。生まれつきなんだ。察してくれ。

「はあ。このままじゃ、先に進めないな」

俺の目標は、勇者探し。それは言ってみれば、テトに依頼されたもの。依頼された以上、断ることはできなかった。

「どうしたもんかな……」



て、体全体にだつて腫れた後が出来ている。

——こんなはずじゃなかったんだけどな。

少年の独り言は誰にも聞かれない。

少年の目は潤んでくるが、直ぐに所々に穴の空いた袖でそれを拭つた。

——泣いてなんかいられない。俺は、元の世界に帰るんだ。だから、そのためにも生きないと。

少年は生を諦めない。死んだら終わりなのだから。

そして、力を欲す。

誰にも負けない、邪魔されない、痛みつけられない強さ。それを貪欲に欲す。

何故なら、この世界は命の価値が低い。所謂、この世界は死にやすい。

それも、元の世界で中学二年生だった彼には、この世界『ゾディアック』はあまりに厳しすぎであつた。

弱肉強食。少年はそんな世界の理に為す術もなく、無知故に巻き込まれ、今に至つている。

そんな少年には、誰も知り合いのいない意味も分からないこの状況が、不安で堪らなかつた。正直、限界であつた。

——やつぱり泣かないなんて出来ないな。



階建ての横に大きい建物が通りの正面に建っていた。

——いや、なんで今まで見つけられなかったんだよ。

立地的に、街路から見ても目立つし、存在感を放っている。看板だつてある。

「けど、そういえば、この辺りには来てなかったか」

何やつてるんだ俺はと、昼頃の俺を叱りたい。

けど、そんな事よりも、俺は躊躇なく冒険者組合の建物内に入った。

もう、今日は寝ないで朝を迎えようと決め込んでいたが、流星に身分証を持っているいと心許ない。

そうして、入ってみると、そこは色とりどりの様々な冒険者達で賑わっていた。中でも目立つのは、宴会のように酒を飲んだりしている冒険者達だろうか。

こここのロビーは酒場としての機能も果たしていると見た。

「なんだあ？ 兄ちゃん？ 見ねえ顔だなあ？」

すると、すぐに一人の男が、ジヨツキを片手に肩に手を回してきた。これは酔っ払つてやがるな。

それに、男は細身ではあるが、どこか不気味な印象で、俺は嫌な予感を感じ、身を屈めることで、その手から抜け出した。

こんな奴に絡まれたくない。



「冒険者になりてきた。どこに行けばいい？」

けど、折角なので、受付の場所を聞いてみる事にした。見た感じ、こここの組合に所属する冒険者なのだろう。

「ああん？ 新人なのか。くくつ、それなら、あのねえーちゃんのとこだぜ？」

そう言つて、男はニヤける。嫌な笑みだ。

俺はそれに顔を顰めたが、その嫌悪感を抑え、礼を言い、言われた女の人のいる所へ向かう。

嫌な予感がした。

あいつは注意した方が良いかもな。

そう心の中で決めつつ、俺は受付に着く。

「あら？ 君、冒険者登録をしに来たの？」

「ああ。今すぐ登録をお願いしたい」

「そう……」

そう言つて、受付の女性は少し悲しそうな寂しそうな顔をした。けど、引き下がるわけにはいかない。

俺の事を貧弱なやつだとも思っているんだろう。

それが、最悪の場合を想定すると……。

「はい。ここに書いてある必要事項を記入して。筆記は出来る？」  
「大丈夫だ」

「なら、早速書いてみて」

そうして、登録用紙を見てみたが、案外普通だ。

名前に年齢、出身地は必須だが、職業や《スキル》や《能力》といったものは任意だ。俺は必須の所は埋め、任意は全て記入しなかった。

一通り見直して、再び受付の女性に用紙を渡すと、彼女の目が大きく開かれたのを俺は見逃さなかった。

やはり、何かあるな。ここは。

「ヒキガヤ君ね。君、出身地が『日本』と書いてあるけど……」

「聞いた事がなかったか？」

俺は少し仕掛けてみる。もしかしたらという期待を、密かに抱いていた。

「いいえ。あるわ。それもつい最近……」

よし、来た。俺は心の中でガッツポーズをする。

この街に勇者がいるのは分かっている。そして、生きている以上、お金を稼がないといけない。それは、世の中の常識だと思う。

そこで、職を探す。その中でも勇者を活かせる職といえば、冒険者に繋がるはず。

なら、ここ最近、この場所で登録をした可能性があると思った。

各勇者がどんな世界から、分らない。テトが教えてくれなかった。

もしかしたら、そこは地球ではないかもしれない。そんな世界なのかもしれない。

けど、もしも、地球を舞台とした世界だったら。

この街にいるであろう勇者が、出身地を『日本』にした可能性が一番高い。俺に出来たのはこれだけ。

仮に『日本』ではなく、『千葉』や『東京』とか詳しい地名を書いていたなら、通用しなかったし、全く地球とは違った世界だったなら、意味すらなかった。

けど、俺は安心しなかったんだろう。同郷である同類と呼べる存在を知ること。

現に安心している俺がいる。

「そう……あの子と一緒に、所なのね」

……やはりワケありだな。

俺は気持ちを切り替え、彼女を観察する。

何とも悲しそうな表情は、未だに晴れていない。そして、口を噤んでいると思いきや、話したそうにし、また噤む。

一体何がしたいんだ。

周りをキョロキョロと見回しているのも、気になる。

本当に、出来るなら関わりたくない。面倒事に巻き込まれるのは、嫌だ。けど、放つてもおけない。

だって、俺は頼まれたのだから。勇者なのだから。

そんな理由付けをして、深く溜息を吐いた。

「何が言いたい？」

「え？ ……いえ、何でもないわ。はい。ギルドカードよ」

あくまで、はぐらかすつもりなのか。それとも、話せないような事情が。

そう思考しつつ、俺はギルドカードを受け取る。色は銅色。ブロンズ。

「あつ。冒険者には階級があつてね」

受付の女性は、思い出したかのように、現実逃避するかのように、説明をしてくれた。略すと、冒険者の階級は、ブロンズから始まり、シルバー、ゴールド、プラチナ、ダイヤモンド、ミスリル、アダマンタイト、レジェンドという八段階らしい。

何とも、心躍るが、今はそんな事はどうでもいい。

俺は使命を果たす為に、踏み込む。こうして客観的に考えて見ると、異世界の風に当たって、俺も何か変わろうとしているのかもしれないな。

「……で、出身地が『日本』という話を詳しく聞きたい」

「え？ そ、それは……」

彼女は露骨に笑顔を引き攣らせた。彼女にとって、言いたくない事なのは、分かっている。けど、俺は前へ進まないといけない。

日本に帰るために。

彼女は、再び周りをキョロキョロと見回した。俺も見てみたが、特に変わった様子はないように見える。

賑わうロビー。冒険者達は、男であろうと女であろうと等しく酒や何かを飲み、騒いでいる。

すると、先程、入口で絡まれた男と目が合う。そいつは、俺を見て、再び嫌な笑みを浮かべた。正直、俺は、その視線の意味を考えたくもなく、目を背けた。

けど、気になって再び見ると、そいつは、いつの間にか仲間と思われる男たちを呼び、何やらひそひそと話し出したのを見て、ちよつとだけ確信に近づいた。

「嫌な世界だな……」

「え？」

「いや、何でもない」

「そう……私、あとちよつとしたら仕事が終わるのだけど、君はこの後、予定ないかしら？」

恐らく、ここでは話せないんだろうな。

「ああ、分かった。入口の外で待つてればいいか？」

「いえ、それはやめて欲しいかな。ここにいて……もしかしたら、君も、目を付けられているかもしれないから」

あ、もう目を付けられていると思いますよ。

俺は軽く目を逸らす。それを見て、彼女がどう思ったかは、分からないが、

「やらかしたっぽいね」

ああ、駄目だ。彼女から、ジト目で見られている。目を逸らした事で、バレちゃってるな。

「……まずかったか？」

「ええ。まずいわね」

そう言つて沈黙が訪れる。耳には男どもの煩い声しか聞こえない。

「ええつと、とりあえず、すまん」

「ええ!?! あ、謝らないでよ! いい? 目立つような事はしないで! あなたまで

……」

そう言つてボソボソ喋られては、困る。後半部分は何を言っているのか聞き取れなかった。

けど、思い出してみると久しぶりに人とまともに会話したな。

街中ではずっと、怖がられてばかり。まともに会話すら成立しなかった。

そう思うと、何故だろう。彼女からは怖がられている気がしない。

俺はふと疑問に思い、彼女の方へ向き返る。受付の女性という認識だけで、意識して見ていなかった。というか、よく見ると、耳がとんがってるような……

「……エルフ？」

「ん？ 私の事？ 正確にはハーフエルフだけど。それが、どうかしたの？」

や、やばい。初めて見たぞ、エルフ。しかもハーフ。

年甲斐もなく、心の中ではしゃいでしまうじゃないか。

異世界と来たら、一度は見てみたいと思っていたエルフ。

心のどこかで期待していた。

こうして見ると、中々綺麗な人だ。スタイルも……

「あのね。あまり女性の体をジロジロと見ちゃだめだよ。」

そう、注意され、俺は言い訳を頭の中で考える。が、上手く言えない。ただの興味本能でしたとしか言えん。

らしくないな。

けど、俺も材木座みたいに異世界に憧れるような部分が、残っていたんだな。

注意されたおかげが、少し冷静になった俺は、「すまん」と一言いい、俯く。再び見る

ほど、ぼつちには度胸がないんです。

俺なんて、ただでさえ目が腐っているせい、女性を見つめただけで、視姦されたと訴えられるまでありそうだから。油断出来ない。

「あれ？ エイナ？ まだお仕事中？」

すると、違う女性がエルフの後ろから現れた。

正直、気まずい状況だったので、助かった。

それと、エイナさんっていうのか、このエルフ。

「え？ ああ、もう終わりよ。ね？ ヒキガヤ君？」

「そ、そうですね」

いきなり俺に話を振ってくるとは……

「なら、交代ね！ お疲れ様〜！」

「うん。お疲れ様！ じゃあ、ヒキガヤ君、荷物すぐに取ってくるから少し待っててね」

そう言って、エイナさんは組合の奥へと消えていく。

「へえ。エイナってば……」

なんか、新しい受付の人、あの注意すべき男とは違う、怖い笑みを浮かべているんですけど。それに、獲物を狙うような目で俺を見つめられても……いえ、

早く帰ってきてくれ。エイナさん。



けど、それもすぐにエイナさんが戻ってきたことで、終わった。  
「お待たせ」

そうして、心の中で感謝しつつ、俺は二人で組合の外へ出たのだった。

## 第8話：新人潰しギルド、え？

「それで、どこへ行くんですか？」

今、俺はエルフの受付嬢こと、エイナさんと一緒に夜の街を歩いている。

冒険者組合から出た後、俺達は互いに自己紹介をした。

そして、彼女は種族ハーフエルフのエイナという名前らしい。

結構美人で、ここだけの話、眼鏡を付けたら似合いそうだと思ったが、それを言えるほど、俺はぼつちをやめたつもりはない。

そんな事が言えたら、俺はとっくりア充だ。

え？俺の自己紹介はどうだったって？

……そんなの決まってるだろ。聞くな、察してくれ。

そして、現在に至る訳だが、エイナさんは、手を顎に当て、行き先を考えているようだった。

「とりあえず、私の行きつけの飲食店に行くことにしよ。そこでなら、ある程度は大丈夫。一部の冒険者は入れないはずだから」

「……わかった。任せる」

薄々気付いていたが、飲食店に行くのか。忘れてはいけませんが、俺は金持っていない。奢れと言われては困る。

だからこそ、行きにくい場所なんだが、割り切るしかなさそうだな。

所詮、食べなければ、いい話だ。

「……奢らんぞ」

「え？ いや、いいよいいよ。誘ったのは私なんだし。自分で食べた物くらい自分で払うよ？」

そう当たり前のように言われて、ちよつと安心した俺がいたのは内緒だ。エイナさんが、まだ優しい人でよかった。

まあ、本心の方は、どうだか分からないが……。

そうして、歩いているうちに、俺らはある店屋の前で止まった。

「ここよ。かなり美味しいお店なんだからね」

そうして、着いた店を見上げる。そうして俺の目に映った看板の名前は、

【豊饒の女主人】

というものだった。

「ほ、ほう………なんとかのおんなしゅじん？」

「ふふ、豊饒ほうじょうの女主人っていうのよ」  
顔が少し熱くなった。

……く、悔しくなんかないんだからね。これでも、八幡国語学年三位なんだからね！  
エイナさんは、得意げな顔をしている。取り乱した俺だったが、言うならここだろう。  
ぼつちに空気を読むとかは出来ないんだが、それでも考えたなりに、ここなら言いやすい。

「最初に謝っておくが、すまん。俺は、食べるつもりはない」

よし、言えた。無一文が、バレることはないだろう。

だって、いくら俺でもね、男なわけでね、見栄を、いや、カツコ悪く思われたくないわけであって……

「え？ もう食べちゃったとか!? うそ、聞いてなかった。どうしょ。私だけ食べるのも、なんか、申し訳ないし。けど……」

そうは言われても、食べれないんです。ごめんなさい。

本当は食べたいです。調味料のない食事には、もう懲り懲りなんです。

けど、施しを受けることにはなりたくない。何より、こんな事で借りを作るつもりは無い。

このくらい、俺が我慢すればいいことだ。

「早く入るぞ」

「え？ あつ！ そうだね！ ヒ、ヒキガヤ君も食べたくなったら、頼んでもいいよ！  
というか、食べよ！」

後ろから、そんな声が聞こえたが、俺は無視し、扉を開ける。  
すると、賑やかな店内と、漂う飯の匂い。そして、

「いらつしやいませニヤー！」

猫がいた。かわいい……」

「なっ!? ア、アーニヤは猫だけど猫じゃないニヤー！ じゅ、獣人ニヤー！」

「あちゃー。ヒキガヤ君、普通に口に出しちゃったよ……」

聞こえなかったが、何やら呟いたエイナさんは少しだけムスツとしていた。

いや、何でそっちが嫌な顔しているわけ。普通はアーニヤにやんの方じゃないだろう  
か。というか、アーニヤにやん、焦っているというか、戸惑っている気もするし。

「に、二名様。ご案内ニヤー！」

そして、笑顔になったアーニヤにやんに先導され、俺らは席に着く。そうして、いつ  
も来ているのかエイナさんは早速、ドリアを注文をした。

そうしてエイナさんは周りを見渡している。

幸いにも俺らは角席に座ることができ、周りも俺らの事など気にしている様子はな

い。それに、あの男の姿はない。

「ふう。大丈夫そうね」

「そんなに深刻なのか？」

ずっと思っていたことだ。そして、冒険者組合にいた時は、意図的に避けられた。なので、気になっていた俺は、早速踏み込んでみた。

あの時のエイナさんは、かなり怖がっていたと思う。それも、深い事情がバレたくないうように。

「うん……言い難いんだけど、深刻よ。それも私ではどうしようも出来ないほどに。彼はまだ限界。日に日に傷付いていく彼を見るのは、もう、やだよ……」

エイナさんは俯き、弱々しくそう言った。少し目に涙を溜めているようにも見える。

けど、肝心の俺は冷静だった。元の世界に帰る為にも、勇者について知らなければならぬ。理解しなければならぬから。

それに、今の一言で、エイナさんは『彼』と言った。すなわち、牡羊座の勇者は『男』だということ、わかる。

その同性という事実、少し俺は安心した。

異性よりも最初は同性が居てくれた方が、気が楽だ。

けど、それよりも大事な事がある。俺はさらに詳しく知らなくてはならない。

「すまん、彼は傷付いていくと言ったな？ それほ、あの冒険者の男達によつてか？ 或いは他の組織なり人なのか？ そこから詳しく聞かせてくれ」

「つ！ よく分かつたね。最初に言つたので正解よ。ヒキガヤ君のいう冒険者達……そう、彼らの所属する上位ギルド『ラフィンコフィン』によつて、彼は酷い新人潰しにあつているのよ」

……………つ！？

え？ ちよ、え？

あの冒険者達が、牡羊座の勇者を虐めていたのは、予想していた通りだ。

新人潰し。たまに見かける異世界転生物のテンプレだ。まさか、あつたとはな。

というか、そんな事よりも、

「ラフコフ？」

「え？ ヒキガヤ君、知つているの？ 略称知つてるし」

俺はその質問に言葉が詰まる。

……おいおい、そのギルドは『ソードアート・オンライン』というフィクション作品の中に登場するギルドと名前が、同じだぞ。ギルド名付けたやつ、趣味悪すぎだろ。

怪しいというか、完全名前からして黒だぞ。そこ。原作の中では、人殺していたし。人殺しに快楽を覚えるような、異常者の集まり。殺人ギルドだつたし。

す、凄いい偶然もあつたもんだな。

「ええつと。話を戻すとね。その、話しくいんだけど、三日前、その『ラフコフ』のメンバーの一人に、私がナンパされてて……」

……ラフコフがナンパって。原作知っている俺からすると、違和感半端ないんだが。あんな精神破綻者の集まりがナンパしていたとか。

けどまあ、エイナさんの言ったことは、嘘ではないだろう。

それに、これは名前が同じだけで、勿論、俺が知っているラフコフとは違うだろうが。「私はあの時、やんわりとだけど、断っていたの。だけど、諦めなくて困っていた所を、彼が助けてくれたの。「この人が困っているだろ」ってね。あの時の彼、カツコよかったよ。けど、それが気に入らなかつたのか、その後言い争いになって、ラフコフの方が、彼に決闘を申し込んだの」

「決闘……」

「そう。そして、彼はそれを受け入れた。そうして、始まったのだけど、最初は上位ギルドであるラフコフのメンバーに、冒険者になつてもないヒヨっ子の彼が勝つとは、私も思つてなかつた。多分、あの場で観客していた人たちもだと思う。けど、彼には戦闘の才能があつた。彼の剣は徐々にラフコフの方を押し去っていったわ」

聞く感じだと、ラフコフは強いみたいだ。その印象や固定概念からか、観客や相手自



身も舐めていたのだろう。

けど、予想を裏切って、彼は強かった。

それもそうだろう。仮にも勇者。俺と同じ何かしらのチートを保有していると思う。

その《スキル》や《能力》が強かったんだろう。

俺も中々のチートなんだし。

「そして、遂には彼の剣はラフコフに傷を付けたの。当然、予想していなかった展開に、私も心が踊ったわ。当然、その予想外の結果に観客達も、興奮ぎみ。けど、それもラフコフのあいっつには、それが気に入らなかつた」

「追い込まれた状況か……そいつは何をしたんだ？」

「毒器よ。この決闘では、私が状態異常系攻撃を禁止にしたの。何故なら、あれは命をも蝕むから。だけど、ラフコフは、それを使用したの。最初は一瞬すぎて私も気付くことが出来なかつた。けど、彼の動きが徐々に鈍くなつて、彼が為す術もなく痛みつけられていったのを見て……そこまで来たら、私も何かおかしいと気付いた。そして、無理にでも決闘を中止させたわ。けど、それはあまりに遅かつた」

そうやって言うエイナさんは、悔しそうに唇を噛む。

「既に彼は、自分で立つことも出来ない程にポロポロになつていたの。だから、私は急いでヒールしたわ。これでも回復魔法は心得ててね。一生懸命、ヒールをし続けた。け

ど、それを見ていたラフコフのあいつは、またそれも気にいらなかったみたいで……」  
そうして、エイナさんは涙目になってくる。自分を責めているんだろう。自分のせいで、彼が傷付いたと。

「その後、ラフコフの方は何も言わずに去っていったの。けどね、話はこれで終わりじゃない。とりあえず、彼は冒険者登録をして、依頼を受けて行つたわ。それも薬草を取りに行くという簡単な依頼。けど、再び帰ってきた彼は、所々に傷を負っていたわ。最初は、間違つて魔物に襲われたせいだと思つた。けど、違つた」

「……そうか。ラフコフによるリンチ」

「うん。彼は、ラフコフよつて襲われていたの。知つたのはつい最近。正確には、あるギルマスの方が、そうではないかと教えてくれたの。私は、最近見なくなつたと思つていたけど、気に入らない新人をベテラン冒険者達が潰すという規則違反の新人潰しに、腹が立つたわ。それに気付けなかつた私にも。そして、彼に問い詰めたわ。けど、彼はそれを笑つて誤魔化するの。苦しそうな、引き攣つた笑顔で。そんなの見ていられなかつた」

やはり、彼という勇者は襲われていたのだろう。

それに、ラフコフは上位ギルドという事もあり、多分、強い。それこそ、集団でかかれば、レベルが低いとはいへ、勇者をリンチ出来るほどに。

俺はそう、冷静に分析をしていた。

「けど、よく思えば最近、ラフコフって悪い噂ばかり聞くの。それこそ、人殺しよ。噂話としてだから、誰も信じようとはしないけど、私はそうなんじゃないかって疑っている。でも、証拠はない。だから噂止まり。そんな危ないギルドに彼が、痛みつけられていると思うと、いつか彼は殺されちゃうんじゃないかって思っちゃって、怖ぐでごわぐで……」

そう言つてエイナさんは、声を我慢しながらも泣き出した。俺は、どうする事も出来ない。というか、対応の仕方が分からない。泣いている女性を慰められない。

「アンタ！ 女を泣かせておいて、黙りかい？ そんなんで男かい！ 男なら胸の一つや二つ貸しなさいっ！」

すると、料理を持ってきたアー……おばさんが俺を叱ってきた。なんか、オカンみたいな人だ。

「で、でもですね……」

「でもじゃないんだよ！ アンタは同席していた以上、泣かせた責任がある！ 事情は分からないが、このままだと上手い飯も不味くなる。ほら、こっち来て！ 慰めてやりな！」

そう言われて、俺は強引に手を引つ張られ、エイナさんの隣へと連れて、座らされる。

それを感じ取ったのか、エイナさんは俺の胸の中に顔を埋めた。

俺なんかそんな資格はないと引き離そうかとも考えたが、俺の責任と言われると、どうしようもなかった。泣かせた原因は俺でもある。俺が追求したせい。おばさんの言う通りだ。

だから、俺は静かに何も考えず、しばらく胸を貸した。

そうして、少し経つとエイナさんは、落ち着いてきたようだった。

ずっと一人で抱え込んできたんだろう。苦しかったんだろう。理解されなかったんだろう。助けられなかったんだろう。

「……ヒキガヤ君、ありがとう」

「あ、ああ」

俺は生返事しか出来なかった。純粋な感謝には、慣れてないんだ。期待しないでくれ。

「ふふっ。ヒキガヤ君の胸って広いんだね」

そう言いながら笑顔になるエイナさんは魅力的で、不覚にも、俺は少しドキツとしてしまった。

とにかく、この時の俺が赤面してないことを、祈りたい。

「ヒキガヤ君。お願いがあるの」

すると、その一言で雰囲気が変わった。エイナさんは目は少し赤いものの真剣な表情になっている。

「彼を……彼をラフコフから助けてくれませんか？」

……助けて、か。

現状として、エイナさんのいう『彼』という牡羊座の勇者は、新人潰しという虐めにあつている。

それも、嫉妬や気に入らないからという、相手側の身勝手な気持ちによつてだ。

それをエイナさんから聞いていて、俺は思ってしまった。

そんなの、間違っている。と。

そう自覚した時、俺も何だかんだで、彼と自分を無意識に重ねていたのだな、と思つた。

俺——比企谷八幡は中学生の頃、虐められていた。それは、彼とは違い、暴力とまではいかなかったものの、ハブられ、いないものとして扱われ、誰にも近づかれず、相手にされず、正直なところ、かなり心が痛かった。

そして、何より、その時、俺を助けてくれた人は、いなかった。

俺はずっと一人ぼっちだったんだ。

けど、今はどうだろうか。

俺は『彼』を救い出せるだけの『力』がある。

彼という人物が、どんな人でどんな性格をしていて、どんな顔をしているかなんて分からない。歳すらも知らない。

けど、俺は純粹に『助けたい』と思った。

いくら、牡羊座の勇者だからと理由付けしても、本質的には変わらない。

だから、ここでの、エイナさんからの頼みに対して、俺が選択する答えは決まっている。

当たり前だ。助けてやりたいんだ。

「ああ、任せろ。彼は、助ける」

「ヒキガヤ君……」

ああ……そんな期待したような目で見ないでくれ。勘違いしてしまう。俺は確かにチートかもしれない。彼を助けられるかもしれない。

けど、俺の本質は変わっていない。やめてくれ。

「け、けど期待はすんなよ」

俺はそう言つて顔を背ける。エイナさんがニコニコと笑顔になっているのが、分かるが、今の俺にはこれが精一杯なんだ。

「なら、その期待を大きくする為にも、彼を探し出さないとね！」

「ああ。だけど、宛はあるのか？」

そう言うのと、エイナさんは胸を張って「ふふん」とふんぞり返った。その様子からして、

「ふっ。ありそうだな」

安心した。これで、一人目の勇者に会うことが出来る。

「それで、どこに行けばいい？」

「うん。言わずらいんだけどね……『彷徨いの森』。彼は、そこにいるわ」

彷徨いの森。そこに牡羊座の勇者はいるのか。

俺はそう聞き、地図を広げる。すると、彼を示す牡羊座のマークは、街の外のある付近にいた。

多分、ここが彷徨いの森なんだろう。

だとすると、

「俺がここに来た時、通ってきた森じゃねえか」

俺は小さく独り言をこぼす。けど、安心だ。まだ見ぬ敵と戦うよりも見慣れた敵の方がいい。

それに、あそこでなら牡羊座の勇者である彼なら死ぬことはないだろう。

戦闘センス皆無の俺でさえ、抜け出せたのだから。

「ヒキガヤ君。変わった地図を持ってるね」

すると、俺の右肩付近にエイナさんの顔があった。いい匂いがした。

けど、咄嗟に驚いた俺は、少したじろいだ。全く、心臓に悪い。

それに、エイナさんはまたムスツとしているが、俺が何をしたというんだ。

けど、その質問に答えるなら、

「貰い物だ。まあ、普通の地図とは違うな」

「へえ。って、このライオンの絵の描かれた丸がこっちに少し動いたんだけど!」

「ん? んんっ!」

エイナさんは、そう言って地図のある点を指さした。俺らがいるコヒキア王国とは

真逆の方角にある点だ。

そこには、ライオンの絵の描かれた丸がある。

それが、少し動いたんだろう。まあ、それは俺からしたら当たり前だ。

……けど、よく思い出してみると、この点の動きおかしくないか。

冷や汗が出てくる。この地図は地球の世界地図と同等。

故に、各勇者達の移動は誤差の範囲。けど、このライオンの点の移動スピードは少し

異常だ。



速すぎる。

三日。俺が、テトと別れた後、一通りどの星座がどの辺にいるか覚えただが、この獅子座の勇者の位置が、明らかに変わっていた。

それも、アメリカ大陸を横断するくらいの長距離を移動しているくらい。

何かに乗っているのだろうか。それにその進行方向の直線上には、俺達のいるコヒキア王国がある。

これも、まさかと思つた。けど、俺のように他の勇者を探知できる者はいないと思う。それに、仮にいたとしても遠くにいる俺らよりも近場の勇者に会いに行つた方がいいだろう。

獅子座の勇者である以上、敵ではないと思う。というか、思いたい。

向かう方角だつて、たまたまかもしれない。

「けど、まだ距離的に、アメリカと日本くらい離れているし、当分大丈夫だろう」

いくら速いからと言っても、飛行機より速いとは思わない。

———というか、そんな事よりも、今は牡羊座の勇者じゃないか。

彼の置かれている状況を解決せねばならない。その障害としてラフコフがいるが、俺たち二人で蹴散らせば大丈夫だろう。なんとつて勇者なのだから。

「ヒキガヤ君、大丈夫そう？」

「ああ、大丈夫だろ」

……しかし、この時の俺は、俺自身の力を過信していたのだった。

## 第9話：人生は苦いから

「うんうん、どうやら解決したようだね。彼女の顔が晴れやかになったよ」

そうして、俺は続けて牡羊座の勇者の話を進めようとしたが、先程料理を持ってきてくれたおばさんが、再び現れた。

そうして、料理を指差し、

「やっぱり泣いている時に食う飯より、笑っている時に食う飯の方が、美味しいってものよー！」

「ミ、ミアさん……ありがとうございます！」

エイナさんは感謝を述べ、ミアさんという名のおばさんは、そう言い残して満足したのか厨房へと帰っていった。

そして今、俺の目の前、正確にはエイナさんの目の前なのだが、美味しそうな匂いを放つドリアが置かれている。

……正直や、やばい。腹が空いてくる。食べたい。食べたい。

そんな俺の心中での葛藤を知らず、エイナさんは「いただきます」と言い、食べ始めていた。

そんな様子をぼんやりと見ながら、俺は考えていた。

それは、俺の現状についてだ。

俺の現状は、現実逃避したい程酷い。金がないんだ。これ以上、野性的な生活を続けるわけにはいかない。

だから、何としても早くお金を手に入れないといけな。

そうしないと、食べ物さえも十分に得られない。それに服だつて川で魔物の血を流したりしていたが、もう限界が近いだろう。

ちゃんとした装備を整えないと、攻撃が掠ただけでも大惨事になりかねん。だから、装備も必要。

それに回復薬とかのアイテムも揃えておきたいところだ。特に先程のエイナさんの話を聞き、この世界では状態異常系の攻撃は危険のような気がするので、状態異常の回復薬も欲しい。

けど、俺はチートスキルの一つ。

《死んだ魚のような眼》<sup>アンソングンアイ</sup>によって、状態異常には、ならない。

しかし、牡羊座の勇者には効いたように、持つておくに越したことはないな。

あとは、宿か。今夜は寝るつもりがないが、これからはそうは行かないだろう。どこかしらの宿に泊まる必要がある。

だからこそ、金が必要。

牡羊座の勇者の事もだが、まだまだ俺は、この街ではやるべき事が多そうだな、と自覚していた。

「……ヒキガヤ君？」

すると、思考に耽っていた俺の目の前から突然、エイナさんの声が聞こえた。その顔は、少し心配そう。

というか、申し訳なさそうな感じも感じる。

「もしかして、食べてみたい？ どう？ 一口食べてみる？」

……悪魔の囁きが聞こえた。

「ふふっ、今ので分かっちゃった。食べたいって顔に出てたよ」

……バレちゃってらあ。

俺は、ずっと食からは、話を逸らして意識をしないようにポーカーフェイスを意識していた。なのに、気を抜いた隙に、気付かれてしまったとはエイナさんの観察眼も中々のものだ。

けど、流石に俺も人の食べ物を貰う訳にはいかない。信用以前の問題だ。エイナさんも本心は、嫌だろう。そうに決まっている。

「私は全然気にしないし、いいんだよ？ ヒキガヤ君」



そして、今の俺の顔は、多分赤くなっているだろう。何となくわかる。顔が熱い。けど、エイナさんは気にしている様子はない。

もしかして、スプーンごしに間接キスをしていたのを、気付いていないんだろうか。エイナさんは少し天然なのかもしれない、と俺は知った。

少し落ち着きを取り戻した方がいいな。

そう思い、冷静になるため、俺は、

「さて、食後の一杯とでもいっくか。《極甘珈琲創造》<sup>マツカンクリエイト</sup>」

そうスキル名を言い念じた。すると右手にスツとマツ缶が現れる。しかも温かい。

「え？ え？ ヒ、ヒキガヤ君、どういうこと？」

エイナさんはその現象に驚いているようだ。

少し顔がニヤけそうになる。

「これは、俺のスキルだ」

「こ、こんなスキルが、あるんだ……」

《極甘珈琲創造》<sup>マツカンクリエイト</sup>は、俺の五個あるスキルの一つ。

効果はマツ缶を創造することのみ。だが、俺は異世界という未知の世界に来て以来、闇魔法の次くらいに愛用していた。

それに、このマツ缶。正式名称はMAXコーヒーと言うのだが、決して万人受けする

ようなものでもなく、極甘。

小町とかに飲ませてみても「うげえ、甘いよ。甘すぎるよお兄ちゃん」と言い、飲みきるのを断念。地球でも、そう多くの同志を見つける事が出来なかった。

「ちなみに闇魔法も使えるぞ」

そう言つて俺は左手の掌の上に闇魔法を使った黒い炎を実体化させる。

「闇魔法使いなんて、珍しいスキルね」

そうして、エイナさんの驚きと興味を得たところでの俺は闇魔法を解除する。

当然、黒い炎は何も無かったかのように消える。

俺には何ら影響はないが、この炎は他の生物に対しては悪影響を及ぼすからな。気を付けなさいといけない。

そうして、俺は缶に口をつけコーヒーを飲む。

やはりマツ缶は甘くて美味しい。

言つてなかつたが、スキルがあるから、と言つて無限にマツ缶を生み出せる事が出来るわけじゃない。

前まてをはら一日ずっと飲めると思っていたが、異世界に着いた時に検証して見た結果、まだレベルの低い状態では、一日三缶が限界であった。

だからこそ、大切に飲まねばならない。無限に生み出せるのではなく、有限だからこ



そ味わわなければならぬ。

「ねえヒキガヤ君。私にも飲ませてくれない？」

……至福の時間を味わっていた俺に、悪魔の囁きが聞こえてきた。

また、間接キスか。と思ったが、まだ一日のストックは二つある。

俺は、食べ物を通してくれたエイナさんに、当然断る事も出来ず、借りを返すつもりで《マツカンクリ甘珈琲創造》と再び念じ、マツ缶を創り出す。

尤もな貸し借りなんて、思っているのは俺だけなのかもしれないが。

エイナさんは、俺が創り出したマツ缶を受け取って、口に付ける。そうして、慎重に一口飲んでみた。

「美味しいだろ？」

俺は新たな同志を見つけられると思うと待ちきれずにエイナさんに感想を聞いてみた。

エイナさんは、俺と同じでマツ缶がいける口なのか。それとも、いけないのか。それが楽しみだった。

「え、ええつとね。ヒキガヤ君……甘すぎるよ、これ」

エイナさんは、申し訳ないような顔で、そう言った。

……くつ。ダメだったみたいだ。エイナさんは同志じゃない。けど、これだけは言っ



ないと直感的に感じていた。

なので、エイナさんに聞いてみた。何か嫌な予感がしたんだ。

「多分。というか『彷徨いの森』は難易度が、そこそこ高い所なのよ。私達が行っても、魔物の餌になりかねない。だから、彼を待つわ」

「俺達が行っても、死んでしまうかもしれない。けど、彼なら大丈夫と。随分と信じているのか。彼の強さを」

「うん。ヒキガヤ君にも見せたかったよ。本当に強いんだからね。決闘で闘った相手のラフコフのメンバーは、そのギルドの幹部的な地位に着いているくらいの実力者なのよ。それと同等かそれ以上なんて、凄すぎるの。けど……人一倍危ない子なの……」

そうやってエイナさんは、また暗い顔をする。それ程までに彼のことが心配なんだろう。

そうして、エイナさんは、水を一気に飲みほす。

そして、水をお代わりする為に、店員を呼んだ。

俺は見落としていたというか、自覚をした。

エイナさんにとつて、俺の実力は未だに未知数。それに冒険者登録を今日したばかりの、冒険者としてはヒヨッコのヒヨっこ子。

そんな俺を危険な『彷徨いの森』へ行かせるわけには行かないと。だから、街で待つ

んだ、と。

エイナさんは、そう思っているのではないだろうか。

けど、そんな必要はないな。

……エイナさんは、一つ大きな間違いをしているだけなのだから。

「はい。お客様、何でしょうか？」

「あつ、お水のお「エイナさん！」……え？」

俺は、らしくもなく大きな声でエイナさんと呼ぶ。客観的に見ると、この時の俺は周りが見えてなかったらしい。

「俺の実力を、見誤ってませんか？」

……今思うと、この台詞は黒歴史確定だな。

「俺は、その『彷徨いの森』を単独で抜けて、このコヒキア王国に入国してきました。なので、魔物にやられることはないでしょう。それに、敵がラフコフであろうと、俺なら倒して、彼を救うことが出来る。それも今すぐにでも！」

そう自信満々に言い放った。

「え？ 『彷徨いの森』を、単独、で？ ヒ、ヒキガヤ君、それは、どういう……」

思った通り、突然のことで、エイナさんは混乱しているようだった。

けど、俺の予想を大きく上回る形で、エイナさん以外に反応を示した人がいた。

「敵がラフコフ、ですか」

それは、エイナさんが呼び寄せた店員さんだった。

彼女は、耳からしてエルフだと思う。薄緑色の髪の毛で、一見、とてもクールな印象を受けた

しかし、目はそんな印象とは違い、何か燃えるような激情を抱いているような目だった。控えめに言って、怖い。

それに、よく見てみると何か見覚えがある気がした。

……こう、テトと出会った時のように。

# 第10話：異世界にダンまちを求めるのは間違っているだろうか

俺にとって、見覚えのあったこの店員は、地球で会ったことがあるとかでは決してない。

ぼっちで他人との接触が少ない俺にとって、記憶を辿っても彼女のような人には会ったことがないのは、容易に思い出せる。

だからこそ、思う。まさか、と。

テトに会った時のように、俺は自分の目に映る

視界を疑っていた。

「貴方は、これからラフコフと戦うと言うのですか？」

次の瞬間、彼女が発した言葉は、冷淡として強弱のない言葉であったが、どこか痛々しさを感じ、理解する事のできない激情を感じた。

そうして、そんな彼女に俺は気遅れさせられた。

彼女から溢れ出る何かしらの強い感情のようなものによって。

「あ、ああ」

俺は若干戸惑いながらも返事をする。

すると、彼女は俺を疑っているのか、エイナさんの方へと向き返り、

「本当なのですか？ ラフコフは冒険者組合公認の上位ギルドです。それはよくご存知のはず」

「……本当は待つつもりだったわ。けど、そうね。私は決心したの。あそこの闇を明るみに晒す必要がある。ある人を助ける為に！ 私は戦うわ！」

エイナさんは負けじと、その店員に向かって堂々と言い放った。エイナさんからすると、『もう彼が傷付くのを見ていられない』という気持ちからだろう。

そんなエイナさんの覚悟に店員は「そう」と小さく呟いた。その瞬間、彼女がどう思ったかは分からないが、俺には彼女が少し笑みを零したようにも見えた。

「今の貴方は、良い目をしている」

すると、エイナさんに向かって彼女はそう言った。それは変わらず無表情のままであつたが、どこか嬉しそうでもあつた。

ここまで、冷静に観察できているなんて、これまでのぼっち人生で培ってきた人間観察力が生かされてきたな。

そうして彼女は、エイナさんの次に再び俺の方を見てくる。

俺をじっと見つめてくる彼女の瞳は、蒼くて綺麗で、俺は無意識に目を逸らしてしま

う。俺の顔が赤くなっていないことを祈る。

「貴方の目も良い目だ」

……ああ。笑顔でそんな事言われたら、意識しちやって赤くなってしまいうだろ。俺の腐った目を褒めてくれるなんて……。

そうして、目を合わせずらくなつた俺は目の前のエイナさんの方を見ると、エイナさんは何故かむくれている。

エイナさんも元々が美人なわけであつて、可愛かつたのは言うまでもない。

「……ヒキガヤ君。何デレデレしてるの？」

あ、エイナさんの目のハイライトが消え始めているじゃないか……や、やばい。

「お、俺もエイナさんの目、き、嫌いじゃないですよ……」

「ヒキガヤ君……うんうん、私も好きだよ、君の目」

エイナさんはそう言い、笑顔になる。

少し身震いがしたのは気の所為だろうか。

俺はぼっち特有の危険センサーによって、咄嗟に話を変えるため、店員の人に気になつていた事を聞いてみる。

「ええつと、すみません。ラフコフがどうかしたんですか？」

その質問に店員は、一瞬眉を歪めたが、再び無表情に変わり、



「昔……色々あった、からでは、駄目でしょうか……」

そう言つて彼女は、エイナさんの方を見た。エイナさんも彼女のその表情を察したのか表情が暗くなる。

二人は顔見知りっぽい感じがする。

エイナさんとも、先程会つたばかりの俺には分かるはずもない秘密を抱えているんだな、と俺は知り、知りたいと思つた。

それに、店員の彼女も気になる。なので、再び観察してみることにした。

……やっぱり似ている、よな。

すると、店員の方から質問がきた。

「貴方は、何故奴ら——ラフコフを敵と見なすのですか？」

「先程も言つたと思うけど、その助けたい彼はラフコフによつて新人潰しにあつているの。そんなの……見逃せるはずがないッ！」

エイナさんは間髪入れずに強く答えた。俺も一応、その通りなので頷いておく。そんなエイナさんに彼女は、また「そう」と言うだけだった。

……どうすればいいんだ。聞いてみてもいいのだろうか。

俺は本当の事を言うと、彼女に心当たりがある。



そして、お客さま様に呼ばれたので、ある角席へと向かいました。

そこには、冒険者組合の受付嬢をしているエイナさんと、見た事のない黒髪の青年がいました。

とりあえず、青年の方は私に気付いていないようなので、私はエイナさんに、要件を尋ねました。

それだけで、私はここでの接客は終わると思っていました。

しかし、ここで、ある会話が耳に入ってしまったのは、ただの偶然でした。

突然、青年は大声で「エイナさん！」と叫び、

「俺の実力を、見誤ってませんか？」

彼は若さ故なのか、そんな事を口走りました。長い間、戦いに身を置いていた私からすると、彼が到底強そうには見えません。虚言なのだろうと思いました。

しかし、この後、彼が言った言葉は見逃せるものではありませんでした。

「俺は、その『彷徨いの森』を単独で抜けて、このコヒキア王国に入国してきました。なので、魔物にやられることはないでしょう。それに、敵がラフコフであろうと、俺なら倒して、彼を救うことが出来る。それも今すぐにでも！」

……ラフコフ

この言葉は、私の人生で決して忘れる事も目を逸らす事も出来ないものでしょう。

私は無意識のうちに口が動いてしまっていました。

「敵が、ラフコフですか」

彼はラフコフを敵と言いました。ならば、私と同じかもしれない、そう期待してしまつた自分がいたんです。

少し昔話をしましょう。

私は昔、冒険者でした。そして、あるギルドに所属していました。そこで、仲間と共に依頼を受けたり、冒険をしたり、楽しい日々を過ごしていました。

しかし、そんな楽しい日々はある時、崩壊しました。

通称『怪物進呈』バス・バレット。

他。パーティーに魔物を押し付けて、魔物の攻撃対象変えさせ、加害者側は逃げていくという卑劣な禁止行動。

あの日、私たちのギルドは、ラフコフのギルドによって魔物を押し付けられました。そうして、私たちのギルドは全滅。

正確には、私を残して全滅した。全員、死んだ。生きているのは、私だけ。

当然、泣いた。嘆いた。私がつと強ければ仲間はずに死なずにすんだ。なのに、私だけ生き残つた。生かされた。

それが、何より悔しくて、苦しくて、自分の無力さを恨んだ。

けど、そんな私の心の中には、もう一つの感情が生まれていました。

『復讐』

その二文字でした。仲間達の為にも、と。

そして、私のラフコフへの復讐生活が始まりました。

片っ端から、ラフコフに対して闇討ちを仕掛けていき、沢山の命を殺めていきました。当然、冒険者ではない彼らの知り合いでさえも。

そうしていつしか、私は冒険者組合のブラックリストに載り、冒険者としての資格を剥奪されました。

しかし、そんな些細な事はどうでもよかった。

私は復讐を続けました。

けど、それにも限界があつたようで、多数の追っ手との戦いで瀕死の重症を負い、野垂れ死にする所をシルという少女に拾われました。

幸いにもシルは、ここ『豊饒の女主人』で働いている給仕のようで、私は彼女の勧めで、ここに向かい入れてもらいました。

そんな私なのですが、あの日の事を忘れた事はありません。

目の前で、魔物に蹂躪されていく名前達など、もう見たくない。もう起きてはならない。

私の『復讐』心は、今でも衰えていません。

「貴方は、ラフコフと戦うと言うのですか？」

なので、私が思っていた事を不意に口に出してしまったのは、仕方がないことでした。そこには、私の言葉の中に潜む復讐心が溢れ出ていたかもしれない。

そんな私の質問に彼は威圧されたのか、「あ、ああ」と曖昧な返事をするだけでした。そして私は彼に聞いたのが間違いだと思い、冒険者組合の受付嬢をしているエイナさんを見ました。それなら、少しは言葉に信用が出来ます。

「本当なのですか？ ラフコフは冒険者組合公認の上位ギルドです。それはよくご存知のはず」

「……本当は待つつもりだったわ。けど、そうね。私は決心したの。あそこの闇を明るみに晒す必要がある。ある人を助ける為に！ だから戦うわ！」

彼女は迷いのない目で見つめ返しながら、そう言いました。それは、まだ私が冒険者をやっていた頃の彼女とは違い、とても人間らしく、堂々としていました。

そんな彼女に私は、少し感心し、

「今の貴方は、良い目をしている」

昔の彼女と比較しながら私はそう言いました。彼女は私の言葉に少し驚いているようでした。

そして、先程から彼女ではない彼にずっと見られていた事に気付いていた私は、再び彼の方を見てみました。

表現し難い腐りきったような目……。

けど、その目の奥は鋭くて綺麗で心地よくて、吸い込まれていくようで……。

「貴方の目も良い目だ」

私は久しぶりに笑顔になってしまったかもしれませぬ。

それから、一悶着あったようですが、彼は話を変えるためか、私に厳しい質問をしてみました。

「ええつと、すみませぬ。ラフコフがどうかしたんですか？」

……私はその理由をここで話す気には、どうにもなれませぬ。

何より今日会ったばかりの彼に、私の暗く汚れた過去を語りたくありませんでした。

だからでしょうか……。

「昔……色々あった、からでは、駄目でしょうか……」

そう私は濁してしまいました。彼はそんな回答に、眉を歪めていました。

……彼の考えている事がよく分からない。

なので、ふと彼と同席するエイナさんが気になり見ると、完全に目が合いました。彼

女は申し訳ないような表情をするだけです。

私は先程の彼女の言葉を思い返しつつ、再び問いました。

「貴方は、何故奴ら——ラフコフを敵と見なすのですか？」

「先程も言ったと思うけど、その助けたい彼はラフコフによつて新人潰しにあつているの。そんなの……見逃せるはずがないッ！」

彼女は強い意志を持ちながら、そう言いました。そんな彼女に同意しているのか、彼は頷いています。

そうでしたか……ラフコフによる新人潰し……

ありえる話だと私は思いました。

奴らなら、やっていてとおかしくはない、と断言できます。

なので、私は小さくはありましたが、「そう」と呟きました。

そうして、私は二人を見ました。

エイナさんからは、覚悟を決めたことが分かります。本当に彼という人物を救いたいのでしょう。

けど、ラフコフは生半可な気持ちで挑んでいい相手でないことは私が一番よく理解しています。

奴らは強い。



だからこそ、彼女らが奴らと戦えば、かなりの確率で死ぬ。

それも証拠も残らず、誰にも見届けられずに……。

そんなのは、私も見ていられません。これ以上、奴らによる被害者を増やしてはならないのです。

何より私だって、戦いたい。それ程に奴らが憎い。

それが私の本心なのですから。

だから、私は……

「……私も同行させて貰っても宜しいでしょうか？」  
彼らに力を貸すことにしましょう。

## 第11話：ぼつちに自己紹介は難しい（2回）

「同行させて貰っても宜しいでしょうか？」

リユースさんの口からそう言われた時、俺は不意に目を見開いてしまった。

「え……あ、えつと……」

よく覚えていない俺を恨みたいところだが、確か『ダンまち』の中では、リユース・リオンというキャラは強かったはず。

それこそ、元冒険者？ だったけど……なんか、ワケありっぽかった、よな。

あと多分、レベル3、4くらいの実力はあつたはず。

ああ……こうなるんだったら、もっと原作読み込んでおけば良かった。何してたんだ、あの時の俺。

けどまあ、この人達のことを思い出せただけ、マシと思っておくか。そうしないと、やっつけていけねえ。

けど、そんな俺でも思った。いきなり会話に入ってきて、同行しようとする彼女の不自然さを。

俺は当然、不思議に思った。

——なにが、目的なんだ。と。

俺はいつもよりも目が鋭くなっていたと思う。

それが、どうやら伝わったのか、リユースさんと俺の目が合った。

「駄目、でしょうか？」

「……」

……

……

永遠のようにも感じるリユースさんの、見つめ合い……

……

……

.....ぷいつ。

い、いや、まじで、ぼつちには見つめ合うとかレベル高すぎるから。

ほんと、見つめられすぎて、全身が視線によつて溶けちゃうまであるから。

こう言ったことは、俺みたいなエリートぼつちには刺激が強すぎる。

.....はあ、なんでだよ。何見つめ合っちゃったんだよ、相手はエルフだからってさ。何デレてやかをる。けど、エルフだしな、エルフだしなあ、エルフさんですもんね.....  
綺麗だな」

ふとリユーさんの方を見ると、ほんのりと頬の赤くするリユーさんがいる。

え、これはもしや.....

い、いや、そんなわけない。

ほ、ほんとにまじなんなの、惚れてるの？俺に惚れちやつてるんの？惚れてるんなら、俺は今すぐ告つて振られるまであるからね、いいんだね、いいんだよね？告つちゃうよ？けど、振られちゃうのは分かつてる。出会つて数分だよ。馬鹿なの。ねえ、俺の

頭馬鹿なのだろうか。やはり俺の脳内妄想はまちがっている。

「ヒキガヤくん……」

……そして、エイナさんは俺を睨んでくるし。あつ。まさか、貴様、心の声を!?

「さつきリユーさんに向かつて『綺麗だな』とか声に出ちやつてたからね」

「……へ?」

ま、ままま、まじかよ。顔が熱を帯びていくのがわかる。うわつ、恥ずかしすぎるだろ。何口走つてんだよ、おれ。

ちらつと俺はリユーさんのほうをしてみる。そこには顔を俯けつつ未だに赤いリユーさん。可愛い。これってなんて名前のギャルゲー?

って、違うだろ。怒らせてしまったみたいだ。

「えつと……その……」

こういう時、なんて言えばいいんだよ……あつ、リユーさんが顔を上げた。それで、俺の方をまた見てくる。

「同行させて貰っても宜しいでしょうか?」

え? 同じ台詞を二回目だどっ!?

……そういうことか。テイク2ということだろう。先程のは無かったことにするらしい。

いい策だ。それに乗っかるとしよう。うんうん、そうしよう。「も、もちろんです」

俺は勢いよく肯定の返事をした。何が目的とか、どうでもいいだろ。多分、大丈夫だ大丈夫。この人、原作だと主人公の味方ポジだったし。

そんな俺の返事に安堵したのか、リユースさんは肩を撫で下ろす。

「はあ、ヒキガヤくんがそう言うのなら、私も同行を認めざるおえませんね。それに貴方なら戦力として申し分もないですし」

「いえ、此方こそ、機会を与えて下さった事に感謝を」

ふう、エイナさんも認めてくれたようで良かった。

「では、ご存知かどうか分かりませんが、私の名前はリユース・リオンと言います」

そう言つてリユースさんは、俺に向かって右手を差し出した。これは……握手か。

そういうええのだが、俺は今、リユースさんの名前を知らない設定だった、な。

つてことは……次は俺の自己紹介か……。

「ええつと、その……俺の名前は、ひきぎやや、はちまんです」

くつ、噛んでしまった。ひきぎややになつてしまったじゃないか。くそう、あの時の俺を殴りたい。

そう思いつつ、俺はリユースさんと握手を交わす。

「ふふっ、これからよろしくお願いしますね。比企谷さん」

けれども、リユースさんは俺の嗜みを華麗に修正して、正しく読んでくれた。や、優しい。

「は、はい。此方こそよろしくお願いします」

そうして、俺とリユースさんの共闘の契りは結ばった。

「……して、エイナさんは彼の事を随分と高く評価しているようだ」

……ん？ 彼って俺の事か？

「へ？ ああ〜うん。そうだけど……」

「強いのですか？」

「え……そ、そういうえば……」

………ん？ んん？ なんか俺睨まれてる？ ぼっちは視線に敏感なんだぞ。

「……ヒキガヤくんって強いのか？」

エイナさんにそう聞かれた。そんな事を俺に直接聞きますか、普通。弱かったら、精神的に来る質問ですよ、それ。

………はあ、どうしようか。どう答えようか。

多分、俺はチートだ。勇者の称号を与えられている時点で強いと思う。

世界を救う為に異世界から連れてこられたくらいだしな。

てか、これはあれだ。まるで……

——俺の異世界生活の在り方を決める分岐点だな。それも大きく二つに分かれる分岐点。

一つは、俺のステータスの全てを打ち明けて無双するルート。名付けて八幡TUE E Eルートだ。どやっ。

そしてもう一つは、俺のステータスを秘密にする影の実力者ルート。実は俺って強いんだぜっていう男のロマン溢れるルートだ。どやっ。

……はつきり言ってどちらも捨てがたい。

けど、強いて、強いて選ぶとすれば、

「俺は強くないですよ、多分」

俺——比企谷八幡は後者を選ぶ。

だって、目立ちたくないもんっ！てか、影の実力者とかめっちゃやってみたいし。何より、そんな俺が勇者だとバレた時なんて……

「そ、そうなんだ」





見覚えは……ないな。まあ、普通はあるわけがないか。

「……あ、まさか、ここって」

ん？ 隣で家をずっと見つめていたエイナさんが、突然何かを思い出したように声を上げ、リユーさんへと顔を向ける。

そんなエイナさんを見て、リユーさんは応えるように頷き、呼び鈴を鳴らした。

……なんか二人で通じ合ったようだ。

「やっぱり……あ、ヒキガヤくんは知りませんか？ ここって、あの有名な冒険者さんのマイホームですよ！ そうですよ！ 絶対そうだった気がします！ ですよね、リユーさん」

エイナさんの呼び掛けに、リユーさんはもう一度頷いている。

有名な冒険者か。

そう言われても……俺は異世界から来たばかりの新米だから、この世界の冒険者事情なんて知らない。

知っている事、俺が持っている事といえ、原作知識しかない。

……ん？ 原作知識？

……ま、まさか『ダンまち』の誰かの家だったりしてな、ははっ。

……え、まじで、そういう事なんじゃないか？　なんか、ダメもとで言つて答えが当たってしまった系じゃないのか、これ？

どうしよう……当たつていそうな気がする。

「その通りですよ、エイナさん」

「へえ、噂には聞いていましたが、本当にギルドのホームには、住んでいなかったのですね」

誰だ。『ダンまち』の冒険者って誰がいた？

その中で、有名な冒険者って言つたら……あの……アイズ……ヴァレンなにがしさんだっけ？

それとも、その人が所属していたロキファミアの仲間達の誰かか？

確か、相当に強かつたと思う。

あとは……フレイヤ？の隣にいつも居た筋肉ゴリゴリの男とかが強かつた気がする。

けど、こんな落ち着いた雰囲気の家に住んでそうにないしな。いやでも、もしかした

ら……

え、本当に誰なんだよ、八幡わからん。

『ダンまち』には他にも強者は沢山いた気がするし、本当に、誰なんだよ……。

「比企谷さん、ここはですね……」

すると、呼び鈴を鳴らしていたリユースさんが振り返って俺に話しかけてきた。

……………ゴクリ。

「【閃光】の家なのですよ」

「あつ、こんな夜に誰かと思えば、久しぶりね、リユース。それと、エイナさんもお久しぶりです」

すると、リユースさんの言葉と同時にその奥の玄関から一人の女が出てきた。多分、俺

と同じくらい歳の代と思う。

栗色の長い髪に、容姿は可愛いと言ってしまふ程の女性。腰にはレイピアを携え、白に赤のラインが特徴的な服を装備している。それにより、カッコ良さすらも感じる。

なんだ、リユースさんが紹介したかった人ってこの人か。

俺の知っている人だ。それも、そう、有名人だ。

……っておいおいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！

らしくもなく、心の中で叫んでしまった。

普通はこれから紹介される人を、俺が知ってるのおかしいから。

え、え、まじか、完全に予想外だった。

ここって『ダンまち』の世界じゃなかったのか？

俺の目の前で家から出てきた人って違う作品じゃないか。

だって、だって、この人って……絶対……

どう見たって『アスナ』だろ。

【閃光のアスナ】さんじゃん。Asunaさん！

おいおい、一体どういう事だ。

何故、『S A O』のキャラがいるんだ。  
ソードアート・オンライン

俺は頭を抱え込みたくなる衝動に襲われる。

確かにS A Oに登場するラフコフというギルド名が存在していたけれども、それ

は単なる偶然で、俺は多少は違えど此処が『ダンまち』を舞台にしている世界だと思っていた。

けれども、まさか二つの作品が融合していたなんて、俺の想像を超えていた。

この世界は一体どうなっているんだ。

「ん？ リュー、その後ろにいる男は誰なの？」

「ああ、この方は……説明するのなら、そうですね……先程知り合った冒険者です」  
「先程って……危険じゃないの？」

……まあ、いいわ。リューが信用しない男を此処には連れてきたりはしないよね」  
そう言つて俺を値踏みするように見てくるアスナさん。

だから、ぼっちは視線に敏感なんですよ？ めっちゃ見てるのは分かっちゃいますか

らねえ……

「私の名前はアスナよ。冒険者の中では【閃光】って呼ばれてるかな。よろしくね！」

……俺に向かって今、ちゃっかり自己紹介しやがったな。アスナさんや。

自己紹介……か……次は俺の番だよな。

大きく深呼吸をする。よし。

「俺の名前は比企谷八幡でしゅ。よろしゅく」

………ああ………もう俺なんて、俺なんて………穴を掘って埋まっています………

「ヒ、ヒキガヤくん!? 何処からそのスコップ取り出したの!? てか、何で穴を掘ってる

の!?!」

「………凄まじい魔力コントロールだ」

「あははは。比企谷くんって面白いね」

って、なんで俺の手にスコップがあるんだよ………あ、これは俺の闇魔法か。闇魔法でスコップを形作っちゃってるんだ。

というか、今は穴を掘って埋まっていたいんだ。止めないでくれ。

「はいはい、ヒキガヤくん。お外に出ようね！」

……エイナさんによつて俺の穴埋まり生活は阻止され、一分も持たずに終わった。

〔完〕

「それで、リユー。何の用件なの？」

「はい。ラフコフについての件です」

それを聞きアスナさんの目が真剣になる。

「……ラフコフね。私のギルドも今、作戦を練っている所よ。あそこはこれ以上放置できない！ 調査した結果、人殺しの証拠だつて集まりつつあるし。確か、リユーだつて昔……」

「……アスナ。その話はやめてください」

やつぱりリユーさん、過去に何かあつたんだな。それを俺が深く聞くのは……駄目だな。

「あ、ごめん、リユー」

「いえ……大丈夫です。それで、用件はというと、私達はこれから奴らの新人潰しを止めに行きます。一人の少年を救う為なので、奴らにそこまでの戦力は居ないと思います。アスナには、念には念として助つ人を頼もうと思ひ、此処に来ました」

「そう、なら私はその助つ人引き受けるよ！」



アスナさんは胸を張ってそう言った。ラフコフには何かしらの思いでもあるのだらう。

「丁度運がいいことに、遺跡の調査が終わって帰ってきたばかりで装備したままだし、今すぐ行けるよ」

「あ、極東に出来た新しい遺跡の調査終わったんですね！」

「うん！ 団長達が今頃、組合に報告に言っているはずだよ」

「……今思ってたけど、エイナさんとアスナさん……声似てる。というかこれ、声優さん、同じだっただろ!？」

「ご都合主義かなんか知らんが、いいの？ 声同じだよ？」

微妙に違う感じはあるけど。

「二人とも、その話はまた後程にでも。今は時間が惜しい。これ以上、夜も深くなり日を跨ぐわけにはいきません。ただでさえ、夜は魔物が活発になるのですから」

「そうね。私も直ぐに準備してくる。少し待ってて」

そうして俺は、四人で『彷徨いの森』に向かう事となったのだった。

## 第12話：命の軽さと重さ

「エイナさんって戦うこと出来たんですね」

「もう！ ヒキガヤ君！ これでも私はエルフの血が流れているのよ。弓や風魔法は少し使えるんだから！」

エイナさんはそう言い、ぷんぷんと頬を膨らましている。少し可愛い、と思っってしまったが、いけない、集中しなくてはいけない。

「……二人とも、私達は此処に遊びに来た訳じゃない。いつ敵に襲われてもおかしくないんだよ。気を引き締めてついてきて！」

ほら！ ほらほらっ！ アスナさんに怒られちゃったじゃないか。

そして、リユーさんは注意はしなかったものの、表情が無表情。お怒りかもしれないぞ。

リユーさんは表情の変化があたりないので、何を思っているのが怖い。いい人ではあると思うが。

そんなこんなで、俺達は今『彷徨いの森』を駆け抜けている。

この状況を説明するならば、

あの後、アスナさんの家から、直ぐに俺たちは森へ出発する事になった。

そうして、俺たちは今に至るわけだが、森の中を駆ける俺たちを先導するのはリユースさんとアスナさん。

リユースさんは、元ダイヤモンド冒険者。

アスナさんは現役のミスリル冒険者らしく、二人ともこの森には何回と来ており詳しいらしい。そして、エイナさん曰くこの中で二人が一番実力があり、任せられるということで、こう決まった。

そうして、森を駆けているわけだが、魔物にも出会わず暇で、俺は少し考え込んでいた。

それは、あまり今、必要性のないことなのだが、『何故、リユースさんが同行したのか』ということだ。

先程はむやむやに終わってしまったが、俺はリユースさんを警戒しなくてはいけないだろう。

アスナさんはまだいいんだ。目的というか、参加した理由が、分かる。

それはリユースさんに頼まれたからだ。彼女は依頼を受けてやっているだけに過ぎない。そう思える。

けど、リユースさんは違う。自分から同行をお願いしてきた。

それが、どうも俺の中で腑に落ちない。

なぜなら、このエイナさんの言う彼を救う話に、彼女への何もメリツトも感じなかったから。

彼女にとって、あくまで俺とエイナさんは他人。

そんな俺達二人に、わざわざ危険を犯してまでラフコフと戦おうとするなんて、余っ程のお人好しか何かしらの理由があるワケありに違いない。

当然、彼女が、前者とは思えない。

なら、彼女はもしかしたらラフコフ敵なのだろうか。

その推論を信じたくはないが、わざと俺たちをおびき寄せているなら警戒しておかなければならない。

そう考えてしまうのもしようがない。

けど、そうでなくて欲しいと思った。

もしかしたら、彼というか、牡羊座の勇者と知り合いで惚れているとかのラブコメ展開がありそうだしな。

どうせ、あれだ。

牡羊座の勇者って《ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか》に出てくる主人公。



おそらく今の音の発生源は、牡羊座の勇者だろう。それも金属音が鳴るといふ事は対人戦だということがわかる。

なんでも、この森にいたクマが金属のように固かった覚えはない。この世界に変異種とかがあるなら分らないが、少なくとも対人戦だと判断できる。故に牡羊座の勇者は、ラフコフと交戦中と推測できる。

「……ここからは慎重に行きましょう」

リユーさんがそう俺たちに忠告する。

その言葉に俺たちは黙って頷く。その通りだと思う。ここから先は敵がいる。そう思っていて間違いない。

エイナさんは、思わず息を呑んでいる。

「見張りの敵がいなければ良いんだけど……二人とも、私とリユーが先行してくるから、待ってて」

アスナさんはそう言ってリユーさんと共に、音を立てずに茂みを出た。

すると途端に、リユーさんとアスナさんの頬から少量の血が流れる。

その直前、俺には微かにだが発砲音が聴こえた気がした。

「あれえ？ 少し手元が狂つちまつたなあ。まさか少し動揺しちゃうとは。いやいや。けど、誰が予想出来たか。まさか、あの【疾風】と【閃光】が侵入者だったとはなあ」

「……ちっ」

「運が悪い。嫌な敵に会ったわね。まさか、コイツがいたなんて」

リユーさんは舌打ちをし、アスナさんは真剣な口調でそう言った。対して相手はこちらを煽るような巫山戯た口調。声質から男だろうか。

「こんな周辺監視と魔物の間引きで退屈していた所に、こんな美味しい獲物が自ら来るなんてねえ！」

「——っ！ 二人とも今すぐ後ろに飛んでっ！」

何かを察したアスナさんがそう叫んだ瞬間、言われた通り、俺とエイナさんは茂みから出て後ろに飛ぶ。

すると、

——バンバンツ!!

と何かを発射する音が聞こえた。否。何かではない。

茂みから飛び出した俺の目には、その正体がハッキリと見えてしまっている。

「銃……」

「へえ？ そこ隠れていた君。そうそう、その腐り目の君。この武器知ってるんだ？」

異世界の地球出身の俺が知らないはずがない。

てか、腐り目だと？ 初対面の人にそう言われたよ。この野郎。本当にはちまん、泣

いちやうからね。

「最近出たはずの新兵器のはずなんだけどなあ。まあ、いつか。雑魚は引つ込んでろ」  
銃口が俺に向けられる。

——や、やばい。打たれる!?

心臓の鼓動が高まったのが聞こえた。人間、真に緊急事態に陥ると動けないものだ。  
現に俺は銃口に向けられるという恐怖に動けなかった。

そして、銃声が森に鳴り響く。

「させませんっ!」

次の瞬間、リユーさんが俺の前に疾風の如き現れ、武器である木刀を振った。

「ちっ。腕は衰えてねえーようだな」

「ええ。貴方達に復讐するためですよ……赤目のザザ」

赤目のザザ……。

その名前を俺は知っている。

SAOでも居た人物だ。それでいて、ラフコフのメンバーの一人だ。

あと余談で、彼の弟だったと思うが……アサダサンアサダサンの連呼は、やはり印象に残っている。

「へへっ! その名は昔のやつだ。今はなあ」



『アス・ガン』って呼ばれてんだよッ！冥土の土産に覚えときなッ！」

そうして戦闘が始まった。

リユーさんは、木刀を携え風魔法で多彩な攻撃を仕掛ける。だが、それは尽く躲されたり、銃弾によって弾かれてしまっている。そして、アスナさんも果敢に攻め込もうとしているが、荒れ狂う銃弾の嵐に奴に近づく事が出来ていない。

そう、始まってすぐに分かる。戦闘素人の千葉県民ですら分かるんだ。明らか俺達が劣勢だと。

……あと現実逃避したくなるんだが、異常な事に、奴から放たれる銃弾は、直線的に動かない。

なんかいきなり曲がったりする。

その証拠にリユーさんとアスナさんの周りには既に何十発もの銃弾があらゆる方向に飛びまくっている。

……ほんと、どうゆうことだよ！

「——っ！ っ!? ……くっ！」

「ひひっ。風魔法と銃弾の組み合わせはどうだい？ この技は名付けて『銃ガンの舞ダンス』。まるで銃弾が踊っているようだろう？ ひひひっ！」

二人とも銃弾が掠ったりして服や肌が少しずつ損傷を始めている。未だに致命傷が

ないのが、幸いな状態だ。そんな激しい戦闘を俺とエイナさんはただ見つめることしか出来ていなかった。

「案外、俺には銃の才能があつたみたいでねえ。ラフコフ内でも一番の使い手のさ」  
——どうすれば、いいんだ。

聞くまでもないのは分かっている。助けないといけないことは分かっている。

けど、けど……身体が動いてくれない。

——このままだと……援護しないと……っ!!

すると、突如、視界の端からリユーさんとアスナさんの元へと近づくと人影がうつすらと見えた。それも一つではない。

数えるに五人。それらが俺には見えた。

そうして気が付く。

これらの五人は、隠密系統の《スキル》を使用していると。

多分あの人影は、隠密系統の何かしらの《スキル》持ちの人間によるもの。だから、周りにいるリユーさんやアスナさんは、その存在に気が付いていないんだと思う。

そんなスキル持ちと同類である俺でなければ、気付かなかつたと思う。

そして当然、彼ら五人の狙いは想像できる。

そんな人影達は、今も音を立てないように静かに静かに銃弾の間を上手く躲すよう

に、二人へと近付いているのだ。

——このままだと……リユースさんとアスナさんが危ないっ！

そう思った次の瞬間の俺の行動は早かった。殆ど無意識であった。

「《闇ダークの炎クフレイムに抱かれて消えろマスマス》」

闇炎の支配者としての黒いローブへと衣装がチェンジする。そうして、湧き上がってくる力の奔流。

この力に溢れる感じが心地よい。

「《闇魔法》」

そうして俺は《闇魔法》を使った。けど、この時の俺は何も考えていなかった。何一つ理解していなかった。

ただ、目の前にいる敵からリユースさんとアスナさんを早く救いたかった、だけ。それだけだった。

俺の《闇魔法》で無我夢中で力いっぱい黒い火の玉を作った。そしてそれを、思いつきり投げ飛ばした。それらは投げた瞬間に五つに分かれ、人影に向かって飛んでいく。

そうして、リユースさんとアスナさんの元へと近づいていた人影達は、躲す暇もなく、その全てに黒い火の玉が当たり、その人達は為す術もなく弾け飛んだ。

そう、弾け飛んだんだ。

——ぐちよ。

勿論、その影響により、付近の地面に転がり落ちたり、潰れたものがあつた。それは俺の目の前にだつて落ちている。

——…………え？　これは…………なんだ？　え？　え？

…………本当は分かっている。既に理解は出来ている。けど、受け入れたくない。

「へえ、こりやひでえな、腐り目くん。ここまで破裂させるなんて中々の《闇魔法》の使い手だ。まさか、アイツラを一撃でころすとはね。あれでも彼ら、そこそこ強かつたんだけどなあ〜」

…………ころす？　なんだよ、それ。何言っているんだ。

「…………気が付きませんでした。比企谷さん、ありがとうございます」

「…………いつの間に…………比企谷くん、私からもありがとう」

……え？　ありがとうございます？　ありがとうございます？

違うんだ。確かに救えたかもしれないが違うんだ。違うんだよ。リユーさん、アスナさん。

俺は、俺は、俺は……

「ひひっ、全くいい殺しっぷりだったな。敵ながら気持ち良かったぜ」

——殺したんだ。俺は、人を……殺したんだ。

たとえラフコフの人間だったとしても、俺は俺は……

「あ、ああ、ああああああ、ああああああ」

「ひ、ヒキガヤ君？　大丈夫なの!?　正気を保って！　ヒキガヤ君っ！」

「お？　おお？　ひひひっ」

頭が真っ白になる。そうして思わず、倒れるように意識を失いそうになる。

——ああ、これらは俺がやったのか。

今になって後悔し始める。

全くもって、俺には覚悟というものが出来ていなかった。

そもそも、俺は対人戦なんて人生で一度もした事がなかったんだ。

森で魔物を倒すのはできた。それは、運が良かっただけに過ぎない。

情けないことだが、俺は悪者として、言葉で人を傷付け、敵意を向けさせることは出

来ても、

人を物理的に傷付け、殺すことは出来ない人間だったんだ。

……こんなの所詮は甘えだ。正義のためにと理由付けをしても、殺さなくてはならない敵だった。

俺は正しい事をしたんだ。そういう考え方もある。

けど、違う。違うんだ。

全く知らなかった。俺はそういう人間だと。

あの人に理性の化け物と言われた俺の本当は、こんなにも脆くて弱い。

忘れていたんだ。俺は臆病な人間だと。

俺は《闇の炎に抱かれて消えろ》ダークフレイムマスタを無意識のうちに解除する。

あ、ああ。人に魔法を使う事が、こんなにも身体が震え、怖いものだったのか。

怖い。殺してしまった事もだが、俺にそんな力がある事も怖い。何よりも怖い。この異常な力も怖い。

「……まずい」

すると、リユーさんが煙幕を張る。辺りが真っ白の煙に包まれ、見えなくなる。

そうして、敵の銃弾の間を縫って俺に近づいてきていた。

——やめてくれ。こんな俺に近付かないでくれ。

「……二人とも、一時撤退をしましょう。今の彼は危険です。これ以上、刺激させるわけにはいかない」

「私もそれに賛成。今の彼は危険すぎる」

「……ヒキガヤくん。そうですね、分かりました。一刻も早くつー！」

三人は小言でそう言い、俺はリユースさんの片腕で抱えられる。

——やめてくれ。触らないでくれ。

俺は必死に抵抗しようと腕の中で暴れた。けど、上手く力が入らない。

三人は、互いに目で見つめ合って、霧の外へと走り出した。

「ちっ……おい、お前ら、奴らが逃げる。追えッ！」

そう後ろから奴——デス・ガンの声が聞こえる。銃声だつて聞こえる。

……ああ、何やってんだろ。もう嫌だ。何も考えたくない。

俺は、俺は……人を五人殺した。

## 第13話：おれは、ひとごろし

「ハアハア……ここまで来れば、大丈夫でしょう」

あの子の事はあまり覚えていないが、俺はリユーさんに抱えられ、ラフコフの追っ手から逃げていた。

その間、森の道無き道を駆け抜け、上手く奴らを撒くことに成功したようだった。

けれど、俺を抱きかかえていたりリユーさんや慣れない全力疾走にエイナさんは疲れが見えていた。現役のアスナさんでさえ、気を抜くと疲れが出ている始末だった。

そんな中、そんな追っ手から逃げ切れたという喜びは俺の中にはない。自己嫌悪する気持ちでドンドン強くなる。

「……比企谷くん、大丈夫？……じゃない、よね」

アスナさんが俺のことを心配するような言葉を発する。

大丈夫か……ああ、大丈夫、なわけがない。

………ツ  
!!!!?!!!!



遠くから何かが……くる!?

「アスナさんっ！ 危ないッ！」

「え？」

俺は咄嗟に抱えていたリューさんから脱し、俺はアスナさんを突き飛ばした。

三人ともそんな俺の突然の奇行に理解が追いついていないようだ。

そして次の瞬間、俺の腹部に激痛が走る。

俺の腹部には銃弾が貫通した跡があつた。

……知りたくもなかつた。銃に撃たれるのって痛すぎんだろ。

その跡からは絶えず血が体外へと溢れ出てくる。

「ッ！ 比企谷くん!? こ、これは……は、早く治療を！ 治療をして！ エイナさんッ

!!

「——ッ!!!」

「は、はいッ！ 《治療》<sup>ヒール</sup>！」

エイナさんは、そんな血を流す俺を見て、直ぐに駆け寄つて《治療》をかけてくれた。

けれど、

「……なんで、なんで傷口が塞がらないの!?!」

俺の傷口はエイナさんの影響を受けず、未だに血が出てきている。

……このままだと俺は……一体どういうことだ。

「あれえ?　なんで、腐り目くんが撃たれてるわけ?」

すると、上から奴——「デス・ガンの声が聞こえた。

すぐに俺らは臨戦態勢に移る。撒いたはずだと思っていたが、撒けてなかったようだ。

「《能力》の対象者を【閃光】にしたはずなのにな……ま、いつか。どうせ、全員殺すわけだし」

「……っ!　赤目のザザ……比企谷くんは私を庇って……もう十分苦しいはずなのに私を庇って……腹に傷を……私は……私はお前を許さないッ!」

「……エイナさん。比企谷さんの治療は続けてください。私がコイツを始末します」

「分かりました。リユースさん、アスナさん!　ヒキガヤくんは任せてください!」

そう言われ、俺はエイナさんに連れられ後退する。

「俺の事をお前やコイツ呼ばわりとは自分の身の程をまだ分かってないらしいなあ、雑魚共が」

二人とデス・ガンは互いに見つめ合い、一触即発の雰囲気だ。

「《治癒》《治癒》《治癒》」

そんな中、エイナさんは自分の魔力を気にしないかのように、俺に《治癒》を重ねがけしてくれる。

……俺の為に、そこまでの事してくれなくてもいいのに。

「ん？ おいおい。まじかよ……ひひっ、あはははははハッ！」

すると、デス・ガンはそんな俺らを見ながら、派手に笑い出す。

「……何を笑っているのですか？ 殺しますよ」

リユーさんは風の刃を場違いにも笑うデス・ガンに向かって飛ばす。けれど、それをデス・ガンはまた見えているかのように地面に降りることで躲す。

その地面に降りたデス・ガンにアスナさんが、一瞬で近付いて細剣で刺突しようとするが、それも続けて全て躲され、アスナさんは腹に蹴りを食らって元の位置に戻された。

そして、そんな二人を無視するかのように「デス・ガンの笑いは止まっていけない。そして、攻撃を続けようとする二人に向かって、

「ひひっ、だつてよく。あんなの見せられたら笑わずにはいられないっしょ」

何ともないように先程のリューさんの問いに答え、俺とエイナさんは奴に指を差される。

「だつて、あの腐り目くんは、俺の《能力》によつて撃たれた。その《能力》である《死を導く銃弾》は、対象者を追い続け、貫き、永続的に傷口を治癒できなくなる。そんな《能力》に、ただの《治癒》が効くはずねえーだろうが。それなのに必死こいて治せうとするハーフェルフを見てたら……なんか笑えてきてね。ひひっ……」

永続的に傷口を治癒できなくなる《能力》か……はは、どうしようもないじゃないか。

ああ、俺は、出血で死ぬ、のか。

「っ！ 比企谷くん………なんて、ことをツ！ そして、そんな比企谷くんを一生懸命救おうとしてくれるエイナさんに向かって………なんて、ことをツ!!」

「……アスナ、落ち着いて」

「落ち着いてなんていられないよっ！ 大体リューはなんで落ち着いてるの!? おかしいよっ！ だつてだつて………そんなの………だつて………」

「アスナッ！ いい加減しっかりしなさいっ!!」

突然のリューさんの大声にアスナさんはビクツと肩を震わす。

「アスナ……どうか、冷静さを忘れないでください。私達が冷静さを失ってしまったら、比企谷さんを助けられるのも助けられなくなってしまう。それでは……奴の……ザザの思う壺……私でさえ怒りでどうにかかなりそうです」

リューさんは、そう言つて直ぐに「デス・ガン」に向かつて木刀を構える。アスナさんはリューさんの言葉を受けて俯いたままだ。

けれど、直ぐに顔を上げ、

「そう、だよね……リューありがとう。どんな時でも冷静に。今すぐにアイツを殺して、《能力》の効果を消し去ればいいだけのことッ！」

そう言つてアスナさんも「デス・ガン」に向かつて細剣を構えた。

「ひひつ、怖いねえ。けど俺が、おいそれと敵を懐まで近づかせるわけねえだろ？」

『銃ガン・ダンシクの舞』をもう一度味わわせてやろう」

「……アスナ。ここは私に任せてください」

「分かった。なら、その後は私に任せて」

無数の銃声が森に響き渡つた。多数の銃弾が踊るように二人に迫っていく。

それを、リューさんとアスナさんは二手に分かれ、銃弾を躲すように必死に駆け回る。

そうして、リューさんは駆け回りながら、

「今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤ちりばむ無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人ともがら。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾とく走れ。星屑の光を宿し敵を討てっ！

【ルミノス・ウインド】

戦闘と並行して詠唱をし、彼女の最高火力の《能力》である【ルミノス・ウインド】を発動した。

この《能力》は、周囲に展開させた風をまとわせた光球を無数に放ち攻撃をする魔法。俺は『ダンまち』を読んだりしていた時にでも見た事がある。

そうして、放たれた光球は『銃ガン・ダンシングの舞』の無数の銃弾を一気に一掃し、デス・ガンの元へと飛んでいき、デス・ガンに直撃した。

デス・ガンのいた辺りには砂煙が舞い、大きなクレーターが出来ている。控え目に言つて……強い。流石はリユースさんといったところだ。

けれど……

「や、やりましたか!？」

それでやられる程、デス・ガンは弱くはなかった。

「ひえ、痛い痛い。かなり大ダメージを食らっちゃったぜ。流石は【疾風】。過去に名

を馳せた冒険者だけはあるぜ」

砂煙が晴れると、そこには全身に傷を負ったデス・ガンがいた。けれど、その表情は何処か嬉しそうだ。

奴はその後、ちらつと後ろを確認して、

「……今ので何人が殺られたか」

小さく何かを呟いた気がした。

そんな棒立ちをするデス・ガン。二人だつてこの機会を逃すわけがない。そのリュウさんの攻撃後を狙っていたアスナさんが、デス・ガンに一気に近づく。

そして、アスナさんの細剣は奴の項うなじに刺突した。

そうして、デス・ガンは刺突によつて姿が消えた。

「……………え？」

「君達は馬鹿だなあ、此処だよ、ハハハ」

奴は木の幹の上にいたのだった。



「《治癒》《治癒》《治癒》」

……エイナさんがずっと《治癒》を掛けてくれる。けど……

「……エイナさん、もうやめてください。魔力の無駄遣いですよ」

「い、嫌です！ やめませんっ！ だって、このままだと、出血多量で……ヒキガヤくんが死んでしまいます！」

……死ぬ、か。決して死にたくはないが……償うためには……

「……別にいいですよ、俺なんて」

「——っ！ ダメです！ 絶対に駄目です！」

けれど、エイナさんの《治癒》が俺に効くことはない。

そうだ……誰も俺には効かないんだ。

だから、そんな泣きそうな顔で俺を見つめないでくれ、エイナさん。

「つ……効かないというのなら！」

エイナさんは、思いつきり自分自身の服を破る。そうして、俺の撃たれた腹部にその服の布地を巻き付け、強く縛る。



「これで、少しはマシになったはずです。ヒキガヤくん、軽々しく命を、別にいいだなんて言わないでくださいっ！」

確かに、これなら古典的だが多少の止血になるだろう。

……そして、エイナさんが俺に詰め寄り、強くそう言った。

軽々しく命を……か。

……軽々しく命を五つも消し去った俺にそう言うのか。

ああ、駄目だ。思考がマイナスに向かってしまう。何を言われても、俺はあの罪から逃れられない。

逃げたくても、それを俺自身が許してくれない。

……俺にはどんな言葉も響かない。

「……キガヤくん！ ヒキガヤくん！ 聞いているんですか！」

「え？ ……ああ、聞いている、きいてる」

——ズドンッ！

すると、前方で大きな地鳴りが聞こえ、砂煙が舞っている。

「リユーさんっ！ アスナさんっ！」

俺とエイナさんは無意識に思わず、叫んでしまう。

「はあ……はあ……」

そこには胸を押さえるリユーさんとアスナさんがいた。息も切れていて、服や皮膚には銃弾の通った跡が目で見えてわかる程に現れている。

そんな二人の前方にはデス・ガンがいる。

「所詮、あの【疾風】と【閃光】でさえ、この程度の実力か」

デス・ガンはそんな二人を冷たく見下ろしている。

そうして、銃口をリユーさんに向けた。

——このままだと、リユーさんが本気で危ない。

俺は何もかも忘れて、一気に加速してリユーさんの前へと躍り出た。

——バンッ！

……また、腹か

……腹が……痛すぎるッ。

「比企谷さん?!?!」

「……はあはあ……比企谷くんッ」

「ヒキガヤくん!!!」

咄嗟のことに三人とも俺の名を呼んでいた。デス・ガンでさえも、いきなり現れた俺に驚いているように感じた。

「まだそんな速度で動くとはね……君の力が気になってきたよ……腐り目くん」

そう言つて、俺を見つめてくるデス・ガン。見られていて気持ちが悪い。

「……作戦変更だ。殲滅に移行する。全員、待たせたな。襲い掛かつて、いいぞ」

……え?

ぞろぞろと辺りの草むらや木の上から、人が現れてくる。そんな光景に俺は絶望した

ように、周りを見渡す。

気が付かなかった。

銃に撃たれて、冷静さを欠いていた影響で索敵を怠っていた。

……俺のミスだ。

「ひひっ、いつから敵が俺だけだと思ってた？」

……そうだ。デス・ガンだけがラフコフメンバーではない。

あの時、俺が、ラフコフメンバーを五人殺した時だって……追っ手から逃げていた時だって、それは分かっていたはずだ。気付けたはずだ。

この状況は、かなり絶望的じゃないか。

敵は見渡した限り十人程度はいるように思えた。それに、まだ、隠れているかもしれない。

俺たち四人は、一つの場所に集まった。

……けど……どうすればいいんだ。

「……やるしかありませんね」

「……そう、だね。やるしかない」

「……そのようですね。来る時にも言いましたが、弓なら任せてください！」  
「はい。比企谷くんの事もお任せしますよ」

リユーさんとアスナさん、エイナさんは既に戦う覚悟が出来ている。

というか、リユーさんとアスナさんは敵のど真ん中に突入しに行つた。既に敵の戦力を削りに頑張っている。

けど、俺は……俺は……

「ヒキガヤくん！ 私の後ろに！」

うじうじしていた俺はエイナさんに手を取られる。そうして、エイナさんの後ろに連れてかれる。

……ああ、駄目だ。覚悟が、決められない。

エイナさんは既に弓を放って敵と戦っている。その姿は勇ましく、堂々としている。

俺とは違う。全く違う。

「よしっ！ 一人行動不能っ！ ……この調子で……」

けれど、これは数の暴力。

多数VS4人。いや実質3人だ。

この布陣が崩れるのは目に見えていた。

「っ！ 三人同時に!？」

——っ！ 敵が三人同時に連携しながら俺たちに向かってきた。このままだと、エイナさんが危ないッ！

けど、けれど、倒すには力を……力を使わないと……

「……やるしかない」

エイナさんは必死に弓を三本四本と同時に放っている。その弓たちは一直線にラフコフに向かっていくが、

……威力が足りない、んだろうな。

弓は余裕で弾かれてしまっている。

……本当に……このままだと……

ああ、そうして、俺達は敵の一人に接近を許してしまった。

そして敵は何もしなかった俺を標的としたようだ。

俺は……俺は……

接近した敵の一人を無我夢中で殴り飛ばした。多分、顔面を思いつきり殴ったと、思

う。

「ヒキガヤくん!？」

エイナさんが心配したように俺の名を呼んでいる。けど、それは敵にとって都合なこと。

——っ！ あと二人っ！

残りの敵二人はそんな俺に意識を向けて無防備になってしまったエイナさんを標的にしたのか、エイナさんの背後に飛びかかっている。

俺がとつた行動は考えるまでもなかった。

咄嗟にエイナさんの正面に移動する。

そして、その二人を先程と同様に、思いつきり殴り飛ばした。

……あは、ははははは、ははははははは

「ヒキガヤくん、助かり……っ」

……なんだろう。手が……熱い。

ははっ、なんだ、これ……なんだよ、これは……

……俺の手って、いつから真つ赤だったけ？

俺はゆつくりと視界を上げ、殴り飛ばしたラフコフの方を見る。

その視界の先には、木にせき止められて力無く倒れる顔面の潰れた三人の血だらけな人間がいた。

……ははっ、はははは、

ああ、まただ。俺はまたやってしまったんだ。

殴り飛ばした時、骨を破壊する音が聞こえた。感触が伝わってきた。それに、脳が覚えてる。俺はすっかり見ていたから。

自分が三人の顔を殴り潰した記憶を。俺は知っている。

「……ヒキガヤくん、泣いて、いるんですか？」

背後からエイナさんの声が聞こえる。

泣いて、いるか。こんな醜い顔、彼女には見せられないな。

こんなの……泣かずにいられるわけないだろ。



——っ!!!

「へえ〜？ 腐り目くん。人殺して泣くんだ？」

「っ!! 赤目のザザ！ なんで、ここに！」

俺の隣にいたエイナさんは今気づいたようで、咄嗟に手に持つ矢を射ようとした。

対して俺は、情けないが、戦える気分ではなかった。故に奴が近づいても何も出来なかった。

「……ハーフエルフ。邪魔だ」

次の瞬間、デス・ガンは俺の隣にいた。

い、いつの間に……。

ズトンツという大音量の衝撃音が後ろから聞こえる。見ると、エイナさんが痛々しそうに木に叩きつけられていた。

そして、俺の横で脚を上げているデス・ガン。

……ああ、エイナさんは、奴に蹴られたんだな。

俺は……ただ見ている事しか出来なかつたんだ。

「……腐り目くん」

すると、俺の肩に手がかけられる。俺は反射的にその手を置く人物を見た。当然、横

にいる全ての元凶。

その赤い両眼に俺の目が赤い奥へと吸い込まれていく。

『デス・ガン』

俺の目と鼻の先に『デス・ガン』がいる。

そうして、優しく包み込むように、微笑む彼は俺に向かって囁いた。

「沢山、人を殺したね？」

沢山……そうだ、俺は八人も人を殺した。否定はしない。絶対にしてはいけない。それが、事実なのだから。

……俺は殺してしまったんだ。

俺は……俺は……どうしたら……俺は……

「君もこれで、僕達の仲間だね」



## 第14話：闇

私が敵を殲滅している間、そのラフコフ達に気を取られている隙に、赤目のザザを比企谷さんの元へと近づけさせてしまったのでしよう。

私がふと比企谷さんの方を見た時には、奴——赤目のザザは比企谷さんの隣にいました。

そうして、奴は彼に何かを囁いている。

——奴は彼に何を吹き込んでいるのですかっ!?

「彼から手を離しなさいっ!」

咄嗟に私は彼——比企谷さんの肩に手をかける赤目のザザに向かって《風魔法》の見えない風の刃を放ちました。

尤も奴はまたもや、それを見えているかの如く躲します。

——くっ、流石に、この追加の敵の中では相性が悪い。

まだ、敵のラフコフメンバー達はいる。

その為、彼らを見下す訳にはいかず、防御にも《風魔法》を回さなければいけない、攻撃の《風魔法》に力が籠らない。本来ならもつと殺傷力もコントロールも手数も増やし強くできたでしょう。

けれど、それが出来ない。

それ程までに奴との戦闘は不利です。

それとつい先程から、何だか寒気がします。

そうしてふと視線の端にいる比企谷さんに目がいつてしまいます。

……なにか、嫌な予感が、します。

「おれは、ひとごころし、だ」

するとその予感が的中したのか、比企谷さんが、自信を人殺しだと呟いたのが、私にも聞こえました。

そして、その次の瞬間、

「ああ、あああつ！ うわあああああああッ!!!」

比企谷さんを中心に黒く濁った闇の渦が生み出されたのです。それは徐々に勢いをつけながら周りに広がっていきます。既に比企谷さんの近くにいた何人かの敵達はそ

れに飲み込まれて……………

消えていきました。

「ひひひっ！ これは良いッ！ 見事なまでに暴走しやがったぜッ！ ああ〜これは勿体ない。これをアイツらは見れねえ〜のか。ああ〜これをPふOHいの奴にも見せたかったなあ〜」

そう言いながらザザは何時の間にか、既に避難のためか木の上に移動しており、暴走する比企谷さんの様子を面白可笑しそうに見ていました。

——気に食わない。

……私は場違いに騒ぐ赤目のザザに向かって、先程とは違い、防御を無視した攻撃重視の《風魔法》の風の刃を放ちました。

周りに絶えず動き回り私に攻撃を仕掛ける敵なんて、無視します。

それにアスナなんて、既に敵を無視してザザに向かって走っていつています。

そんな敵より、比企谷さん。

そうアスナから、そんな言葉が漏れそうになるほど、私には感じました。

けど、それは私も同じこと。

防御よりも、奴を殺す事の方が重要なものだから。

当然、数回の敵の攻撃が私の身体に刺さります。剣にだって何度か斬られました。私

は何とか致命傷だけは避けて、奴に向かつて攻撃し続ける。

……痛い。けど、けれど！ 奴を生かして逃がすわけにはいかないっ！

けれど、それらは殆ど奴に当たることは無く、尽く躲されていきます。

しかし、少なからずは当たるわけで、何発かはザザの体に当たっていたので、ザザの体力を削れたことでしょう。

けれど、この後の赤目のザザの行動は私にとって予想外でした。

「さっきから、ちよろちよろとうぜえんだよ！ ほんと消えろ目障りだ。はあ……脇役の雑魚はすっ込んでろ！ 《死を導く銃弾》」

そう言つて、私に対して銃口を向けました。

まさか、ここで《能力》が私に使われる事になるとは……

そう自覚したその瞬間、全身を死の恐怖が駆け巡る。

——し、死ぬ。

直感でそう感じられました。これでも私は勘が鋭い方なので良く当たります。それが、最大限の命の危機を知らせてきます。

時が数時間、いや永遠に感じられます。

私は思わず、目を瞑ってしまいました。

そうして、

「……ちつ。このタイミングで此処まで広がってきやがったか」

奴は私に向けていた銃口を比企谷さんに向けました。私はその行動に思わず言葉を漏らしてしまいます。それは、アスナも同じだったと思います。

「や、やめ……」

そんな私達の嘆きも悲しく、パンツという激しい銃声が鳴り響きます。

その銃弾は目にも留まらぬ物凄いスピードで、赤い線を描きながら、比企谷さんに向かっていき、闇に包まれる比企谷さんに当たった瞬間、消滅しました。

……え？ 消滅？

「……はあ？ 今のが効かねえのか。こりや、だいぶヤバいな」

私も、あの比企谷さんの闇が相当に危険なものだと理解させられました。

——早くどうにかしないと……。

「……ちつ。くそつ！ ここにいたら俺が危険か。早く逃げねえと……こいつらは、まあいいか」

「え？ あ、ま、待ちなさい！ 赤目のザザッ！」

アスナが逃げようとするザザに叫んでいます。

——くつ、逃がすまいと思ってたのに逃がしてしまった。

既に赤目のザザは森の奥へと消えてしまっている。逃げ足の速いことだ。



私は追いかけたい衝動に駆られたが、何とか踏みとどまり、比企谷さんの方を見た。その間にも比企谷さんの周りの闇は広がり、私のいる所もいつまでも安全だとは限らなさそうだ。

そうして、ふと思ったことがあった。

「……エイナさんは？」

「リユーさん！ た、助けてくださいいいい」

そこには比企谷さんの闇から必死に逃げるエイナさんがいました。先程、彼女は視線の端で木に叩き付けられていましたが、何とか走れる程度には大丈夫なようで安心です。

全く何をやっているのやら。

けれど、無事で良かった。

私はエイナさんの後ろに迫り来る闇に向かって《風魔法》を放ちました。

けれど、結果は消滅。

——やはり、私の《風魔法》でも駄目でしたか。

それに、「ルミノス・ウインド」でもあの闇を消し去ることが出来るかは怪しい。それ程までにアレは異常だ。

「エイナさん。私に捕まってください」



のです。

比企谷さん……。

何故彼がこうなってしまったかは、凡そですが想像はつきまします。一見捻くれているように見えて、真に心優しい方なのでしょう。

私と違って。

——助けてあげたい。

そう思っても私は彼に対して、もっといえれば彼の闇に対して無力。

というより、彼にあんな強力で危険な力があつたこと自体、驚きました。あれ程の力、私よりも何倍も強いでしょう。

そんな彼を、当然私は止めることが出来ない。

自然と私の拳が固く握られ、皮膚に爪がくい込んでいたのか血が少し垂れている。

「比企谷くん……」

「ヒキガヤくん……」

アスナとエイナさんがそう呟いたのを私は聴き逃しませんでした。きつと彼女らも比企谷さんの事を助けたいと思ひ、自分の無力さを嘆いているのでしょう。

そうして……

——っ!? こ、これは、危ないっ!!

比企谷さんの叫びがより一層高まったのが分かります。このままだと……その時、私は直感的に再び危機を感じました。

まさか、この空中にまで及ぶというのですか!?

驚きを隠せない。それでいて、ここから早く離れなければと思いました。

「リユー……これは、ここにも闇が来るよ!?!」

「……そのようです。エイナさん! 逃げますから、しっかりと捕まっています!」

! 一刻の猶予もありません……っ!?!」

「え? は、はいいい! って……え?」

あ、ああ、間に合いそうにありませんね。

先程の銃弾と同じくらしいの速さで闇は私達——正確には全方向に爆発的に拡散されました。その広がりには森をも飲み込んでいく。

そんな強大な力を前に私が出来たことは、ずっと愛用している《風魔法》の力を全力で、防御に注ぎ込み、私達三人をを高圧の空気で包み込み、一種のシエルター化するくらいでした。

けれど、それだけでも間に合って良かった。

そうでなければ、私達は今頃、消滅していたでしょう。



「はあ？　なら、あれを俺よりも近くで防ぎ切ったってか？　それならお前も、俺と同じかそれ以上に瀕死じゃないと可笑しいだろ……」

「んん？　ああ……あの闇の爆発が起きる前には、撤退してたからな。既に森の外から見てたよ」

「まじかよ……逃げる前に俺にも教えてくれよお〜」

そう言つてジョニーは項垂れる。対してザザは笑顔だ。

「ひひっ。そうは言つても、ジョニーはあの少年に夢中だったんだから、しよーがねえだろ」

「……そう言われると反論できねえ……けど、あの少しで殺せそうだったんだぜ？　そんなんヤル気のボルテージが上がりまくるに決まつてんしよ!!」

ジョニーは興奮気味になり、そう語つた。ジョニーにとつて少年は憎しみの対象。

あと少しで殺せそうだったのに、引くことなんて許せなかったんだらう。

「はあ……そのおかげでジョニーが連れていった俺以外のラフコフメンバーは全員死んだ。それもあの爆発で。少しは労わつとけ」

「へえ〜あいつら死んだんか。ま、いいだろ。所詮はそれくらいのカスだったただけだし」

そのジョニーの返答に、予想していたかのようなザザは「ひひっ」と毎度のように愉しそうな笑みを零す。

そんなザザにジョニーは、

「くくつ、逆にあいつらが死ぬ時、どんな顔をしていたか見てみたいまであるぜ！」

と言つて胸を張つた。

そうして、壁に手を付けながら、ゆっくりと歩き出す。そんなジョニーについて行く形でザザは後ろを歩く。

まだ、異常者同士の会話は終わらない。

「ひひつ、やつぱりジョニーは狂つてんなア〜」

「当たり前だ。てか、それはお前もだろ、ザザ」

ザザはそんなジョニーに「まあな」と短く答える。ザザにとつて、狂っているという事は褒め言葉のようなものだ。

狂つてなんぼの世界。狂しか集まらない組織。

いや、狂しか存在することのできない環境ともいえる。

そう、それが、上位冒険者ギルドである

『ラフィンコフィン』。

殺人ギルドだ。

二人は真つ暗な部屋を出る。開けた扉はギシギシという音を廊下に響かせる。二人は薄暗い廊下を奥へと向かって歩いていく。

「全くこれから、P.O.Hポウエイに今日の事を報告するのが、楽しみだぜ」

ジョニーはそう嬉しそうに呟く。それに同感なのか、ザザもまたそれに同意する。心做しか赤い両眼がいつもよりも増して明るくキラめいている気もする。

なぜなら、

二人は今日、久しぶりに自分達を超えるかもしれない強者——狂人に出会ったのだから。

……あの闇の爆発。

あれは危険だ。触れたものを消滅させるほどの高エネルギー魔力。凄まじいなどの言葉では決して、その魔力量の偉大さを表し伝え切ることには出来ない。

それこそ、森ひとつを消すことの出来る存在。

恐ろしく期待のある人材だ。



「ひひつ、きつとP o Hも氣ぶにいるだろうしな」

そういった才能ある人材を、ラフコフは求めている。それはP o Hも同じこと。

——それに、個人的な予想だが、我れがギルドのギルドマスターは、彼を氣に入るだろう。あそこまで歪な奴を俺は見た事がないし。

あんなにも強いのに、あそこまで脆いとは。

彼は本当に面白い。

ザザとジョニーは共にそう思った。

ならば、早めにこちら側に取り込んでおくべきだろう。我がギルドの為にも。世界の為にも。

「次に会う時が楽しみだなあ……腐り目くん♪」

## 第15話：言葉は偽りで出来ている

——ここはどこ、だ？

突然なのだが、俺——比企谷八幡は困惑している。

それもそのはずだ。考えてもみてほしい。

いきなり、目が覚めたら真っ暗闇の中にいたんだ。そう、ただ真っ暗闇の中にいるだけ。身体は動く。

けど、視界は真っ暗。何も無い。

……意味がわからないだろ。

世の中には暗闇恐怖症みたいな人がいるらしいし、そんな人がこんな状況にあったら、これは怖すぎて意識失うまであるんじゃないか？

つてくらい、今の俺も怖い。あと、不安。

俺は駄目元でもう一度、周りを見渡してみるが、やはり真っ黒だという事以外何も無い。

言うなれば『無』。無の闊しか広がっていない。

そんな世界が俺の目の前に広がっている。

——WHY? なんでおれは、こんなところにいるんだ?

その疑問の答えは当然、未知としか言えない。

ほんと俺は此処で何をしているのだろうか……こんな無駄な事をする為に異世界に連れてこられ……生きていくわけではない。

………ん?………いせかい………異世界?

ああ、そうか。俺は異世界に来ていたんだったな。

そう気付くと俺の中で何かがスッポリと収まった気がした。

——…んで? 何をした? 何かあったか?

何をしたんだったかな。思い出せそうで、思い出せない。

つい最近の記憶のはずだ。けど、なんか、テトに出会って、森を出て街に着き、それから……俺、何してたっけ。

買い物? いや、違う気がする。

なら、食事? いや、出来なかつたような気がする。

じゃあ、寝たのか? ……眠った覚えがない。少なくとも、今日着いたんだと、思う。その街に……いや、森に、か?

——ははっ、分かんねえや。

頬を冷や汗のようなものが流れる。汗を流すような心当たりは無いはずなんだけどな……。

当たり前だが、俺は手でそれを拭おうとした。

けど、それは出来なかった。することが出来なかった。

だって、俺は見てしまったから。

必死に忘れよう……考えないようにしようと心の奥底で思っていた現実を見てしまったから。

何故なら、俺の手は真つ赤に染められていた。

赤く紅い俺の手……それが今の俺の手。

……ああ、あ、ああああああアアアア

俺はその場に倒れ込んでしまう。それを避けようとする抵抗すら今の俺には残っていないかった。

そうして、今も尚、声にならない声が溢れ出てくる。

……はあはあ、分かったよ。思い出した。思い出してしまった。

俺の手は血塗られて……

「はは……俺の手はこんなにも汚れてるのか」

そうだった。現実逃避をしていた。

気持ちが悪い。見ていたくない。そう思い、避けていた。

俺は急いで、手に付いたソレを振るい落とそうとする。

けれど、

「っ!? 落ちない! なんで、くそっ! 落ちないっ!」

手に付いた血は一滴すら落ちない。思いっきり振っても、何も変化せず俺の手に引っ付いている。

……ああ、そうか。理解した。この罪は永遠に振る落とせない。目を逸らす事さえも許されない。俺は、この血塗られた手と向き合って生きていかなければいけない。

だから、この手の血は一滴すら落ちないんだな。

ははは、そうだよ、分かっている。

俺は最低な人間だ。

俺は、俺は……人を八人殺した男。

人殺しをした比企谷八幡だ。



「んう……知らない天井だ、な」

目が覚め、視界に映ったのは真っ白な天井だった。

それを見て俺は、俺のぼっち人生で一度は言ってみたかった台詞を口走ってしまった。

スッキリしたか？ 答えは全く。

今の俺の気持ちは、最悪だ。

反吐が出る。吐き気だつてする。

嫌だ、嫌だ。やめたくても止まらない。俺は自己嫌悪をひたすら続けてしまう。

もう真っ白な天井が真っ赤な天井に見えるまでである。

本当に馬鹿らしい。そんなはずなのに……どうしようもなく視界が血のように赤い。赤い世界に俺の世界は塗り替えられていた。

「……比企谷さん」

「……ヒキガヤくん」

「……比企谷くん」

すると、横から声をかけられた。声でわかる。本当は見たくない。現実逃避していた。けど、身体は正直みたいで……俺は頭を横に向けてしまった。

そしてそこには案の定、

「お目覚めになられたのですね」

リユースさんとエイナさん、アスナさんがいた。

そうして思い出してしまうあの光景。

俺が人を弾け飛ばしたあの光景……殴り殺したあの光景……

——つつつ!!!

それらが、頭の中をムカデのように駆け巡り、あの光景を鮮明にフラッシュバックさ

せる。

「……酷い顔、してるね」

アスナさんにそう言われた。本当にその通りだと思う。俺の今の顔は通常よりも腐り切っているだろう。

その言葉には肯定しできない。

「……三日ですよ。ヒキガヤくんが気を失ってから、三日が経ちました」

……三日。その間、俺は眠り続けてたのか。

「……比企谷さん。何故気を失っていたのか。覚えていらつしやいますか？」

「——っ」

「……その反応……覚えていようですね」

リユースさんの問いに俺は震え上がる。

ああ、忘れるはずがない。目覚めた瞬間から自覚している。忘れたいが、忘れない……忘れられないだろ。

手が……体全身が小刻みに震える。

「ああ覚えてる。俺は人を殺したんだ……八人も……八人も、だ」

「っ！ け、けど！ そ、それは……」

「……そうですね。貴方は人を殺しました」



そう言ってリユーさんは俯いてしまう。アスナさんも俯いて静かにしている。エイナさんは、そんな暗い雰囲気には戸惑っている。

——気にしなくてもいいのに。

すると、リユーさんは再び顔を上げ、俺の目を真っ直ぐに見つめてきた。その表情は無表情ながら、どこか緊張しているようで、真剣そのものだった。

「……その後について話しましょう」

それから俺はリユーさんに、何があつたのかを聞かされた。

それは、俺にとつてとても胸が苦しくなるものだった。

俺は人を殺した事により、暴走。

自我がない状態で《闇魔法》を無差別に放つたらしい。それも大規模に四方八方。その闇に飲まれたものは、なんであろうと消滅していったらしい。

その効果で、俺は彷徨いの森は消滅させたようだった。

そして……俺は自分の力で、

リユーさんとエイナさん、アスナさん——三人すらも殺してしまうところだったようだった。

「……私達は安全の為に、今、アスナのギルドに匿って貰っています。そして、このギルドと私達は、共に一ヶ月後の夜、ラフコフの本拠地に奇襲を仕掛ける計画を秘密裏に進めています。私達はそこで、奴ら——ラフコフを全員……殺して壊滅させるつもりです」

そうして、リユーさんの説明は終わった。

……ああ、ダメだ。もう俺の体の震えが止まりそうにない。

三人を俺は殺してしまうところだったということを、知ってしまったから。何も知らないところで、沢山の人をさらに殺してしまったから。

それに……俺は……俺は……

「……めん……めん……」

「——っ!!」

涙がこぼれる。止められない。本当にいつ以来だろうか、俺が泣いたのは。

「めんなさいめんなさい……リユーさん、エイナさん、アスナさん。俺は、最低な人

間だ」

「そ、そんな、こと……」

「そんなわけない！ 比企谷くんは私達を……」

「……」

「いやっ！ あるんだッ！ 俺は……俺は最低だ」

駄目だ。もう止められそうにない。

「俺は自分勝手に暴走して周りを巻き込んだ。それでリユーさんやエイナさん、アスナさんを殺してしまうところだった。それだけで重罪だ。そ、それに、もしかしたら三人は死んでたかもしれない。そんな未来だってあったはずだ。少しでも《風魔法》の展開が遅かったらリユーさん達は間違いなく死んでいたっ！ そう、そうなんだ……俺は三人も殺そうとして……」

「けど、けれど、ヒキガヤくんは自我がなくて……」

「ち、違うよ。そんなの……もしもの話で……」

「……」

なんでそんな庇うような事を泣きながら言うんだ、エイナさん、アスナさん。

三人を俺は一步間違えれば殺していた。それは紛れもない事実なんだ。

「いや、関係ない。俺は貴方達を殺そうとした張本人だ。自我がないとかそんなのは関

係ない。殺しかけた事自体が真実だ。だから……そんな殺人鬼の俺に……そんな目で見ないでくれ。早く、離れてくれ。触らないでくれ。お願いだ」

「……っ嫌です！ 嫌だ！ 嫌だ嫌だ！」

「……私も……それは嫌だ」

「……ッ」

……三人ともそんな泣きそうな目で俺を見ないでくれ。

というか、エイナさんは泣き止んでくれ。涙で顔がくしゃくしゃじゃないか。

アスナさんは、躊躇泣く最低な俺の手を握らないでくれ。ほっといてくれ。ほっといてくれても、いいじゃないか。

俺はアスナさんに握られた手を振りほどく。

「……俺は自分が怖い。恐ろしい。この体の中には俺も知らない程の力が宿っている。それも人を簡単に殺せる程の力。それが、何より怖い。把握すらしていないし、制御することもままならないこの力が、もしかた他人を傷付けることに向いてしまったらと思うと、怖くて体が震える。現にもう人を殺している。俺の力だと……簡単に人は死んでいくんだ。そんな力が宿っているんだ、俺の中には……だから俺は怖い。俺自身がそんな強大な力に飲まれて、人を殺す化け物になってしまうのが……恐ろしく怖いんだ」

……だから、俺から離れてくれ。

「そんな弱くて脆い人間が、俺だ。比企谷八幡だ。だから、もう俺に関わらないでくれ。一人にさせてくれ。俺は人と関わりたくない。人と関わっちゃいけないんだ。そんな最低最悪の化け物なんだ。誰一人救えず、暴走して人を殺していった。きつと、彼らには彼らの人生があったんだ。たとえ、奴らが殺人集団だとしてそれは変わらない……ああ、俺はなんで選ばれてしまったんだろうな」

……願うなら俺以外の誰かを勇者として連れてきて欲しかった。俺はこんな力なんて、求めてなかった。

なんで、俺だったんだろうな。

「……ああ、俺は俺が大嫌いだ」

……そんな俺に、もう関わらないでくれ。

「……比企谷くん、貴方は私を助けてくれました」

アスナさんはそう言って再び俺の手を握ってきた。

……はははっ。俺はやっぱ腐っている。

俺みたいなやつが、その先を求めるだなんて。

やはりその先を求めてしまうのが、人という生き物なんだろうな。情けないが、俺は  
……

「確かに比企谷くんは人を殺してしまったかもしれない。けど、」

ああ、俺は思う。これからアスナさんに、慰められたりでもするのだろう、と。

これは……そうだな、文化祭の屋上の時に少しだけ類似しているように見える。ソ  
ー  
スは俺。

状況としては、アスナさんは……葉山だろう。

それで俺が……相模……かよ……。

「けれど、そのおかげで、私が今ここにいるんだよ？ 比企谷くんのおかげで、私は今生  
きているの」

自分を認めてくれる人の存在が欲しいと願う。言わば、自己承認欲とでも言おうか。アスナさんに慰められるのは、その証明に繋がる。

——ははっ、さぞ、必要とされるのは心地よいだろうな。

「比企谷くんが、私を守ってくれたから。守ってくれる力を使ってくれたから、私は今も生きていますよ」

現に俺は、そう感じてしまっていると断言出来る。けど、違う。そうじゃないんだ。

——そんな偽物、求めていないんだ。

言葉なんて偽りで固められて出来ている。

矛盾しているかもしれないが、俺は……慰めなんて欲しくない。欲しいと体が感じているが、心はそんな物、求めていないんだ。

結局のところ、『本物』があるのかもしれないのに。

「……だから、そんな泣きそうな顔しないで。私は……笑顔の比企谷くんを見たいよお」

そんな偽物を貰いたくない。

だから、これ以上俺に関わらないでくれ。

——喋りかけてこないでくれ。

——もう嫌なんだ。やめてくれ。

……俺の力を求めないでくれ。



## 第16話：そんなに欲しいなら勧誘してみろ

「……人って嘘をつくと、案外分かりやすいものなんですよ、アスナさん。もう言いたくもない嘘を言うのはやめてください」

「……え？ ……ひ、比企谷くん、何を言ってる……」

「……っ」

ああ、俺は心の中で思っていた事をアスナさんに口走ってしまった。本当は言うつもりはなかった。けど、彼女の言葉を俺は真っ向から否定してしまった。

嘘だと。あなたの言葉は嘘だと言ってしまった。

アスナさんは、そんな俺の言葉が予想外だったのか、困惑しているようだった。リュウさんは何か悔しそうに自身の唇を噛んでいた。エイナさんは……まだ泣いている。

「さっき言ってみました、笑顔が見たい？ 何言っているんですか。笑えるわけないじゃないですか。まず誰得ですか、俺の笑顔。気持ちが悪い。そんな思ってもないと、無理して言わなくてもいいんですよ。俺、気にしてないですから」

「え……そ、そんなことっ」

俺の笑顔なんて、見たいと思うか、普通。

——思わないだろ。

けど、なんでそんな事をアスナさんが言ったのか。

——アスナさんが、俺の笑顔を求めたからか？

ははっ、自惚れるのもいい加減にしろ、俺。

そんなの誰も得しない。アスナだって、何の得もしない。馬鹿馬鹿しい。これこそ、嘘だ。虚言だ。

……なら、次に考えられる答えは、簡単だ。

「……そんなに俺の力が欲しいんですね」

「っ!？」

「……っ」

……当たり前だ。アスナさんとリユースさんの目が大きく見開いた。驚いた証拠だろう。

「……やっぱりそうか……凶星のようだな」

「ち、ちがっ……」

「違うわけないだろッ!!!」

俺は思わず、否定しようとするアスナさんに対して怒鳴ってしまった。

「一ヶ月後、お前らはラフコフの本拠地に奇襲を仕掛けるんだろ？」

「そ、そうだけど、そ、そうじゃなくて……」

そう、一ヶ月後、三人はラフコフの本拠地に奇襲を仕掛けると、先程言っていたのを俺は覚えている。

本拠地を叩くんだ。それもアスナさんの所属しているギルドが主体となつての大規模な作戦。確か、森に行く前もアスナさんがそんなことを言っていたような気がする。

そして、俺は知っている。

ラフコフは、冗談抜きに強い、と。

実際にラフコフの幹部であるデス・ガンを見て、俺自身そう思ってしまった。

けれど、そんなラフコフを簡単に葬り去つた男を俺は、エイナさんは、リユーさんは、アスナさんは知っている。知られてしまっている。

「ああ、分かっている。お前らの反応で分かっただよ。お前らが求めているのは、俺の力だ。俺じゃない。俺の力……ラフコフを簡単に殺せる俺の強大な力だろ」

俺は勇者だから、ステータスも高い。スキルだつて能力だつてある。チートだ。チートになつてしまったんだ。そんなチートの力を三人は見ている。

「ははっ、そんな俺の力があれば、さぞ、奇襲時には楽して戦えるんだらうな、アスナさ

ん

「ひ、比企谷くん、そういうことじゃないの。も、もう……そんなことというのは……」

俺がこの力を奮って戦えば……沢山のラフコフを殺せば、いいんだろうな……そうだろう。

俺がラフコフを殺せば殺すほど、お前らが相手する敵が減るんだから。

都合がいいだろうな、俺の力は。

「……だから、もう無理して嘘つかなくても大丈夫ですよ。俺の事なんてどうでもいいんでしょ。どうぞ、好き勝手に勧誘してくださいよ、この殺戮兵器としての俺を」

そう、俺は、都合のいい殺戮兵器だから。

「さあ！ やれよ！ 誘えよ！ ははっ、俺に人を殺させてくださいよッ!! アスナさんッ！」

「あ、ああ……ああああ……ひ、比企谷くん……グスツ……ごめんなさい……ごめんなさいね……わた、ヒグツ……し……のせいで……こんな……」

「っ!!!」

……だからさ……そんな、泣かないでくれ、アスナさん。

リユーさんだつて、唇を強く噛みすぎですよ……血が唇から少し滲み出ているじゃないですか。

「……さあ、ご自由にどうぞ。俺は、俺の本心は変わりませんけど。俺の人を殺す力が欲しいんですもんね。役に立ちますもんね。そりや……説得してでも戦いに参加させたくなるわな。俺が起きるのを待つてくださり、ありがとうございました」

——俺のことなんて、誰も見てやしない。見ているのは、俺の力。  
誰も俺を必要とはしていない。

はあ、俺も馬鹿馬鹿しくなっちゃったな。  
期待しているのか。いや、してない。諦めている。

本当になんで……俺が、ここに連れてこられたんだろうな。願うなら、来なくなかったよ。こんなところ。

「……ははっ、やっぱ俺は、俺が大嫌いだよ」

小さくそう再び呟いてしまう。

俺は自分が嫌いになってしまった。こんな汚れてしまった俺のことが、大嫌いだ。もう、いい。なんでもいい。自暴自棄だ。

……はははは、すまないが、乾いた笑顔しか出せないや。

「……比企谷さん」

すると、今までずっと黙っていたリユースさんが俺の名前を呼んだ。目と目が合う。目が少し赤い気がする。

……ははっ、どんな虚言を俺に言うんだろうな。

パンツ！

痛い……頬が痛い。俺はリユースさんに頬をビンタされた。

「……比企谷さんが自分のことを大嫌いと言うならば、私は……比企谷さんよりも、もつともつと自分の事が大嫌いです」

……この人は、いきなり、何を言っているんだ？

「貴方が自分のことを嫌い……最低な人間と言うなら、私はもつともつと最低な人間です」

……本当に何を言っているんだ。意味がわからない。さっきの俺の話からどう繋がって、そうなっているんだ。

「何故、なら……」

リュウさんが口を噤んでいる。唇はふるふると震え、視線だつて俺の目から外し下を向いている。

言いたくないのなら、言わなければ……いいじゃないか。

けれど、覚悟を決めたようにリュウさんは再び俺を見る。

「……私は人を沢山殺してきている。それこそ、貴方より多くの命を殺めてきた。この両手では数えきれない程に。それも結局は自己満足……私自身の復讐の為だけにです。そして、そんな人殺しを貴方のように悔やんだりなんて、私はしていません。むしろ

ろ、私はその逆。私はその為に生きていたようなものだから。それが、私——リユー・リオンです」

俺は驚きのあまり目を見開いて絶句してしまった。

「……」

「……信じられませんか？」

……信じるか……そうだな……信じられないだろうな。

「……ああ」

何も言えない。

けど、俺は、俺も……

「……そんな私にとつて貴方は光って見えるんですよ。この世界は命の重さが軽い。人はすぐ死ぬ。弱肉強食の世界。そんな世界で貴方は死を……たとえそれが悪人であれ誰であろうとも、悔やむ。苦しむ。そんな貴方は素晴らしい人だ。その事に胸を張って生きてください。そうすれば、彼らも報われるはずだ。そんな人を思いやれる貴方は良い人だ……そして……何より貴方は……私の恩人なのですよ？」

……ほんと何言っているんだ、リユーさんは。そ、そんな嘘っぽいこと言われても、俺は、俺は……

「だから、そんな現実逃避するような事しないでくださいっ！ 聞いているのですか！



何ですか！　なんで私達の言葉が信じられないんですか！　そんなに……そんなに私達のことを信じられないんですかっ！」

信じるか……そんな、こと……

「比企谷さん！　私達を……貴方が守ってくれた命である私達を……信じてくださいよ！！」

「ツ!!……おれ、は……信じられない。俺たちは……たかが会ったばかりで一度共闘しただけの他人同士だから。分かりあっているとは、信じきれるとは言えない」

「……」

ああ、そうだ。俺たちは一度共闘しただけ。それも、少しの間。

それ以上でもそれ以下でもない。俺とリュウさんとエイナさんとアスナさんの関係はそれだけだ。

それだけなんだ。それだけなんだ。

それだけなんだ、よ……俺たちは。

「……治療してくれた事は感謝する。だから、もう出ていってくれ。俺はもう、お前達と話すこともない。だから、早く……出てけよっ」

「……ヒグツ……ヒキガヤぐん……」

「……比企谷くん……ごめんなさい……ごめんなさい」

「……分かりました。では……また来ます」

……はあ？ また来るだと？

何を言っているんだろう、このエルフは。

俺の事を理解しようとするのもいい加減にして欲しい。

俺は彼女の『また来ます』という言葉に思わず、激情を抑えきれなくなるところだったが、それを必死に押さえつけた。

「……ああ、じゃあな」

そうして、無理して作った笑顔を表に出しながら、別れの言葉を言い放った。

その言葉に三人は返事をしなかった。重い足取りで部屋から出ていっただけだった。

その後、部屋には平静が訪れる……はずもなく、

しばらくして、咽び泣く一人の少年の悲痛の声だけが、苦しげに部屋に存在していただけだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「はあああああああああッ!!!」

「なっ!?!」

下から叩き上げるように振るわれた的確な剣筋により、相手の剣が空中に弾き飛ばされる。見事なまでの剣技だ。

「……ま、参りました」

それにより、剣も無くなり丸腰となった相手は両手を上げ降参した。こちら側の勝利だ。

その決闘終了により、勝利した彼は直ぐに剣を鞘に入れ、こちら側に拍手を贈る男の方へと視線を移す。

その男は、勝利した彼の結果に満足をしたような顔をしていた。無論、拍手も賞賛している感を受けた。

「いや〜お見事だったよ。回復したばかりだと言うのに、クラディール君を倒してしまふとはね。私の想像していたよりも遥かに君は強かったようだ。これは……流石は、というべきかな」

そうして、その男はそう言いながら近づいてきた。

そんな男に彼は申し訳なさそうな顔をしながら、

「いえいえ、これくらいなら身体が付いてきてくれるんで。回復させて頂いたこと、改めてありがとうございます。お陰様で、怪我をする前よりも身体が動く気すらしますよ！」

「ふむ、それは何よりだ。是非うちのヒーラーにでも礼を言つてやつてくれ」

そう言われ彼は「はい！」と元気よく返事をした。全く昨日まで意識を失っていた人

とは思えない。

そんな彼は少し間を置いた後、真剣な表情で男に聞いてみた。

「それで……一ヶ月後……俺を連れて行って貰えますか？」

連れて行って貰えるか、それが彼の今の望み、すなわち先程の決闘をした意味でもあるから。

彼にとつてこれは、それ程までに大きな意味を持つ。

そして、その答えは、

「ああ、勿論だ。今は出来るだけ戦力が欲しい。それ程までに戦えるのであれば問題もないだろう。私は君を歓迎するよ。それに、」

男は彼の目の前に右手を差し出す。彼はほっとしたように安堵を浮かべた。そうして、そんな彼を見て、男は笑顔で、

「まあ、牡羊座の勇者である君を連れて行かないなんて選択有り得なかったしね」「……っ!?! え……知っていたの、ですか？」

そう、先程の決闘で勝利した彼——牡羊座の勇者である。

今まで誰に対しても勇者だと打ち明けたことの無かったので、牡羊座の勇者は男の言葉に尚更驚きを隠せなかった。

——どこでバレた。というか、バレてどうなる。そもそも、この世界の勇者とはなんだ。俺はなんで勇者になったんだ……

疑問は尽きない。

それもそのはず。彼には誰も状況を教えてくれる人がいなかった。不安で不安でしようがないのが、本心なのだ。

聞きたくて堪らない。

「ああ勿論。その右手が何よりの証拠だ」

「この羊の紋章、ですよ。これが、証拠なんですか……なら、俺が勇者だと知っていて尚実力を見る為にわざと知らない振りをしていた、と。案外、意地悪な所もあるんですね」

「ははは、悪かったと思っている。怪我から回復したばかりだと言うのにね。けれど、驚いたよ。まさか、こんなに若い君がああ御伽噺に出てくる勇者の一人だったなんてね」  
そう言いつつ、男は肩を窄めた。けれど、どこか嬉しそうでもあった。

「なんでも、うちの中に、勇者伝が大好きなギルドメンバーがいてね。その子が担当として看病に来た時、君の右手にある紋章を見て、気付いたようだ。そうして、そこからはあつと言う間に勇者は噂として広がり、遂には私のところまで聞こえてきたよ。『勇者の復活だっ！』ってね。けれど、まあ、その件については、勝手に噂として広めて

しまった事、悪く思っている。ギルドの団長として謝罪させてくれ。本当にすまなかった」

「え……いい、いえ！ そんな！ 知られて減るものでもありませんし！ 何とも思ってもらえんよ」

「……そうか。なら良かった。では、ラフコフ討伐の短い間だが、よろしく頼む」

そんな男——団長から差し出された手と自身の手を交互に見た後、牡羊座と団長は互いに握手を交わした。

「共にラフコフを壊滅させよう」

「は、はい！ これ以上、奴らの好き勝手にはさせられません！」

互いに目標とすることは一致している。

『ラフコフ』

一ヶ月後に予定されているラフコフ本拠地への奇襲作戦。秘密裏に進められてきたこの作戦で、極悪殺人ギルドを壊滅させるのだ。

気合が入る。手に力が籠る。

牡羊座の勇者の目に闘志が滾る。

「絶対に……絶対にっ！ ラフコフを倒しましょうね。ヒー……スクリフさん！」

「ああ、勿論だ。キリトくん」

ここに交わし合う握手は、さらに強く固く結ばれた。